
軍人が幻想入り

シュヴァルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軍人が幻想入り

【Nコード】

N3776R

【作者名】

シュヴァルツ

【あらすじ】

ここは、幻想郷。人間、妖怪、神が共に暮らす世界。ここに新たな人間が送り込まれようとしていた。誰が何のために……

軍人が幻想入り

どうも、シュヴァルツです。

今回は東方シリーズに挑戦してみたいと思います。ただ、あまり東
方には詳しくないので（キャラの名前位しか）もし違う所があつた
りしたらご享受願いたいと思います。

また、キャラの性格などが違う場合もありますのでそれはご了承
ください。それと、東方に詳しい方がおりましたら、ぜひ、基本的な
事でもよろしいので教えて下さい。お願いします

初めてやるシリーズなのでここはおかしいだろという場面も出てく
るかもしれませんが。それが嫌な場合は進まないのが吉だと思います。
それと、恋姫と学園黙示録の方も書いているのでできれば読んでほ
しいなと思います。

あらすじ＋主人公の説明

「ふわ〜眠いな〜」

ここは日本のとある軍事基地、日本が自衛隊から正式に日本軍として発表されてから早十年となった。

おっと、名前を名乗ってなかったな俺の名は戦場孟（いくさば、つとむ）だ。この日本軍に入隊してから5年にはなる。

階級は軍曹だ。兵科は普通科と機動科、航空科を通っていた。今は、武器運搬のために73式特大型トラックで自分の基地に輸送中だった。・・・しかし眠い

なぜ眠いかと言えば朝一番で上官に叩き起こされて司令部に行つて見ればアメリカ軍から最新の武器が運ばれるから持つてこいとめんどくさい事を言ってきた。

しかも、なぜか武器の携行が認められている。

さすがにヤバいもんじゃないかと思ひ一度は拒否権を出したのだが、長官からO・H A・N A・S Iと言う名の脅迫を受けて半ば強制的に任務を受けることになった

「くそ〜、あのクソ親父め〜偉い立場じゃなかったら俺がやってやるのに〜。あ〜あ、本当にめんどくさいな〜」

俺は愚痴をこぼしながらも自分の基地に向かうのであった。最新の武器を載せて・・・

とその時だった

「ん？なんだ、ありゃあ」

空を見て見ると一筋の流れ星が見えた。空は雲ひとつない快晴だといふのに

「こんなに晴れているのに流れ星が見えるなんて……何か悪い事でも起きなきゃあいいがな」

俺がそんな事を言っていると突然！

ピカー……………！！！！！！

突然、その流れ星が光ったのである

「うわ！？なんだこりゃ……………」

そこで俺の意識は飛んだのである

（主人公説明）

名前：戦場 孟

日本軍に所属するごく一般的な兵士である。体力は自分の基地の中でも一番か二番的な所、銃器、車両はあらゆるものが使いこなせる。普段は、電動ガンなどに改造や試射をするガンマニアである。武器の改造、解体、整備も行える。ただ、頭は凡人程度のため軍曹から上に昇進できないでいる。

また、面倒な事には首を突っ込まない奴だが性格が困っている奴を見るとどうしてもほっとけないタイプの奴なので結構、いろんなトラブルに巻き込まれやすい

年齢は二十歳で身体つきは筋肉質である。射撃の能力は全国大会に出場する並みの腕前であるが本人はそれを鼻に掛けないタイプでいるんな奴から慕われやすい

とまあ、こんな感じでやって行きますのでよろしくお願いします。

・・・・・・・・・・・・・・・・どじょ?

「う、うん。あれ?」

目を開けるとそこは・・・・・・・・

「知らない天井だ」

俺は確か、自分の基地に武器を輸送中だったが、それで、流れ星が光ってそこで気を失って・・・なのになぜ、こんなところに?

「気が付いたか」

振り返るとそこには尻尾が九本ある女性がお盆を持ってやって来ていた

「(何かのコスプレか?)あのですいません。どうして、自分はこんな所に?」

俺はコスプレイヤーのお姉さんに聞いてみた

「あなたが道中で倒れているのを家の者が見つけてね。私が連れてきた。」

そう言ってお盆の上にあるお茶を俺に渡してきた。俺は素直に受け取った

「それはありがとうございます。」

「いえいえ、いいですよ。それより……」

「？」

「あなた、外来人でしょ」

（外来人？なんのことだ？）

「あの～外来人とは何でしょうか？」

俺は聞いた

「外来人とは外の世界からやって来たものの総称です。」

「外？」

どついう事なんだ？さっぱりわかんね～

「ここはどこなんでしょうか」

俺は聞いてみた

「ここは幻想郷」

「幻想郷？」

「幻想郷とは人間、神、妖怪が共に住んでいる集落みたいなものです。また、外の世界とは隔離されています。」

「な!？」

俺は驚いた。だって、そんなことあり得る筈ないじゃん、神や妖怪が人間と共に暮らしてるって言うんだぜ！？おかしいにもほどがあるだろ

「いやいや、どういうことだ？全くもってさっぱりわかんね」

俺は混乱していた

「落ち着いて下さい。慌てても何も変わりません」

コスプレお姉さんが言った

「そ、そうだな。慌てても仕方ない。状況確認だ」

そう言っただ俺は自分の経緯を話した

「……なるほど、それは災難でしたね」

「まあ、な」

「それで、これからどうするおつもりですか？」

「どっぴっていっぴとっ」

「どちらにしろ。あなたは帰るんですよね」

「まあ、そうなるな。でも、帰る目処がないからな。探すしかないだろな」

俺はそう言ってお茶を飲んだ

「それならば、帰る目処が立つまでここでゆっくりして行くと言い

「え？いいのか？」

「ええ、私達もそこまで野暮ではありません。」

「そうか。すまないな。そうだ、まだ、名前を名乗ってなかったな。俺は戦場孟だ」

俺はそう言ってお手を差し伸べた

「私は八雲 藍だ。よろしく」

そう言ってお彼女も手を出してくれた

「それと、さつきから覗いてる奴、そろそろ出て来てもいいんじゃないか？」

「あら、ばれてたの？」

「さつきから気配がうまくりだったからな。」

「そう」

俺が後ろを振り向くと空間に変な割れ目ができていた。その中から女性が出てきた

「あら、驚かないのね？」

「一度、驚くと瞬間になれちまうんだよ俺は」

「そう。」

「あんだ、名前は？」

「私は八雲 紫よ。そこに居る藍とは主従関係よ」

そう言っつて紫は扇子を広げた

「主従関係？」

「簡単に言えば私は紫様の式神です。」

藍が答えてくれた

「ふーん。そうなんだ。てことはあそこに隠れてる奴も？」

そう言っつて障子の裏に隠れてる奴を見た

「そうよ。彼女はちえん。ちえん、こっちに来なさい」

そう言っつとちえんがこっちにトテトテと来た

「は……初めまして」

彼女が挨拶をした

「おう。初めまして」

俺も代わりに挨拶をする

「その子が見つけてくれたんですよ」

藍が言った

「そうか。ありがとうなちえん」

ナデナデ

そう言つて俺はちえんの頭を撫でた

「い、いえそんなことは……／＼／＼」

ちえんは顔を赤くして俯いた

「そうだ。俺の車は……」

「」「車？」「」

三人は分からない表情と言つた感じだった

（こつちじゃあ技術は発展してないのか？）

「なあ、ちえん、俺が倒れてた付近に何か大きなものはなかったか？」

俺はちえんに聞いてみた

「え？えつと、確かありました。」

「じゃあ、倒れてた所まで案内してくれるか？」

「はい、いいですよ」

そう言つて俺達は移動した。

（青年・少女移動中）

俺達はある森の前に辿りついた

「ここか？」

「はい」

「なら、この近くに……あつた」

近くに75式特大型トラックが傷一つなく止まっていた

このトラックは74式の発展版で大容量の積載量と大人数の人員が乗れるように設計されている。そのため、運転席の部分が6人乗りの4ドアとなっている

「傷一つないな。不思議なもんだ」

「孟」

「なんだ？藍」

「これがその車という物なんですか？」

藍が聞いて来た

「ああ、これはその中でも大型の類に入る物なんだ」

「くくへくく」

そう言つて三人は不思議そうにトラックの周りを見た

「じゃあ、とりあえず動けるかどうか確認をしなきゃな」

外見は無傷でも中身がやられている事もあるからな

そう言つて俺は運転席に乗つた

カチツ キュルルブオン！ブオン！

「くくキヤ！？くく」

三人は驚いたようだ

「おーし、動くな。皆、乗って行かないか？」

「いいんですか？」

藍が聞いて来た

「ああ、歩くよりはだいぶ楽だぞ。」

「そうね。じゃあお言葉に甘えさせていただきますわ」

そう言っつて紫が乗り込んだ

「じゃあ、ちえん、のろつか？」

「はい、藍様」

そう言っつて二人も乗り込んだ

「よし、出発進行！」

ブオオオオ

俺達は一気に八雲家へと進んでいった

とりあえず、今後の方針だな

あれから、紫の家で宴会を開くことになった。まあ紫なりの心遣いだと思う（本当は紫自身が宴会を開きたいだけ）。

宴会には八雲家の他に冥界の西行寺幽々子とその庭師、魂魄妖夢が来た。俺は軽く挨拶を二人にした。

それから、どんどん夜は更けていき宴会は盛り上がって行く、

く八雲邸 縁側く

「ふうく」

俺は縁側で月を見ながら酒を飲んでいた。その時だった

「隣、いいですか？」

声を掛けてきたのは藍だった

「ああ、どうぞ。酒は飲む？」

「ええ、頂こう」

そうやって俺は彼女の杯に酒を入れた

「何をしていたんですか？」

藍が聞いて来る

「いや、月を見ていてね」

「月、ですか？」

「ああ、外の世界じゃあこんなにきれいに映らないしな。街の明かりとかで遮られてしまっている。」

「へえ」

そう言っただけで彼女は酒を一口入れる

「あつちじゃあ何をなさってたんですか？」

「こつちの言葉であるかな？軍人だ」

「軍人？」

やはり、分からないみたいだ

「まあ、簡単に言えば国を守る人ってとこかな？この幻想郷は誰が管理してる？」

俺は聞いてみた

「こつちには博麗 霊夢という巫女が現在、幻想郷を守っています。」

「そう。つまりはそれと同じ役割なんだ。ここよりもでっかい国を守っていたんだ」

「そうなんですか。それはすごいことですね」

藍は感心したように言う

「まあ、他にも俺と同じような人間はたくさんいるからな。」

「そうですか。」

「それにしても良いよな。」

俺はつい言ってしまった

「何がですか？」

藍が聞く

「俺ってさ生まれた時から家族はいなかったんだよ。親戚の爺さん、婆さんに育てられて今日まで至る。だから、家族の喜びとかはさ分らないんだよ」

酒も入っているからか、それとも、月のせいかは分からない。ただ、なんとなく言ってしまった

「そう……ですか」

藍は俺の話を聞いて若干、暗くなる

「ああ、でも、慰めてほしいとかじゃあないんだぜ？自分でも分からないうちに話してしまっただ。できれ……」

ガッ

俺はその時、何が起こったのかわからなかった

「へ？ら・・・藍さん!？」

「いいんですよ。悲しい時は泣いても・・・代わりになってあげましょう」

藍は優しい言葉で俺を慰めようとしていた

「・・・・・・・・すまん・・・・・・・・」

俺は藍の胸で静かに泣いていた

（数分後）

「落ち着きましたか？」

「ああ、ありがとう」

俺は何か吹っ切れた気がする。藍のおかげだな

「いえいえ、いつでもどうぞ」

藍は笑顔で言ってくれた。この笑顔に惚れてたのは秘密だ

「らん、孟くなにしてるの？こっちにいらっしやいよ」

紫が酔っ払いながら言ってくる。他に皆も酔っているようだ

「はいはい〜今行きますよ〜。行きましょつか。孟」

「ああ、」

俺達はそう言っつて宴の中へと入っつて行く

.....

〜翌日〜

「フワ〜。昨日の宴会はすごかつたな〜」

昨日はハチャメチャな宴会になつてしまつた。妖夢が暴走したり、紫がスキマからいろんなの持つてくるし（スキマは外の世界と繋がつてゐるらしいのだが、なぜか、俺は通れなかつた。）そんなこんなで朝早くから藍とちえんと俺で後片付けをすることになつた。

幽々子と妖夢は昨日の内に帰つて行つた

〜宴会の間〜

スー

「おはよう、」
「孟」

「おはようございます。孟さん」

「ういゝおはよう二人とも、藍、俺はどうすればいい？」

「そうですね。では、この桶に水を入れて来てくれませんか？」

そう言っつて若干大きな桶を渡してきた

「ああ、分かった。水は外の井戸からでいいんだよね？」

「はい、」

それから、一通りの掃除を終えて朝食の準備を始めた。その間、俺はトラックに向かい、車両の点検や銃の整備を行うことにした

「それにしても、謎なんだよね」

あの流れ星は一体なんだったんだろう？紫が言っつには異変だとか言っつてたけど

そう思いながら整備をしていると……

「孟さん」

「ん？お、ちえんかどうした？」

ちえんがいつの間にか俺の近くに居た

「いえ、何をしてるのかな？っと思って」

「ああ、点検だよ」

「点検？」

「そう。簡単に言うと汚れとかがないかを確認するんだよ」

「へえ〜大変ですね〜」

ちえんは感心したように言う

「そうでもないさ。しっかりやれば、故障する事もないしな。そう
だ、ちえん運転席をしてみるか？」

「いいんですか？」

「ああ、お礼も兼ねて」

「見たいです！」

元氣よく返事をした

「そうか、じゃあついてきてくれ」

そう言つてちえんを運転席まで案内する

〜運転席〜

「わあ〜」

ちえんは目を輝かせながらハンドルを握っていた

「どうだ？」

「すごいです！これが、外の世界の物か」

「どうやら、大喜びしてくれたようだ

「そうかそうか。それは良かった」

「ちえーん！孟！ごはんが出来たぞ！」

藍が大きな声で言ってくる

「はい！藍様！」

「分かった！今、行く！」

そう言っただちは部屋へと向かった

（宴会の間）

「さて、私は紫様を起こしてくる。ちょっと待っていてくれ」

そう言っただちが部屋から出る

・・・数分後

「おはよ」

紫が欠伸をしながら入って来た

「おはようございます。紫様」

「おはよう、紫」

「さて、全員そろった事だし・・・いただきます」

「・・・いただきます」

藍の声を合図に朝食が始まった

「なあ、紫」

「な〜に〜?」

紫はめんどくさそうに返事をする

「今日は外を出ても良いか?」

「外?」

「ああ、帰れる方法と後は周辺地域の確認、かな?」

「う〜ん、それなら、まずは周辺を確認してからでも帰るのは遅くはないと思うわよ?」

「そうだな。だったら、そっちをさきにするか。」

なんとか、今後の方針が決まった

「藍、今日は買い出しの日よね?」

紫が藍に聞いた

「はい、紫様」

「それだったら、ついでにあなたも見て来なさいよ。行くのは人間の里だし」

「そうだな。それがいい」

そう言つて俺達はとりあえず、朝食を済ませることにした

〈数十分後〉

「孟、準備は良いか？」

「ああ、それじゃあ、車で行くか？」

「ああ、その事なんだが、実はあの大きさじゃあ森を抜けるのは結構厳しい、だから、今回は歩きだ」

そうか、道幅が狭いんじゃないかな

「そうか、じゃあ、歩きで行こう」

「あっそれと、多分、私がいるから大丈夫だとは思うが、一応、武器になる物はあるか？」

「どづいつことだ？」

「森の中には危険な妖怪でいっぱいだな。私ならなんともないが、

普通の人間だと少々厄介だな」

「そうか、でもなるべく大きな物は駄目なんだよな？」

「ああ」

だとしたら、PDWかハンドガンだな

「藍、ちょっと待っててくれないか？」

「ああ、いいがどうするんだ？」

「何、護身用を持って行くのさ」

そう言ってトラックの方に向かった

↳トラック内部↳

確か、このあたりに置いたんだよな」

「おっあつたあつた」

そう言って取り出したのはM92Fの改造版で横のエンブレムには大鷲のマークが入っている。これは孟が勝手に改造した銃で総弾数と能力が普通のより上である

さらに、孟にはもう一つの特技があつた。それは、銃弾を思う方向に曲がれる特技を持っている。これができるのは一人か二人程度だと言われている程のレベルである。

さらに、二丁拳銃なんて異名が付くほどにハンドガンの扱いに慣れている

「さて、行くとしますか」

そう言ってトラックから降りて藍の元へと向かった

「孟、何を持って来たんだ？」

藍が聞いて来た

「ああ、俺の世界の武器さ」

「外の世界のか？」

「ああ、こいつなら余程じゃない限り避けられないぜ。後、人目にも付きにくい」

「そうか、なら、行くぞ」

そう言って俺達は人里へと向かうのであった

孟の腕前

俺と藍は買い出しのため、人里まで降りることになったのだが、車では行けないらしく徒歩で森を抜けることになった。一応、自衛のために俺の愛銃を持って行くことにした

「森」

「なあ、藍」

「なんだ？孟」

「この辺りじゃあそんなに危険なのか？普通の人間は」

「ああ、この辺りの妖怪は人間を主食として居てな。結構多いんだ」

「へえ〜そーなのかー」

この辺りは人を主食としているのかそれじゃあ人間も近づけないわけだ。大変だね

その時だった

ガサガサ

「！！」

「さて、もうお出ましか。本当に懲りない奴だな」

藍は呆れたように言う

「そつだ。藍」

俺は質問した

「なんだ？」

「あいつらがどこの位置に居るか分かるか？」

「そつだな。奴らはもうすぐ姿を現すと思うぞ」

藍がそう言った瞬間、目の前に5体の妖怪が現れた。

グルルルル

「なるほど、こいつらか。相手にとって不足は無しと言う所だな」

俺はそう言ってスタイルを二丁拳銃のモードにした

「それが、孟の武器か？」

「ああ、拳銃と言って目にも止まらない速さで攻撃できる。まあ、見てなよ」

そう言って構えた

「行くぜ……」

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

二丁の愛銃が火を吹いた

ギャオオオオオオオオ!!!

妖怪の奴らは一斉に逃げだした

「まあ、こんな程度だな」

そう言っつてホルスターに銃をしまった

「す・・・すごい・・・」

藍を見ると呆けた顔で俺を見ていた

「まあ、外の世界じゃあ当たり前だったからな」

「いや、その武器はもちろんなんだが、孟の腕前に驚いたんだ」

俺の腕前？

「いや、昨日も言っただけど俺は軍人だ。国を守るためにこのスタイルを会得したんだ。そんじょそこらの奴らに後れを取るわけには行かないんだぜ？そんなことより、早く人里に行こうぜ？日が暮れちまう」

「そ、そうだな」

そう言っつて俺達は人里に向けて出発した

く人里く

ガヤガヤ

人里は意外とにぎやかだった。町並みは江戸時代とほぼ同等だった。

「すごい賑やかだな」

俺が言った

「そうだろう？ここは、人以外にもいろんな妖怪が共に住んでいるんだ」

「へえ」

「さて、私は買い物をしてくるが、孟は人里を回って来い。いろんな物が見れて楽しいぞ？」

藍が進めてきた

「分かった。」

そう言っつて俺達は別れた

「さく、どこから見ようかな？」

俺はぶらりと街を見ていた。街の風景は江戸時代の建物とよく似ていた。

「文明的には江戸時代初期ってところだろうな。なかなか、渋いな

」

そうやって見て回って行った

少し、歩きまわってある家に気が付いた

「子供の声がある……」

すこし、覗いてみるとどうやら寺子屋のようだ。一人の女性教師が子供数人に教えている

「やっぱ、子は宝だな。ああやって成長して行くのを見ると嬉しい気分になる」

「孟」

「おお、藍か。」

藍が買い物袋を持って現れた

「何をしているんだ？」

「ああ、寺子屋の様子を見てたんだ」

「寺子屋？……ああ、慧音の所か」

「知り合いか？」

「この人里で唯一ある寺子屋だ。嫌でも覚えるよ」

一つしかないのか。まあそんなに規模も大きくないしな
とその時だった

「」「」「先生！さようなら」「」「」

どうやら、授業が終わったみたいだった。一斉に子供たちが外に出
てきた

「気お付けて帰るんだぞー！」

女性教師が玄関まで出て手を振っていた

「慧音」

「ん？ああ、藍かどうした？」

「いや、偶々、近くを通ったからさ顔でも出そうと思って」

ずいぶん親しいようだな。藍の奴

「そういえば、こちらは？」

そう言っただけの方を見た

「ああ、彼は……」

「初めまして、戦場孟です。今は、藍の家にお世話になっています。

」

俺は正しく挨拶をした

「ああ、初めまして私は上白沢慧音だ。慧音と呼んでくれ」

そう言っつて俺達は握手をした

「彼は、外人か？」

慧音が藍に質問する

「ああ、そうなんだ。彼もまた、紫様とは関係なくな」

「そうか。またか……」

そう言っつて慧音は思い詰めたような顔をした

「また？」

どういふことなんだ？

「実は、ここ最近になって外人が多くあらわれるようになってな。紫や麗夢が風潰しに調べているが、原因が全く分からないんだ」

「と言う事は、俺以外にも外の世界から来た奴がいるって事か？」

俺は質問してみた

「ああ、そうなんだ。異変とはいえ全くもって分からないのが現状だな。一応、ここに来た外人は私が保護をしているのだが、これ以上増えるとなると困りものだ」

やれやれと言った感じで首を振った

あれ？現代でも行方不明者が現代世界でも増えているって言うけどまさか、こつちと関係しているのか？

「なあ、慧音」

「なんだ？孟」

「その外来人の中にはさ、俺みたいな格好した奴とかいたか？」

そう言っつて自分の軍服を指した

「ああ、たまにそう言っつ奴とかも現れるな。そつだ。孟なら分かるかもしれない」

「何がだ？」

「いや、ちよつと前なんだが、森の中で変な形をした乗り物が見つかつてな。多分、孟のいた世界にあつたんじゃないかと思うが」

俺の世界の物？

「それつて今どこにある？」

「この家の倉庫に置いてある。付いて来てくれ」

そう言っつて慧音は家の中に入った

「藍、ちょっと待ってもらっていいか？」

「私も一緒に行くが？」

「え？いいのか？」

「もちろんだとも、我々はすでに仲間じゃないか。」

藍は当たり前のように言った

「そうか、ありがとう」

そう言っただけで俺達も中に入った

くそうこの中く

中はお世辞にも埃ぼかった

「ずいぶん、埃ばいな」

「暫くは掃除もしてなかったからな。あつとこいつだ」

そう言っただけでカバーに被せられた大型の車両がそこにはあった。

「こ、こいつは90式戦車！どうして、ここに！？」

そこにあつたのは90式戦車であった。現在では第二戦線車両となつてはいたが、当時では日本が誇る最強の戦車であった。120mm滑走砲を採用しており、速力、能力共に高い性能を持っている

「こいつは、いつぐらいに見つかった!？」

慧音に聞いた

「こいつは、数年前に森の近くで見つけたんだが、その近くにお前と同じ格好をした。人が死体となって見つかった。恐らく妖怪に襲われたのであろう。生き残っている者はいなかった」

「そうか。」

一瞬、期待はしたけど無駄骨だったな。

「孟」

藍が心配そうな顔で見ている

「大丈夫だ。ありがとう」

「とりあえず、こいつはどうするかな?」

慧音が聞いて来た

「うん、そうだな。家には置けないか?藍」

「そうだな。紫様に相談してみないと分からないが家で預かせてもらうってことにすればいいと思う」

藍はそう言った

「とりあえずは紫に相談した方がいいか。慧音、もうしばらく預か

っててくれないか？」

「わかった。責任を持って預かるっ」

おお、なんとも頼もしい事か。これなら、安心だな

「そろそろ、家に帰らないといけないな」

藍がそう言った

「お？もうそんな時間か。じゃあ、慧音、また、後日づかがつよ」

「ああ、分かった」

そう言って俺と藍は寺子屋を出た

果たして、紫はOKしてくれるのだろうか？

それは、次回に……

新たな事件

俺は藍と一緒に買い出しから戻ってきてさっそく、紫に相談をした

「いいわよ」

紫はその一言であっさりと了承してしまった。

「そんなあっさりと言っていていいのかよ？」

「だって、あなたの世界の物でしょ？使い方なんて分からないんだから」

「それもそうか。」

確かにあれを使えるのはこの世界じゃあ俺ぐらいな物か

「それより、孟」

「なんだ、紫」

「買い出しに言っている途中、外来人とあった？」

「いや、会ってないがそれがどうかしたか？」

「いえ、ここ最近外来人による妖怪襲撃が後を絶たなくてね。目撃者の話だと格好があなたと同じで見た事のない武器でやられたらしいのよ。だから、孟は会ってるかなって思ってたね」

「なるほど」

俺と同じ格好かだとしたら種類は三つに分けられる

一つ目は正規の軍人だ。この場合だとそうそうに暴れることはない。しかし、指揮官が暴走するとその隊は全滅する

二つ目は傭兵だ。こつちの場合だと自然的に犯罪集団になるため生き残るためなら手段を選ばない連中だ。こいつらの場合少し、厄介になるな

三つ目は武器商人。こいつらの場合は特定の相手と取引した後、邪魔となる組織は排除するタイプである。しかし、自分の商売が邪魔されない限り向こうから仕掛けてくる心配はない

まあ、この三つの中だと一つ目と二つ目だな

「紫、その事件はいつから始まった？」

俺が質問した

「そうね。あなたがこつちに来た数日後って所かしら、被害は結構出ているわ。麗夢の方も出たって言ってたから」

この幻想郷を守っているという巫女の事が。

「なら、一度会って話して見るかな。その博麗の巫女とやらに」

「そうね。何らかの情報は手に入ると思うしそつちはお願ひしていしかしら。私は他の所を調べてくるから」

「分かった。そっちも何か分かったら教えてくれ」

「分かったわ」

そう言って一旦この話は終わりにし俺はトラックで明日、持って行く装備を整えていた

「トラック荷台」

「え〜と後、必要なのは……」

「孟」

「なんだ？藍」

荷台から出て見ると藍がそこに立っていた

「明日、博麗の巫女の所に行くのか？」

藍が質問した

「ああ、紫から聞いた話も聞きたいしな。もし、怪我をしているならこっちの医療じゃあ直せないだろうし」

そう言って奥から医療バックを取り出す

「だったら、私が道案内をしてやろう。ここからだ結構遠いからな」

「そうか。ありがとう助かるぜ」

「気にするな。私も役に立ちたいと思っただけだ」

そう言っただけで藍は家に戻って行った

「それにしても、俺と似た格好か。軍人だとは思っただけじゃあそんな好戦的な軍人がいるかな？」

家の司令官だとか後はレンジャー時代にいた教官だよな。元気にしてっかな

そう思っただけで俺は準備に勤しむのであった

（翌日）

俺は朝飯を食った後、準備をした。と言っても装備としては医療パツクの他に愛銃のイーグル（名前言うのを忘れてた）、M5カービン銃＋グレネードランチャー（スライド式）、M72A2ランチャー、大型ナイフと簡単なものにしてある

「孟」

振り返ると藍とちえんがいた

「ちえんも連れて行くのか？」

「ああ、今日は何もすることがないみたいだしな。な？ちえん」

「はい！藍様」

ちえんは元気よく返事をした

「あゝもう、ちえんはかわいいな」

と鼻血を垂れ流しながら言う藍

「藍、鼻血」

「おっと」

俺の指摘にようやく気付いた藍

「それじゃあ、行くとしますか」

そう言って俺達は博麗神社を目指した

〜森の中〜

俺達は森の中で休憩していた

「ふう〜結構遠いな。後、どれぐらい掛かる？」

「そうだな。約一刻と言ったところだ」

一刻は30分程度である

「そうか。後もうちょいって所か」

そう言って再び出発した俺達

「博麗神社」

長い階段を昇り切ると一般的な神社が建っていた

「ここが……」

「そうだ。博麗神社だ」

建物の階段付近に巫女服を着た少女と魔法帽子を被った女の子がいた

「麗夢」

「あら、藍じゃない珍しいわね」

そう言ってこっちに歩いて来た

「どうしたの？」

「紫様の命でな。私達も例の事件を調べているんだ」

藍が粗方の説明をする

「そう。で？こっちの外来人は？」

そう言って俺の方を向いた

「初めまして、俺は戦場孟、君の言うとおり外来人だ」

と自己紹介をした

「あら、礼儀正しいのね。私は博麗霊夢。この神社の巫女よ」

そう言っ互いに自己紹介をした

「それで、例の事なんだが、麗夢、君はどこか怪我をした所はないか？」

俺が聞いた

「ええ、なんとかね。奴らいきなし見た事のない武器で攻撃してきたわ。」

「それって言うと、こいつみたいだったか？」

そう言ってM5カービン銃を出した

「そう！それよ。」

「こいつは銃と言って外の世界の武器なんだ。多分、こっちじゃあ見かけない代物だろうね」

そう言って再び銃をしまった

「それで、他に変わった事は？」

「そうね。後は・・・言葉ね」

「言葉？」

「ええ、訳の分からない言葉を話していたわ」

訳の分からない言葉か。だとすると日本以外の軍人だな

「そうか。大体分かって来たかもな」

「どついうことだ？孟」

藍が質問してきた

「簡単だ。犯人は俺の世界の外人部隊だな。だとしたら規模は結構でかいかもしれないな。」

これはちょっと厄介かもしれないな

「私からはこれぐらいだわ」

「そうか。これはお礼だ受け取ってくれ」

そう言つて袋を渡した

「！！！これは！」

霊夢は中身が何なのか分かったようだ

「おーい！ちょっと待ってくれよ」

声のした方向を見ると魔女帽を被った女の子が来た

「君は？」

「私は霧雨、魔里沙、普通の魔法使いだぜ」

「魔法使い？」

「ここは何でもアリだからな。こういう奴がいたっておかしくないだろう」

「それで、なんの話をしてたんだ？」

「ああ、霊夢が外来人に襲われたって話を聞いてな。どんな奴らか話を聞いてたんだ」

「ああ！霊夢がさつき話してた奴らの事か。それなら、私も見たぜ」

「それは、本当か！？」

「ああ、魔法の森って言う所があるんだけど、そこらへんで変な奴らがいてさ。そしたら、どっかに行っちゃった」

「なるほど、謎の部隊は偵察でもしているのか。だとしたら、一個師団があるかもしれない」

「貴重な情報ありがとう。」

「いいんだぜ！もし何かあったら私にも連絡してくれよ。協力するからさ」

「分かった。じゃあ、戻るとするか。藍」

「ああ」

そうやって神社を離れようとした時

「待って！」

「ん？」

「私も、全面的に協力するわ。困った事があつたらいつでも言つて来ていいわよ」

満面の笑みで言ってきた

「ああ、その時はお願いするよ」

そう言つて階段を下りて行つた

「さて、これからどう動くかだな」

俺が独り言のように言つ

「しかし、相手は何人いるか分からないんだろう？無理に動いてもしょうがないか？」

藍が言つた

「確かにな。一つ目としては、武器、車両の確保だ。この前みたく突然見つかるかもしれない。それを優先的にした方がいい。後は妖怪および人間に対して警告を発しておくことだ」

「それに関しては紫様に言っておいた方がいい。私も協力するぞ」

「ありがとう。藍」

そう言いながら帰路に着く俺達であった

果たして、謎の部隊とは何なのであるうか……それはまた、次回

いろいろ準備しておかなきゃな

俺は紫から車両を置ける許可をもらっていたので慧音の所まで行って90戦車を回収する事にした。

寺子屋

ガラガラ

「慧音、いるか？」

「孟か。入ってくれ」

奥から慧音の声が聞こえたので入って行った

「よっ慧音」

「孟、どうしたんだ？こんな朝早く」

部屋に入ると慧音は朝食の用意をしていた

「いや、紫から許可をもらったんでな。さっそく取りに来たんだが邪魔したか？」

「いや、大丈夫だ。丁度食べようとしてたんだ。そうだ！もう一人紹介したい奴がいる。付いて来てくれ」

慧音に案内され隣の部屋に行くともう一人女の子がいた。長髪で白い髪が特徴だった。

「けーね、だれ？こいつ」

そう言って俺を指さした

「ああ、こいつは戦場孟、ほら、前に話した外来人だよ」

「へえ〜」

そう言って白い髪の女の子はじろじろと俺を見た

「・・・何？」

「いや、慧音が紹介する奴だからどんな奴かな？って思ってたさ」

「期待はずれだったか？」

「いや、紹介が遅れたね。私は藤原妹紅だよ。よろしく」

「ああよろしく」

そう言って互いに握手した

「そつだ。妹紅、君にも聞きたいんだが」

「何？」

「ここ最近、俺の似た格好を見た事はあるか？」

そう言って自分の服を指した

「ああ、前に竹林で見た事はあるけど、関わりはなかったな。声を掛けようとしたらすぐ、どっかに行っちゃった」

「そうか。」

やはり、規模はかなりでかいと見ていいか。あまり、こっちの住民にも関わらないようにしてあるみたいだしな。だが、安心はできない。いっどこから攻めてくるか分からないんだしな

「分かった。ありがとう」

そう言って出て行くこととしたが

「まで、孟」

慧音が呼びとめた

「なんだ？慧音」

「朝ご飯はまだなんだろう？」

一応、藍が朝早くおにぎりを作ってくれてそれを食べたんだが・・・

グウ

俺の腹の虫は正直なようだ

「それでは、お言葉に甘えようかな？」

そう言って慧音の家で朝食を頂くことになった

（数分後）

「ぶは〜ごちそうさま」

そう言って箸を置いた

「はい、お粗末さま」

そう言って慧音は食器を片づける

「あっ手伝うよ」

そう言って動こうとしたが

「いいさ、お前は客人なのだからゆっくりしててくれ」

そう言って台所の方に向かった

「なあ、孟」

「なんだ？妹紅」

妹紅が突然話してきた

「いや、孟はさっき話した奴らとどういつ関係なんだ？」

「どうして、そんなこと聞く？」

「実は、あの話には続きがあったんだ」

「教えてくれ。そいつらは俺の仲間ではない事が分かっている。実際に霊夢が襲われて被害も出ている。俺はこれ以上広げたくはないと思っっている」

俺は自分の正直な気持ちを話した

「そうか。お前なら信じられるから話すけど、あいつらの後を付けたんだよ。そしたら、山の奥深くにでっかい建物が出来ていた。規模はどのくらいか分からないけど、結構でかかった。それで、試しに近づいてみたら警告なしに攻撃されたよ。その後も追手がいて何とか振り払ったけど、奴ら、見た事のない武器を使って攻撃してきた。」

若干、震えながら話していた

「そうか。ありがとう大変な目に会ったな。安心してくれ。俺が必ず、止めさせてみるからな。」

笑顔でそう言った

「ああ、分かった。だけど、あいつら、人数は多いよ？そんな簡単に行くかな？」

「それについてなんだが、現在、紫が異次元から人員を集めてくれている。心配する必要はない。それにこっちにはそれなりの武力もあるしな」

「武力？」

妹紅が首をかしげながら聞いて来た。その表情が可愛いと思ったのは秘密だ

「ああ、ここの倉庫にも置いてあるかな」

そう言って立ち上がった

そして、倉庫の方に向かった。その際、妹紅も付いて来たが

〈倉庫〉

「ここになにがあるんだ？ 孟」

妹紅が聞いて来た

「ああ、こいつだ」

そう言って90に掛かっているカバーを取り払った

「……これは？」

当然の質問だった

「これは、戦車と言って圧倒的な破壊力を持つ乗り物なんだ」

「ふん」

そう言って妹紅は90の周りを見て回った

「すごいね〜」

感想が出た。まあ、当然だろ

「まあ、まずは整備をしないとな動くかどうかも分からんし」

そう言っつて俺は後ろのエンジンカバーを取り外した

「うーん、見た目はきれいな方に近いな。」

エンジンは思ったよりもきれいな方だった。数年前つて言っつたから多分10式に変わる時だな。今じゃあ生産されてないレア物だから注意して扱わないとな

「まあ、とりあえずは大丈夫か。よし、動かして見ようつと」

そう言っつて運転席に乗つた

カチツキュルルル、ブオン！

「きゃ！？」

妹紅は驚いて尻もちをついたようだ

「うん、エンジンは良好だな。つて大丈夫か？妹紅」

俺は尻もちをついた妹紅に声を掛けた

「う、うん大丈夫、それにしてもすごい音だな」

「まあ、こんぐらいのでかさならしょうがないか」

そう言ってエンジンを切った

「こいつはいつでも動かせるな。さっそく持って行く」

そう言って一旦慧音の所に向かった

「慧音」

「ああ、なんだ？孟」

「車両の方は問題なかった。いつでも取り出せる。」

「そうか。それは良かった」

「それより、他の妖怪とかに注意とかって流せるか？」

「ああ、出せると言えば出せるがどうしてだ？」

「一応な。警告でも出してもらえば被害も最小限に抑えられるかと思っただけ」

「なるほど、分かった。善処はするよ」

「よろしく頼む」

そう言って再び、戦車の方に戻った

戦車は無事に紫の家まで運ぶ事が出来た。途中、住民にも出くわしたが、皆、俺を見ると納得してくれたようだ

「おかえり、孟」

「ああ、ただいま紫」

「とりあえず、あなたの言った通り武器やら弾薬は集まったわ。人員はまだ、だけどね」

そう言っつて紫の後ろの方を見ると大量の武器弾薬があった

「よく集まったな。」

「ええ、知り合いがいたもんでね。なんとか調達はできたのよ」

「へえ〜そうか。ありがとう」

「いいのよ。これも幻想郷を守るためですもの協力は惜しまないわ」

そう言っつて紫は家の方に戻った

「さて、いろいろ準備しますか」

そう言っつて武器の仕分けに入った俺だった

新たな外来人

あれから、いろいろ準備はしてきた。紫の協力で武器やら弾薬を別の世界から持って来てくれたので当面は弾薬不足には困らない。

しかし、車両が俺の乗ってきたトラックと90戦車しかない。情報では車両も確認されているもしかしたら、戦車やら装甲車などが配備されている可能性があると言うことだ。もし、本当だったらこれでは聊か心もとない。

これに関しては、幻想郷で見つけるしかない。90のように突然、現れる可能性もあるからな。人員に関しては紫が異次元から連れて来てくれるらしい。もちろん、現実世界には実在しない人物を中心に連れて来てもらう予定だ。

そんな中、一報が入って来た

「孟!」

藍がものすごい勢いで俺の元に来た

「どうした? 藍、そんな慌てて」

「これを見てくれ!」

そう言って新聞紙を渡してきた

「新聞? どれどれ」

俺は新聞に記事を読んだ。

そこには新たな外来人現る。と書いてある。服装は俺と似た格好の奴らが五人目撃されたらしい。また、見た事のない武器を持っているらしい

「場所は紅魔館？」

また、俺の知らない場所が出てきたな。

「紅魔館って知ってるか？藍」

俺は藍に聞いて見た

「ああ、こつからだに近い。」

「よし、だったら、行こう」

「だったら、私も付いて行こう」

藍が付いて来てくれるみたいだ

「ありがとう。よし、行こう」

「ああ」

そうやって俺達は八雲邸を後にした

く森く

俺達は森の中を抜けていた。しかし、この森は薄暗いな

「なあ、孟」

「なんだ？藍」

「さっきの新聞に載っていた奴らは仲間なのか？」

藍が聞いて来た

「いや、それは分からない。だとしても今、この土地を荒らしてる奴らの仲間にならなように説得はしなきゃな。これ以上増えたら困ると言うのもあるが、こっちにも味方が欲しい所だな。俺一人ではどうしようもない」

「そうか。そうだな」

そう言っつて俺達は森を抜けた

（紅魔館前）

俺達は紅魔館と言う屋敷の前に来ていた

「でっかい門だな。そして、紅い」

俺は見たまんまを言った

「ははっそれはそうだな。ここに住んでいるのは吸血鬼だからな」

「そうなのか」

俺は今までの事からあまり驚かなくなっていた

「とりあえず、ここに目撃談があるか聞いてみよう」

「そうだな」

そう言って門の前に来た。門の付近には一人の中国人女性が立っていた。きつと門番なのだろう

「あのーすみません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？こんなに近いのに聞こえないって事あるのか？目はちゃんと開いてるのに

俺は少し大きな声で言った

「あのー！すみません！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おろ？」

なぜだ？どういう事なんだ？

すると、藍が近づいて言った

「また、中国は寝てるな。」

「え？」

「よく耳を澄ませてみる」

そう言われて耳を澄ませてみると……

「グウ〜グウ〜」

「本当だ！」

目を開けたまま寝るの初めて見た！

と思った瞬間

ヒュン！

「！」

ダン！

カキーン！

カラーン

俺は気配を感じ反射的に何かを撃ち落とした

「これは……ナイフ？」

なぜにナイフがこんな所に？

「すごいわね」

声のする方を見ると一人のメイドさんが驚いたように言った

「もしかして・・・あなたが？」

「ええ、そうよ。私はここのメイドをしている者です。あなたは外来人ですね？」

「まあ、この世界じゃあよく言われるな」

「そう。この紅魔館に用があつて？」

メイドさんが聞いて来た

「ああ、そうだ。新聞で俺と同じ格好をした人間がこちら辺に現れたと聞いてな。それで、聞きに来たんだ」

「そうですか。では我が主に面会させます。ああ、私は十六夜咲夜です。どうぞよろしく」

そう言って一礼した

「俺は、戦場孟だ。よろしく」

そう言って敬礼した

「中々、礼儀の正しい方ですね。藍さんも一緒に来られたのですか」

「ああ、孟だけでは心配だと思ってな」

「では、二人とも付いて来て下さい。あっとその前に少し、時間を頂いてもよろしいですか？」

「ああ、それは構わないけど、何するんだ？」

そう言った瞬間、何が起きたか分からなかったが。さっきの門番の方を見るとボロ雑巾のようになっていた

「!?!」

「では、参りましょうか」

そう言って咲夜さんは屋敷の方へと歩いて行った

「藍」

「なんだ？孟」

「この門番、何があったの？」

「ああ、咲夜にやられたんだよ。」

藍はさも当然のように言った

「咲夜さんが？」

「ああ、彼女には時を操る能力があつてな。自在に時を操れるんだ」

「マジかよ!?!」

それあつたら最強じゃね!?!

そう思いながら俺達は館に入って行った

〈館内〉

中は結構広々としており、置いてある物も高級品のように思えた。

そして、一番大きな扉の前で止まった

「お譲様、お客様がお見えです。通してもよろしいですか?」

咲夜さんが中に居る人物に確認を取る

「いいわよ」

「失礼します」

咲夜さんが扉を開けた

ギギ

中に入ると一人の少女が紅茶を飲んでいた

「あなたが噂の外来人?」

少女が聞いて来た

「ああ、そう言う風に言われてるが・・・まあ、自己紹介をする。戦場孟だ。よろしく」

「私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ」

「さっそくだが、レミリア、こちら辺で俺の格好に似た奴はいたか？」

俺は率直に聞いた

「いきなりね」

「まあ、こう言う世界だしほおつてはおけないっていうか。だけど、レミリアだって最近、聞いてるだろ？連続事件の事」

新聞では連続事件として取り上げられていたからな

「ええ、信じがたい事でしょうけど、あの霊夢が負傷するなんて初めてだしね」

そう言うって紅茶をすすった

「だから、教えてほしい。目撃したかどうかを」

「分かったわ。ここから、少し行った所の森の中にその外来人がいるわ。人種的にはあなたと同じ者の類だしね」

「そうか。ありがとう。恩に着る」

「近いうちにまた、遊びに来なさい。歓迎するから」

「ああ、分かったよ」

そう言っつて俺達は一旦、紅魔館を後にした

（紅魔館から少し離れた森の中）

「ここら辺だよな。レミリアが言うには」

「ああ、そうだな。」

藍が答える

「もし、同じ格好だとしたらちよつとヤバいな」

「なぜだ？孟」

「この森の色は緑、俺の服装も緑だ。つまりは同調して見えにくくなる。」

俺は説明をした

「なるほどな」

藍がそう言った瞬間

「動くな！」

「「「！」「」」

周りを見ると新聞通り五人の軍人が俺達を囲んでいた

「待て、お前らと話がしたい。ここの隊長と話をさせてくれ」

俺が言った

「隊長は私だ」

そうやって出てきたのは40半ばのオッサンだった。階級を見ると大佐クラスであった

「私は日本陸軍第三師団の戦場孟であります」

そう言って敬礼した

「日本陸軍？という事は昭和の人間かね？」

大佐が聞いて来た

「いえ、新しくできた日本軍であります。創設は2011年であります」

「……な、なんだって!?」「」「」

大佐以外の隊員が声を上げた

「ふむ、未来の日本軍と言うことか。私は陸上自衛隊、第二師団、砲兵長 郷田勲だ。」

「陸上自衛隊……と言う事は数年前の部隊と言うことですね。」

「まあ、君からして見ればな。それで、ここはどこなんだ？」

「ここは……」

俺はこの場所と現在発生している事件について話した

「なるほどな」

勲大佐はえらく落ち着いた様子で言った。他の隊員はあれこれ騒いでいるのに

「あまり、驚かれないんですね」

「いや、内心は驚いているよ。ただ、顔にはあまり出ない方だね。」

「そうですか。それで、これから、どうするおつもりですか？」

「このまま野放しにしてもいずれは戦火に巻き込まれるだろう。だったら、私は君に付いて行くよ」

そう言って手を差し伸べた

「これから、よろしく頼む」

「こちらこそ、大歓迎です」

そう言って互いに握手をした

こうして、孟に紫たち以外の仲間ができたのである

防戦

俺は郷田砲兵長と共に八雲邸に移動する事になった。彼らは軽装甲車と高機動車を保有していた。なお、郷田砲兵長は特務士官としてアメリカに留学する予定だったのだと言う。

となると、その頃の日本だと大騒ぎになってるかもな。しかし、誰が何のために俺達を幻想入りさせたのか分からない。これは、やはり裏がありそうだな

「そう言えば、孟君」

「何でしょうか？郷田さん」

「君は戦車を拾ったと言っていたね」

「ええ、さつきも話した通り、この幻想郷には廃棄された兵器があります。しかし、すべてを見つけられたわけではありません。だからこそ、奴らに見つかる前に確保はしておきたいですね」

「そうだな。こんなに平和な場所でやられたらこの住民に迷惑がかかってしまう。しかし、敵もそう簡単には矛を収めてはくれんだらうよ」

確かに、相手は完全にゲリラ攻撃で場所を突き止められないようにしている。そして、計画的に実行しているということも調べて見て分かった。

相手の指揮官は頭の切れる奴だと言う事が高い

そうこうしている内に無事八雲邸に着いた一向、そこでは紫が待っていた

俺は軽装甲車から出て郷田さん達を紹介した

「紫、こっちでも人員が見つかった。郷田さんだ」

そう言って紫の前に郷田さんを立たした

「あら、これはこれは、よろしく」

「ああ、よろしく」

そう言って二人は握手をする

「それで、そっちの方はどうなった？」

俺が紫に聞いた

「ええ、あなたの注文通り現実世界からは連れてこなかったわよ。紹介するわ」

そう言われて付いて行くとそこに居たのはWW？（死亡や行方不明の方だけ）を代表する人物やゲーム（戦争系）の登場キャラクターが揃っていた

「これは、壮観だな」

「でしよう？世界中から選別したから、間違いはないわよ」

「本当にありがとうな。紫」

俺は礼を言った

「いいのよ。前にも言ったようにどこぞの者にこの幻想郷を破壊されてなるものですか。それじゃあ、私は一眠りするわね。徹夜続きだったから」

欠伸しながら家の方に戻って行く

「さて」

そう言っただけは目の前の人物達の前に立った

「私の名前は……」

それから、今の状況と発生している連続事件の事を話した。すると、皆は素直に協力すると宣言してくれた

そして、その後は八雲邸の近くに彼らの宿舎を作った。そして、そのまま就寝となったが、思わぬ事態が起きた

なんと例の部隊がここに攻め込んできたのである

ウオオオオオオオ!!!

「なんだ!?!」

「孟君!」

郷田さんが俺の部屋に入って来た

「どうしたんですか!？」

「君の言っていた部隊が攻め込んできた。現在、我々と宿舎に居る連中で防戦している。」

郷田さんは現在の状況を教えてくれた

「分かりました!郷田さんあなたは裏にある90を使って下さい!何人が連れて行って構いませんから!」

「分かった!」

そう言っ出て行った

俺も急いで身支度を済ませ部屋を出ようとした。そこには……

「孟」

藍がいた

「藍かどうした?」

「奴らが来たんだな」

若干震えながら話してきた。きっと、聞いた事のない音だから怖いんだろうな

「安心しろ。お前らに危害が来ないようにする。だから、安心して家の中に居ろ」

「ああ、分かった」

そう言っつて藍は自分の部屋に戻って行った

俺はそのまま外に出た

〜外〜

ドドーン！

外に出ると銃撃戦の最中だった。森の方に例の部隊がいた。俺達の仲間は軽装甲車や高機動車、宿舎を盾にして防戦をしていた

俺は近くの軽装甲車に走って行き、近くに居たパイパー少佐に現状を聞いた

「少佐、現在の状況は？」

「見ての通り防戦状態だ。敵さんの数は不明とにかく、あの家から東の森は敵で埋め尽くされている。こちらの負傷者は軽微だ」

なるほど、さすがはWW？の猛者だな。現状でも冷静に居られている。

「なるほど、では少佐、何人が連れて裏にあるトラックから重機関銃を取り出してくれ俺が援護する」

そう言つてM14ライフル（スナイパーモドキ）を取り出す

「頼みます。おい！誰か俺と一緒に付いて来てくれ！」

そう言つてパイパー少佐は裏のトラックに向かった

「さて、敵はどこかな？」

そう言つて赤外線ライトで敵を探した

「いた」

バン！

銃弾は見事敵の頭に直撃した

「よし、次」

そう言つて次々と敵を正確に倒していく

だが、敵も負けてはいなかった。次々と投入されていく敵兵、こちらは徐々に押されていく

「大将！このままじゃあジリ貧です！」

一人の若い兵士が言った

「諦めるな！郷田さんの90が来るまで耐えろ！」

「分かりました！」

そう言った瞬間

ドカーン！

けたたましい音と共に郷田さんの乗った90が裏から現れた

そして、無線機から連絡が入る

「遅れてしまつてすまん。孟君」

「いえ、大丈夫ですよ。そのままどんどんやっちゃって下さい！」

「了解した！」

それから、90の主砲が敵のいる森に発射されていった

「孟君！」

「パイパー少佐！こつちです」

重機関銃を取りに行ったパイパー少佐が戻って来た

「こつちから撃っちゃって下さい！」

「了解した！」

そうやって何人かの若い兵士に指示を出した

「撃てい！」

ドドドドドドドドドド!!!!!!!!!!

パイパー少佐の指示で重機関銃から弾が森の方へと発射されていく

そして……………

「孟君！敵がひいて行くぞ！」

無線で郷田さんから連絡が入った

「よし！」

こうして、何とか敵の攻撃から防ぐ事が出来た俺達であった

「皆！お疲れさん！皆のおかげで何とか防御できた。ゆっくり休んでくれ。被害状況は明日調べる」

そう言って各々解散して行った

「孟君」

「あつ 郷田さん」

「今日はお疲れさん」

「ええ、これも90を動かせたあなたのおかげですよ」

「そんなことはない。君は指揮官に向いているのではないのかね？」

「俺が？よして下さいよ。そんな冗談俺は指揮官には程遠い存在な
のですから」

「そうかな？まあ、いずれは誰かが上に立たなければならなくなる。
その時は皆、君の事を押すと思うよ。それじゃあ」

そう言つて郷田さんの宿舎に戻つて行つた

「そんなことはないと思うけどな」

そう言つて俺も部屋に戻つて行つた

（部屋）

「フワッやっぱ戦いの後は疲れるな」

俺は布団で一人呟いていた

「この先、どうなるのかな？」

やっぱ、こつちでも死傷者はでるだろう。だが、相手も話し合つて
聞いてくれるような連中じゃないしな。

そう思っていると

トントン

「盥、起きてるか？」

藍が俺の部屋にやって来た

「ああ、起きてるよ。どうした？」

「じ・・・実は・・・その・・・」

なんだか、恥ずかしそうにしていた

「？」

「こ・・・怖くて・・・」

ああ、そう言うことが

「眠れない・・・と？」

コクン

「まあ、こつちの世界じゃあない代物だしな。いいよ」

「ありがとうー！」

どうやら言んだようだ。こつちは迷惑を掛けてるもんだからな。これぐらいしかできる事がない。しかし・・・

「眠れん」

よくよく考えて見たら藍も妖怪ではあるが一人の女性なんだ。俺はこの道のもんだから女性と一緒に寝た事がなかった

「しかし、福与かだな」

俺の体に付いて来る、おっぱ・・・ゲフンゲフン、双子山がすごいんだよ。これが

「ムニヤムニヤ」

藍は安心して寝ているようだ

「まっいいか」

そう言って俺は理性と戦いながら眠りに着くことにした

今後に備えて……

俺達は何とか敵の攻撃から八雲邸を守る事が出来た。しかし、自分の居場所が敵に知られてしまったため今後はさらなる攻撃が予測される

だが、こっちは武器や人員は居るが、戦闘車両や飛行機が割合に合わないほど不足していた。

そこで、二部隊に編成する事になった。

一つは幻想郷に廃棄された兵器の発見、入手

もう一つは八雲邸の警護である。一応、俺は車両探索部隊の方に入っていたため、俺を主とする郷田砲兵長、パイパー少佐、後は郷田さんに付いていた陸上自衛隊の隊員たちである。

一方、警護の方は紫を中心にWW?の兵隊で集められている。しかし、紫は銃を使った戦闘はやった事がないので代わりに大日本帝国の陸軍、鬼島平八郎中将が指揮を執ることになった。

会議の方では、滞りなく進んだため順調に事を進めて行った。

そして、出発しようとした時、紫から藍と一緒に連れて行ってほしいと言われた。最初は危険だと言ったのだが、紫が「幻想郷をすべて知ったわけではないでしょう?それに藍が居れば大抵の妖怪は手を出さないから安心して」

と言われてしまい反論の余地がなかったため了承した。

く八雲邸

「おい、藍いるか？」

俺は藍の部屋の前に来ていた

「孟か？ちよつと待ってくれ」

そう言われたので数分部屋の前で待っていた。暫くすると藍が部屋から出てきた

「どうした？孟」

「ああ、実はまた、道案内を頼もうって思ってたさ」

「それは、なぜだ？」

「今度は外の世界の乗り物を探さなくちゃいけないってさ。まだ、幻想郷をすべて知ったわけじゃないから藍に頼もうって思ってたさ」

俺は理由を告げた

「それなら、紫様は？」

「ああ、紫にはここの守備として守ってもらって事になってさ。手が離せないから藍にお願いに来たわけだ」

「そうか。分かった。すぐに出発するのか？」

「ああ、こっちは準備は終わってる」

「分かった。私も支度をするから外で待っていてくれるか？」

「了解した」

そう言っつて俺達は一旦、別れた

く八雲邸門の前く

藍が準備を終えるまで俺達は八雲邸の門の前で待っていた。

そして、数分後

「すまない！待たせたか？」

藍が走っつて来た

「いや、大丈夫だよ。それじゃあ、出発しよう」

そう言っつて俺達は八雲邸を出た

く野原く

森を抜けてそのまま野原に出た。

若い隊員達は銃を片手にのんびりと談笑していた

「そついえば、藍さん」

郷田さんが声を掛けた

「はい、なんででしょうか？」

「今回はどこに向かうのかね？」

郷田さんが質問した

「ああ、今回は車両の搜索と言う事なので近場から探して見ようか
と思います。紅魔館から反対側にある湖付近です。あそこなら何か
と外の世界から入り込んでくるんで、あなた達が探している物も見
つかると思いますよ。」

藍が答えた

「それってあれか？あの霧の掛かった湖の事か？藍」

俺が言った

「ああ、あの付近にはよく見た事もない物がたくさんあるからな。
可能性は高いと思うぞ」

「そうか。因みにそこに妖怪とかいるのか？」

「妖怪は居ないが、代わりに妖精がいるぞ」

「妖精？」

俺と郷田さんは声をはもりながら言った。

「ああ、外の世界じゃああまり知られていないがいろんな妖精がいるぞ。でその湖には氷の妖精と大妖精がいる」

「へえ〜この世界じゃあそんなのがいるんだ」

俺達はそう言いながら目的地である湖を目指していた

〜霧の湖〜

俺達はしばらくして、湖に到着した。湖は予想より広く見えたので分担して搜索する事になった。

「じゃあ、郷田さんは反対側から行って下さい。俺と藍はこっちから回りますから」

「了解した気お付けてな」

そう言って郷田さん達は霧の中へと姿を消した

「さて、俺達も行くつか。藍」

「ああ、そうだな。」

そう言って俺達も動くことにした

霧はそこまで濃くはないが、迷うといけなないのでなるべく湖の近くを歩いていた

「いや〜それにしても静かだな。」

「まあ、ここはあまり人は来ないからな。」

「そうだよな。この霧のせいであんまり周りが見えないと逆に不安だからな」

と歩いている時

カーン

不意に俺は何かを蹴ってしまった

「なんだ？」

俺は蹴ってしまった物を拾った

「………カエル？」

拾ったものは凍ったカエルだった

「ああ、それは妖精の仕業だよ」

藍が言った

「あの、氷の妖精の事か？」

俺が言った

「ああ、そうだ」

「ふん………！藍、危ない！」

俺は藍を突き飛ばした。そして、藍が居た所につららみたいなのが突き刺さった

「イタタ。」

藍はゆっくりと起き上がった

「すまない。藍、突き飛ばしてしまって」

俺は謝った

「いや、いいさ。私が気づかなかったのがいけない。」

藍はそれほど怒ってはいなかった

「それで、そこに居るのは誰だ？」

「よくあたいの攻撃を避けられたね」

そこに居たのは水色の服を着た少女だった

「お前か。氷の妖精」

「あたいの事を知っているんだね。人間のくせに」

「まあ、これをみれば一目瞭然だろ」

そう言っつららを指さした

「それじゃあ、勝負よ！あたいの攻撃を避けられるかしら？」

そう言った瞬間、たくさんのつららを出した

「それ！！」

そう言った瞬間、つららが一斉に俺の方に来た

「くっ！！」

俺はなんとか避けた。その瞬間に愛銃・イーグルを取り出し、二丁モードにした

「それなら、これならどうぞだ！」

そう言って妖精はさらにつららを出した。その数は圧倒的に多い

「行けえ！！」

そう言った瞬間一斉に来た

「俺も行かせてもらっぜ」

ガチャン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

一見すると無茶苦茶に撃ってるように見えるが弾はつららの一本一本を破壊していった

そして、すべてのつららが破壊された

「そ・・・そんな・・・」

妖精はそのまま地べたに座り込んだ

「勝負、ありだな」

そうやって俺はイーグルをしまった

「・・・・・・・・」

妖精は座ったまま黙っていた

「どごしよご？ 藍」

俺は藍に聞いた

「孟、さっきのカエルを出して見る」

「え？」

俺は言われた通りバックからカエル出した

「これをどうするんだ？」

「それを仲直りの印だと思って渡してみろ」

「あ、ああ分かった」

そう言っ て俺は妖精の近くに行った

「さっきはすまなかつたな。ほら、これは仲直りの印だ」

そう言っ てカエルを出した

その瞬間

「お・・・おおおおお！！！！！！！！！！」

妖精はすごい顔でカエルを見ていた。

それから、数分後

「いやゝあたい勘違いしてたみたいだね！」

少女は元気を取り戻していた

「それは、良かった。それより、君、名前は？」

俺は聞いた

「あたいはチルノ！この湖に住んでいる妖精さ！」

そう言っ て元気よく右手を上げた

「元気があるな。俺の名前は戦場孟だ」

「孟か、良い名前だね」

「ははっありがとう。それより、チルノ」

「何？」

「どうして、襲って来たのかな？」

俺は聞いてみた

「ああ、ここ最近変な人間がいるって噂があったからさ。湖の周りを見張ってたのさ。」

どうやら、慧音の通告がここまで来たようだな

「そうか。それじゃあ、しょうがない。それともう一つあるんだが」

「何？」

「ここら辺で見た事のない物を見た事はあるか？」

「ああ………確か、あったよ」

「本当か？」

「うん。この前、見かけてね。森の中にあるけど、見に行ってみる？」

「ああ、ぜひともお願いしたい」

「じゃあ、付いて来て……！」

そう言つてチルノは走つて行つた。俺達もそれに付いて行つた

「付いたよ！」

そして、そこにあつたのは……

「こいつはハンヴィーじゃないか。それにこつちは……」

そこにあつたのはハンヴィーだけじゃなく89式戦闘装甲車やストライカーなど日本とアメリカに存在する戦闘車両ばかりであつた

俺は即座に郷田さんに連絡を取つた

「これは、すごいな」

さすがの郷田さんも驚いたようだ

「しかし、この人数じゃあ運びきれませんな」

パイパー少佐が言つた

「そうだな。それなら、あつちの残つてる奴らをいくらか貸してもらつて移動する事にしよう」

そう言つて俺達は移動した。

こつして新たな車両を手に入れる事が出来た

更に探索をする

前回、霧の湖で日米の保有する戦闘車両が発見された。種類は豊富にあったが、それでもまだ、割に合わないという感じだった。

また、戦闘車両はすべてが現代兵器なのでWW?の時代の兵器とはシステムが違う。そこで、郷田砲兵長やら他の自衛隊員達はすべて講師として八雲家の留まっている。

今、探索を行っているのは俺と藍の二人だけである。人員としては少ないがそれは仕方ない事だ。どんなに強い兵器や銃器を持っているからと言ってそれですべてが決まるわけじゃあない。どんな風になるかと最後に行きつくのは人間の手に収まるんだからな。

そんなこんなで、俺と藍は探索に出ていた。藍が妙に上機嫌なのはどうしてだろう？

〜森の中〜

「なあ、藍」

「どつした？藍」

「今回はどこに向かうんだ？」

「ああ、今回は妖怪の山に行こうかと思っている」

「妖怪の山？」

俺は首を傾げた

「ああ、妖怪の山というのは、その名の通り妖怪が住んでいる山だな。ここにはたくさんの妖怪が住んでいるんだ」

「例えば？」

「例えば、烏天狗だったり、河童だったりな」

「へえ〜そうなんだ」

そんな事を言いつつ俺達は妖怪の山へと向かっていた

その頃……

〜八雲家の庭〜

「では、これより兵器講義を行う。各自、しっかりと把握しその能力を発揮せよ」

「……………了解!!」

「……………」

郷田砲兵長の合図で講義が開始された

「では、まずこの兵器からだ」

〈89式戦闘車両〉

「この車両は君達の世界で言う装甲車みたいなものだ。だが、こい

つはタイガ 戦車を一発で葬る力を持っている」

ザワザワ

辺りの兵士からは驚きとざわめきが起きた

「操作方法は戦車と同じだ。主要武器はこの90口径の35mm機関砲とTOWミサイルである。副武装は7.62mm機関銃だ。さらにこいつには他の能力も持っている。それは兵員輸送機能である。この装甲車の主な利点は迅速かつ展開的に兵員を輸送できる事である。次はこいつだ」

「ハンヴィー」

「こいつはハンヴィーと言ってな現代のアメリカ軍が最も使用する車両だ。こいつならどんな悪路でも走破する事が出来る。武装は屋根に機銃を付けられる事だな。こいつは原型であるがこれの発展版も存在する。しかし、今はここになるので説明は後にしよう。それでは次だ」

「M1エイブラムズ」

「こいつはM1エイブラムズ、こいつもハンヴィーと同じ現アメリカ軍が使用してる主力戦車である。主砲は44口径120mm滑走砲でこいつならほとんどの車両は破壊ができる。副武装はM2キャリバーだ。」

「LAVI25」

「こいつはLAV-25、最初に説明した89の輸送車両版だ。こ

いつには25mm砲が主要武器として使われている。だが、主な能力は兵員輸送でこっちなら合計で9名は乗れるようになってる。」

郷田砲兵長が主な事を述べた

「と、まあ要点は述べたが誰か乗ってみたいと言う奴はいるか？」

郷田さんが全員に聞いてみた

「だったら、私はM1戦車に乗ってみたいな」

手を上げたのはパイパー軍曹だった。彼は司令官になる前は戦車乗りとして有名だった。彼の他に部下が二名手を上げた

「ふむ、ではパイパー軍曹こちらへ」

そうやって郷田さんが手招きをした。パイパー軍曹は指示通りに動いた

「パイパー軍曹は戦車のどこに座っていたのですかな？」

郷田さんが聞いた

「私は砲主に付いていたよ。射撃命中率なら自信はあるよ？砲兵長」と言って笑った

「では、今度の戦闘の時に一勝負と行きましょつかね？」

郷田さんも笑って言った

「ええ、もちろんですとも受けて立ちますよ?」

そう言いながらM1は始動運転し始めた

くその頃益はく

「はくここが妖怪の山か」

俺は目の前にある山を眺めていた

「ああ、この山の裏手にある川が河童の住処だ」

藍が説明した

「とりあえず、どこから探そうか?」

藍が聞いて来た

「うん、そうだな……」

俺が考えていると

パシャ!パシャ!

突然、フラッシュが光った

「誰だ?」

俺は瞬間的に銃を出した

「おっと物騒な物はしまつて下さいよ」

謎の声は森の中から聞こえて来てやがて正体を現した

（どうやら、好戦的な感じではないな。）

そう思つて俺は銃をしまった。その直後一人の女の子が現れた

「あややくあなたが今、巷で有名な戦場孟さんですか」

「君は？後、どうして俺の名前を？」

俺は質問した

「おっと、私は射命丸文と申します。文と読んで下さい。この幻想郷で記者をしています。それから、なぜ、あなたの名前を知っているかと言つと情報でいち早く掴みまして、いろんな方から聞いたんですよ」

「なるほど、文、君は烏天狗か？」

俺は正体を言つて見た

「およ？どうして、分かるんですか？」

文は首をかしげた

「いや、なんとなく。俺の世界のダチに同じような奴がいてさ」

「ほ〜う。で、あなた方はどうして、妖怪の山に？」

文が質問した

「ああ、ここ最近の連続事件は知ってるだろう？それで、俺は何とかこの世界を守りたいと思ってな。相手は現代兵器を使う集団だ。それなら同等の力を持った奴が対抗すべきだろう？それで、ここら辺で見た事もないようなものを君は見ているかな？」

俺は最近の事と後質問もした

「なるほど〜、それとさっきの質問ですが、裏の川に住んでいる河童で一人、そう言った技術を持っている子がいるんですが、その子の話だと何か新しい物を見つけたと言っていましたね〜」

（ふむ、裏の川でか。大体予想はできるが、言ってみないと分からないな）

俺は考えた

「そうか。分かったありがとう」

そう言って進もうとしたが

「あの、でしたら私が道案内をしてあげますよ？」

文が提案を出した

「本当か？」

「ええ、ですが、条件があります」

「なんだ？」

「あつちに着くまで取材をさせてもいいですか？いろいろ聞きたいんですよ」

「ああ、いいともそれぐらいならお安い御用だ」

「本当ですか！？ありがとうございます。では、行きましよう！」

そう言って俺達は文の後を付いて行った

河城にとり

俺達は文の案内で妖怪の山の裏にある川に住んでいる河童に会うことになった。文によると河童が最近新しい物を見つけたとの情報が入ったらしい。

その途中、俺は文にいろんな質問を受けていた。

「年齢はいくつですか？」

「20だ」

「趣味は何ですか？」

「んゝまあ上げるなら銃の整備かな？」

「銃？」

文が首をかしげた

「ああ、この事だよ」

そうやって俺はイーグルを出した

「へえゝこれが、」

「ああ、飛び道具の一種だがな。これを避けられるのはまずいないだろう。」

「そんなに速いんですか？」

文が質問してきた

「まあ、そうだろうな。それとこれ以外にも種類があつてな。」

俺は銃の事に付いていろいろ説明した。

「なるほど、外の世界ではこれが主な武器になると言うことですね」

文が納得したように言った

「ああ、そうだ。お？そろそろ着くかな？」

俺が言った後、川のせせらぎが聞こえてきた

「川」

「おお、きれいな川だな」

俺が言った

「外の世界でもこういう所はあるんじゃないか？」

藍が言った

「いや、こう言う所は逆に減ってきているな。人間が住む町のために失くされる川もあるし、産業廃棄物やらで川が汚れてしまっている所もあるしな」

「そうなのか」

「で？文、その河童はどこに居るんだ？」

俺が文に聞いた

「ちょっと待って下さい。今呼びますから、にとり
ー？
ー！！いるー

文は川に向かって大きな声で叫んだ

すると……

チャプチャプ

水面に何かが浮かんでそのまま俺達の方に来た

「やあ、文珍しいね他の人と一緒に来るなんて」

彼女は河城にとり、この幻想郷で唯一の技術者である

「いや、にとりにお客さんだからさ。ここに案内したわけ」

「初めまして、戦場孟だ。外の世界から来た」

「初めまして河城にとりだよ。にとりって呼んでね」

そう言って互いに握手をした

「それじゃあ私はこれで」

「あれ？文は他に用事があるのか？」

俺が言った

「ええ、今日は大天狗様に呼び出しを食らっちゃったから」

「そうか。また、ここには来るかもしれない。そんな時はよろしくな」

「ええ、では失礼します」

そう言っつて文は飛んでいった

「それで、孟と藍さんは何の用事で来たの？」

にとりが聞いて来た

「ああ、文から聞いたんだが、最近、見た事もない物を見つけたって聞いてな。もしかしたら分かるかもしれないと思って来てみたんだ」

「ああ！あれの事かな」

にとりは何かを思い出したようだ

「それで、できれば見せてもらえたらいいかなって思っつてな」

俺が言った

「OK、そう言うことなら任しておいてよ。なまっ付いて来て」

そう言うてにとりは走って行った

俺達もそれに続いた

くにとり工房く

にとりに付いて行って数分立った所で一軒の家が見えてきた。外見は飛行機のハンガーにも見えた

「ここが、にとりの工房なのか？」

俺が聞いた

「そう！さっき言った奴もここに置いてあるからな」

そう言うて中に入って行った

「さて、俺達も行くか。」

「ああ、そうだな」

そう言うて俺と藍も入った

く工房の中く

「じ、これは・・・」

俺は驚いた

「これは、なんなのだ？孟」

藍が聞いて来た

そこにあつたのはUH-1イロコイヘリコプターであつた。湾岸・ベトナム戦争で大いに活躍した汎用ヘリコプターである。

「これは、ヘリコプターと言つてな。空を飛ぶ乗り物なんだ」

「へえ〜」

にとりと藍は同じ反応を見せた

「これはどこにあつたんだ？」

俺はにとりに聞いた

「うん、おとといぐらいかな。川を泳いでたら近くの森で何かが落ちる音がしてさ。気になって見て見たらこれがあつて、中には誰もいなかったよ」

「そうか」

だとしたら、推測はできる。きっとミサイルを喰らつて制御不能になりそのまま墜落で機体ごとそのまま幻想郷に来たつて所だろう。しかし、乗員がいないのはなぜだ？途中で脱出したか、もしくは消えたということか？

「しかし、よく直せたな。初めて見る物なんだろ？」

藍が言った

「ああ、それなら、設計図みたいなものが一緒に乗ってたよ。だから直す事が出来たんだ」

「それはどこにある？」

俺が聞いた

「あそこの机に置いてあるよ」

そう言っ指さした

俺は見て見た

「こいつは初期型の設計図だな。しかし、なんでこんな物が乗ってあつたんだ？」

俺は疑問に思った

「深く考えてみようがなくないか？」

藍が言った

「そうだな。それはおいおい考えるところ。で、にとり」

「何？」

「こいつはもらう事は出来ないか？」

物は試しに聞いてみた

「うーん、どうしようかな」

にとりは悩んでいた

「ここ最近の連続事件の事は知ってるだろう？あれは俺達と同じ外の世界から来た連中だ。しかも、この幻想郷を壊そうともしているみたいだ。俺達には多くの仲間がいるが戦う物が少なくてな。頼む！どうしても必要なんだ」

俺は手を合わせて言った

「じゃあ、そこにある設計図をもらえるなら考えない事もないよ？」
にとりが言った

「ああ、それならいいさ。ついでにもう一つ頼みがある」

「何？」

「ここを整備工場兼生産工場として使えないかな？」

「それだと、お金がかかるけど・・・」

「ああ、それなら心配ない。」

「そう。なら使ってもいいよ。ただし、条件として私とかも一緒に居ていいよね？」

「ああ、問題ない。むしろありがたいくらいだ。ぜひとも頼むよ」

「分かった。これからもよろしくね。孟」

「ああ、よろしく頼む」

それから、俺と藍にとりは少し談笑してへりに付いているいる教えた。そして、一旦帰宅する事になったので俺はへりを工房に出した

「じゃあ、これからもよろしく頼むよ。にとり」

「うん、じゃああつちに居る人達にもよろしくね」

「ああ」

ヒュイイイン

「「おおー!!」「」

二人はへりが動く所なんて見た事はなかったのだろう。それに驚いた

バラバラバラバラ

「気お付けてね」

下でにとりが叫んだ

俺は指で合図しそのまま八雲邸に向けて飛びだったのであった

情報

俺と藍は前回、河城にとりの所でヒューイを手に入れ、そのまま八雲家へと帰還した。最初着いた時は皆が警戒をしてて大変だった。

それでも、なんとか誤解を解いて無事、着陸する事が出来た。

WW?の兵士達は初めてへりを見たため周りに群がってしまい大変だった。

それから、郷田さんに聞くとそれぞれの分野でそれぞれの訓練を行っているらしく徐々にチームとしての力も付いて来ていると話してくれた。俺も河城にとりの事や工房の事を皆に話した。

それからというもの日々、訓練をこなす日々が続いた。

「よし、皆、射撃訓練だ。あの的に向かって撃つてくれ」

俺が指示を出した。

今、行っているのは射撃訓練、銃の種類を一つだけではなく、様々な種類を扱えるように訓練している。そして、弾の、無駄遣いをしないように紫から電動ガンを入れてくれるように頼んだ。最初はどいう物なのか説明しなければならなかったが、説明すると紫は「わかったわ」と言っって品物通りの物をスキマから取り寄せてくれた

本当にありがたい。この電動ガンなら弾の消費はしなくて済むし、尚且つ大きな音も出ないため紫達に迷惑を掛けずに済む、まさに一石二鳥だ

「よし、皆だいが、うまくなってきた。ただし、これは、所詮玩具だ。本物とは違う事は皆が良く分かっている事だろう。それを覚えていてくれ」

「……………分かりました！！」「……………」

そう言つて兵士たちが敬礼をした

「それじゃあ休憩してくれ。しばらくしたら体力訓練を行う」

「……………了解！」「……………」

そう言つて各々解散した

俺は八雲家の自分の部屋に戻り、車両探索に出ていた。郷田さん達に無線で呼びかけた

「あーあー、こちらは孟、郷田さん聞こえますか？」

「ガツ、こちらは砲兵長郷田だ。どうした？孟君」

すぐに反応があつた

「いえ、こちらは射撃訓練が終わつて休憩を取っている所なんです。そちらは何か、掴めましたか？」

俺が言つた

「いいや、まだ見つからない。今は人里に居るんだが、どうに

も情報が入らなくてね」

「そうですか。あっ！だったら、近くにある寺子屋に向かって見て下さい」

「寺子屋？」

「ええ、その教師をしている上白沢慧音という人物がいるんですが、彼女なら何らかの情報を持っているかもしれない。ついでに例の部隊の事も聞いておいてくれませんか？」

俺は慧音の事を郷田さんに教えた

「分かった。そうして見るよ」

そう言って郷田さんは無線を切った

その時

トントン

「ん？はい」

ガラッ

「やあ、孟」

そこに居たのは藍だった

「どうした？藍」

「いや、お茶は飲むかなっと思ってな」

そう言われて藍の手元を見るとお茶とお茶菓子を持っていた

「おお、ありがとう。もちろん、飲むよ」

「それじゃあ、付いて来てくれ。縁側で飲もう」

そう言って藍は部屋を出た

俺もすぐ後を付いて行った

（縁側）

縁側に着くとちえんと紫がいた

「あら、いらっしやい」

「あ、孟さん」

紫は挨拶をしてちえんは俺に飛びついた

「よう、ちえんに紫」

俺はちえんの頭を撫でながら紫に挨拶した

「なんか、二人を久々に見た気がするよ」

俺が言った

「あはは、何言ってるの？それじゃあ、まるでおじいちゃんよ」

紫が笑いながら言った

「まあ、実際忙しかったからな」

そう言っただけ俺は縁側に腰かけた。

「そうね。たった数日だけどいろんな事が起きたわね。」

紫はお茶を飲みながら言った

「ああ、そうだな。まあ、でも俺がこうやって行けるのも紫や藍、ちえんのおかげだと思ってるよ。そうじゃなかったら俺は今頃、天国に召されているだろうさ」

「もう、そんなこと言わないの。私達もあなたが来てからずいぶんと楽しくなったわ」

「そうか？」

「ええ、藍もちえんも前より明るくなってるわ。私には分かる」

「まあ、俺もなんだかんだ言いながら楽しくなってるしな」

「そうそう。私もあの連中に付いて調べて見たんだけど」

「教えてくれ。あの連中についてはよく分からん事が多すぎてな。小さな情報でも良い」

そう言ってお茶を飲んだ

「分かったわ。まず、あれは私や霊夢の仕業ではない」

「どういうことだ？」

「私はスキマを扱える事は知っているわね？二次元はもちろん三次元の世界からもスキマを作ってこっちに持ってこれるの。前に持ってきた武器・弾薬がいい例ね。」

ああ、あの大量の武器・弾薬か。確かにすごかったな

「それに霊夢はこの幻想郷の結界を管理してるの。だから、結界が霊夢の手によって開かれた場合、私にも分かるようになってるの」

「なるほど、つまりこれは自然的に起きた、と言うことか？」

「ええ、多分。でもまだ分からないわ。もしかしたら別の誰かが行っているのかもしれないし、そこはもう少し調査して見るわ。」

「ああ、頼む」

「それから、奴らの名前が分かったわ。彼らは世界師団と呼ばれる組織みたい」

「世界師団……」

うーむ、そんな名前の奴らは聞いた事がないな

「これは、あなたの世界の人間じゃないわ。異次元の世界から迷い込んだみたい。」

「なるほどな。だが、奴らの目的はなんだ？闇雲に動いてるわけじゃないだろう？」

俺が言った

「ええ、彼らは世界の軍隊を一つにまとめようとしてたの本来の世界でね」

「一つの軍隊？」

「そう。これについて私にはよく分からないわ。軍隊と言う概念もここには無かったから」

「そうか。しかし、一つの軍隊ってのが引つかかるな。」

「そうね。しかも、妖怪が手を貸してるみたいなの」

「何？それは本当か？」

「ええ、一部の妖怪は交渉して仲間に入ったみたい。でも、特定はできていないわ」

「そうなのか。それだったら一層警戒しないとな」

「ええ、妖怪が関わっている以上、私も協力させてもらっわ。」

紫は俺を見ながら言った

「ああ、ありがとう。だけど、無理はするなよ？これは俺からの願いだ。まだ、何も礼は返せてないんだからな」

「ふふっそうね。分かったわ」

それから、少し、談笑した。その後ちえんや藍が戻ってきて一緒に談笑した。まるで、家族みたいに・・・孟はそう思った。

くおまけく

「いやく今日も一日疲れたな」

俺はあの後、郷田さん達が帰ってくるまで待っていた。しかし、今回は収穫はなかったみたいだ。その後、郷田さん達と分かれ、風呂場に向かっていた

「さて、一日の汗を流して、気持ち良く寝るとするかね」

ガラッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこに待っていたのは、お風呂から上がったばかりの紫だった

「キャッ!?!」

紫はその場で体を隠すようにしゃがんだ

「わ、悪い!」

ピシャッ!!

俺はすぐに風呂場の扉を閉めた

(むゝ誰も入ってないと思っていたが、まさか紫が入ってるとは思わなかったわゝ紫には悪い事をしたな)

そう思っていると風呂場の扉が開いた

「あ!紫、さっきは悪かった」

そう言って頭を下げた

「い、いいのよ。気にしないで、そ、それより・・・・・・・・」

紫は怒ってはいなかったが何か拳動不審だった

「?」

「わ、私の体……どうだった？／／」

「え！？いや、その……とても……きれい……だったよ」

突然の質問に俺はタジタジとなりながら言った

「そう！よかった／／それじゃ！お休み！」

そう言って紫はそそくさと行ってしまった

「な……何だったんだ？」

俺はそこで立ち尽くしていた

とりあえず、人里へ

俺は、郷田さんに訓練を任せて人里に向かった。最近では、森も切り開かれて車が通れるように整備されたので俺はハンヴィーで一人、移動していた。

ブオオオ

「いや〜久々に一人で移動するな〜そうだ、確か、バツクの中に・・・」

そう言っただ俺はバツクから葉巻を取り出して火を付けた

「フウ〜、ん〜うまいな〜」

俺は久々の葉巻の味を堪能していた

そのまま、人里に向かった。

〜人里〜

人里に着くと丁度、昼ごろだったので近くの飲食店で食べて行くことにした

ガラガラ〜

「へい！らっしやい！」

店に入ると大将が威勢よく言ってきた

「おう、親父さん、カツ丼一つね」

「分かりやした。少々お待ちを」

そう言っつて大将は厨房に向かった

俺はコップに水を入れて飲んだ

ガラガラ

「ん？おう、慧音、妹紅」

店に入って来たのは慧音と妹紅であった

「おや、孟ではないか。」

「よっ孟」

二人はそれぞれ挨拶した

「隣、いいか？」

慧音が言っつてきた

「ああ、どうぞ」

そう言っつて二人は隣の席に座った

「最近はどうだ？」

慧音が言ってきた

「だんだんと物は集まってきたよ。やっぱり、幻想郷のどっかには廃棄された車両があるみたいだ」

「そうか。では、仕掛けるのか？」

「そうだな。まだ、場所は正確に分かってないから動けないけど、分かったら実行に移そうとは思っている。そういえば、寺子屋の方はどうなんだ？」

俺が聞いた

「ああ、子供達はきちんと授業を受けているさ。たまに私の出した宿題を忘れる奴はいるがな」

そう言っただけで慧音は水を飲んだ

「妹紅は慧音の手伝いなのか？」

「うん。と言っても教えてるわけじゃないよ。テストの採点とか書類とかを手伝ってるだけさ」

「ふん」

「へい！カツ丼、お待たせしやした」

丁度、話を終えると同時に大将が注文の品を出してきた

「おう、親父さんありがとう」

「へい、おや、先生に妹紅さんじゃあないですか。今日は何にします？」

どうやら、慧音と妹紅は常連のようだ

「じゃあ、いつもの二つで妹紅もそれでいいよな？」

「うん」

「じゃあ、それで」

「へい、分かりました」

そう言っつて大将はまた、厨房に入った

「二人は常連なのか？」

俺が聞いた

「ええ、ここは寺子屋に近いからな。昼はここで食べているんだ」

「ふん。」

そう言いながら俺はカツ丼を食べた

「そういえば、そっちじゃあ何か情報はあつたか？」

「ああ、前にお前の仲間と言う人物が来たときにも言ったんだが、

ここ最近じゃあ奴らに関する情報は入ってきていない。一応周辺に居る人間や妖怪に言っではいるが行方不明になっている。それがおかしんだ」

前に紫が言っただ情報と一致しているな

「それは確かな情報だ。しかも紫から聞いたんだが一部の妖怪が奴らの仲間になっているんだ。」

「なんだって!?!」

二人は驚いた

「落ち着け、まだ、どの妖怪がなっているかは分からない。もしかしたら、奴らに捕まっているかもしれない。だからこそ、奴らの居場所が確定しないといけない」

「そうだな。私もできるだけ情報を集めて見るとしよう」

「私は前に言った所に戻って見るよ。もしかしたら、奴らの場所が分かるかもしれない」

「助かる。二人とも」

「へい!いつもの定食、お待ち!」

大将は定食を二人分出してきた

「さて、話はここまでだ。楽しい、昼食と行こうじゃないか」

そう言つて俺達は談笑した

昼食の後、慧音が寺子屋に来てほしいと言われたので俺は慧音と一緒に寺子屋に居た。妹紅は帰ると言ったのでそのまま、飲食店の前で別れた

〔寺子屋〕

「それで、何をすんだ？慧音」

俺が聞いた

「実は、先生をやつてもらおうと思つてな」

「………はい？」

俺は思わず聞いてしまった。

「だから、先生をやつて欲しいんだ。お前は」

「おいおいおい。ちょっと待て！？じゃあ、あれか？俺が寺子屋の子供達に勉強を教えろつて事か！？」

「ああ、そう言つたんだ」

慧音は当たり前のように言つた

「でも、俺なんかでいいのか？勉強なんて教えた事ないぞ」

若干慌てた

「大丈夫だ。前に紫から聞いたんだが、お前は兵士に教えるのが上手だと聞いたんだ。」

紫めく余計な事を言いやがって

「……で、どれを教えるんだ？」

俺が仕方なく了承した

「ああ、歴史だけだ」

「何？それだけか？」

俺は聞いた

「ああ、私の授業は歴史しか教えていないんだ」

「それじゃあ、子供達は歴史しか分からないだろう」

「そうなんだが、私も他の授業はした事がなくてな」

なるほど、経験がないということか

「だったら、今日は別の授業をしよう。俺の勝手に良いか？」

「ああ、分かった好きなようにしてくれ」

く教室く

そして、そのまま教室に入ることになった

「はい、皆、今日は特別に新しい先生が授業しますよ。では入ってきて下さい」

俺はそのまま教室に入った

「はい、皆、初めまして、戦場孟だ。」

「「「「初めまして！」「」「」」」」

子供達は元気に返事をした

「じゃあ、授業を始めろ。とその前に今日は歴史の授業はやらない。今日は別の事をやる。さあ、皆、外に出てくれ」

そう言って皆を外に出した

「孟、何をするんだ？」

「なに、簡単な授業さ」

そう言って俺も外に出た

（外）

外に出て俺達は近くの広場に出た

「先生！何の授業をするの？」

一人の生徒が言った

「それはだな。これだ!!」

そう言って取り出したのはボールを出した

「先生、それ何？」

「これはだな。ボールだ。今日はこれを使って授業をする」

そうして、皆に説明をした。

そう。授業の内容とは体育の授業だ。これなら俺にも簡単に授業を教えられる

「それじゃあ、始め!!」

そう言って子供達はドッチボールを始めた

俺は少し離れて様子を見た。すると慧音が来た

「これが、授業か」

「ああ、中で勉強する事も大事だが、体を動かすことだって大事なことだ」

「なるほど、確かにそれも大事なことだな」

慧音は納得したように言った

「どうした？」

「いや、子供たちがあんなに生き生きしているように見えてな。私もまだまだだな」

「そうじゃないさ。慧音はまだ、知らなかったんだ。それは仕方ない事だ。これからは俺がいろんな事を教えてあげるよ。」

「ああ、ありがとう。」

「せんせー！一緒にやるつよー！」

子供が声を掛けた

「ああ！今行くよ。さあ行こう慧音」

「ああ」

そう言って慧音の手を引っ張った

その後、子供たちと一緒にドッチボールをした。慧音もとても楽しくやっているように見えた

そして、そのまま授業は終了し別れた

情報収集

俺は八雲邸からハンヴィーで情報収集に向かっていた。

今まで歩きだったのでなかなかできなかったが、車のおかげでずいぶんと時間が捗れるようになった。

ブオオオオ

「さて、今日はどこまで行こうかね？」

俺は一人で言っていた。

「とりあえず、人里はいいとして、今回はもっと奥の方に行ってみようか。確か、花畑があったんだよね。でも、藍はそこには寄らない方がいいって言ってたけど……」

行くなって言われると行きたいって気持ちになるよな。

「とりあえず、行って見よう！」

ブオオオオ

俺はハンヴィーを思いっきり飛ばして行った

く花畑く

キキーツ

俺は目的の場所に到着して車から降りた。車の位置は花畑の少し離れた場所に置いた

「へえ、これが花畑か。いろんな種類の花があるな。」

そうやって俺は花を踏まないように進んで行った

「外の世界じゃあ中々、見れない光景だよな。」

そうやって見ていると

「あら、ここに何の用かしら？」

振り返ってみるとそこには赤い服を着て日傘を持った女性が立っていた

「あ、すまない。俺は八雲紫の所で世話になっている戦場孟って言うもんだ。あんたは？」

俺は自己紹介した

「紫の？ああ、今噂になっっている人ね」

「俺の事、知っているのか？」

俺が聞いた

「ええ、天狗の新聞で見たわ。」

「ふうん、文の新聞をか。それで、名前は？」

「ああ、私は風見幽香よ。この花畑を管理しているの」

幽香は自己紹介した

「この花畑をか？ずいぶんと広いようだが、一人でやっているのか？」

俺が聞いた

「ええ、そうよ。」

「そうか、大変じゃないか？」

「そうでもないわ。私はここで暮らしているの。だから、この花畑は家族みたいなものよ。」

そう言っって近くの花に水をやった

「そうか。それにしてもきれいだな」

そう言っって周りを見渡した

「あなた、ずいぶんと興味があるのね。人間って大抵は花を見ないから珍しいわ」

幽香が言ってきた

「そうか？きれいな物はきれいだろ。」

「そう……所で何か用があつたの？」

「ああ、本当は藍に場所を教えてもらつて興味本位で来たんだが、情報を集めているんだ。幽香は何か知らないか？」

俺は聞いた

「そうね……前にここに来た連中かしら？見た事のない武器を持つてこの花畑に来たわ。まあ、私にはそんなの効かなかつたけどね」

そう言つて幽香は笑つた

「やっぱりそうだよな。人間じゃあ妖怪には勝てないか。」

「ええ、そうね。でも、それがどうかしたの？」

幽香が聞いて来た

「実は、幽香以外にも被害を受けている妖怪やら人間がいるんだ。それを止めるために俺は動いてる。」

「そう。」

「他に何か、情報はないか？」

俺が聞いた

「うーん、そうね。あいつらが下がって行く時、あつちに逃げて行ったわ。あつちは誰も近づかない山だからもしかしたら、いるかもしれないわね」

そう言って幽香は山の方向を指さした

「そうか。貴重な情報ありがとう。」

そう言ってお辞儀した

「役に立ったかしら？」

「ああ、もしかしたら、奴らの居場所が確定したかもしれない。」

「本当に？それはよかったわ」

「ああ、本当にありがとう」

「よかったら、私の家でお茶でも飲んで行かない？あなたに興味が沸いたわ」

「いいのか？」

「ええ、私の勝手な誘いだから」

そう言って家のある方向に向かって歩いて行った。俺も付いて行った

〈幽香の家〉

「はい、どうぞ」

幽香は紅茶を出した

「ありがとう」

そう言っつて俺は紅茶を飲んだ

「ん〜うまいな。この紅茶」

「あら、ありがとう。嬉しいわ」

そう言っつて幽香も反対の席に座った

「ああ、外の世界でも紅茶は飲んでいたが、こんなにうまいのは初めてだよ」

「あら、外の世界にはどんな紅茶があるの？」

そう言っつて幽香と外の世界について話していった。

「でな。外の世界だと、フランスっつて言う所の紅茶がうまいんだよな。」

「ぜひ、飲んでみたいわね。あなた、他に好きな事とかあるの？」

「まあ、簡単に言っつと銃の整備とかかな？」

「銃？」

幽香が首をかしげた

「ああ、これの事だよ。」

そう言ってイーグルを出して机の上に置いた

「へえ〜結構、重いよね」

イーグルを持ちながら言った

「こつちの世界じゃあ見ない物だからな。珍しいっちゃんあ珍しいかな」

そう言って紅茶を飲んだ。それにしてもうまいな

「外の世界だとこれが武器となるの?」

「ああ、そうだな。」

「へえ〜」

そうして暫く談笑していった俺達であった

〜花畑前〜

「今日は楽しかったわ」

「ああ、俺もだ。」

「また、近くに來たらずせひ寄つてきなさい。その時は歓迎するわ」
そう言つて手を差し出した

「ああ、せひとも寄らせてもらつよ」

そう言つて俺も手を出し握手をした

「それじゃあな。」

ガチャン、バタン

ブロロロ

「それじゃあ氣お付けて帰りなさいな。」

「ああ、」

そう言つてハンヴィーを發進させ八雲邸に向け帰還へと急いだ

（今回の情報はでかいからな。準備が整い次第、すぐにも動くとするか。そのためにも郷田さんや紫に相談、しなくちゃな）

そう思いながら俺はアクセル全開で走つて行つた

侵攻作戦と捕虜救助の会議

俺は幽香の所から帰ってきてすぐに郷田さんや紫に情報を言った。

すると、すぐに会議を行うとの事なので八雲家の宴会場に集合した

（宴会場）

「では、これより敵基地急襲作戦を行う。」

司会は郷田さんである

「まずは、概要だ。孟君の情報を元に作成した。聞いてくれ。敵・外人傭兵部隊は太陽の畑の更に奥にある山にある事が分かった。今回は三つの班に分かれて攻撃をする。まず、地上部隊は私とパイパー軍曹の率いる戦車隊が攻撃する。それと同時に航空部隊が地上に圧力を掛ける。そして、歩兵部隊が基地に突入し、基地の制圧を行う。ここままで何か質問はあるか？」

郷田さんが言った

「あの〜航空部隊ってあのへりで編成されるんですよね？だとしたら一機だけでは心もとなくわらないですか？」

一人の兵士が言った

「ああ、それなら心配ない。にとりの所でへりが生産されていて五機はもう稼働できるらしい。なので航空部隊は工場の方に向かってからこっちに来てもらいたい」

俺が言った

「他に質問はあるか？」

郷田さんが言った

.....

皆は黙った

「よし、ではすぐに取り掛かってくれ。ああそれと幹部だけは残ってもらいたい。重要な話がある。では、解散」

そう言った瞬間、兵士達は解散し準備を始めた。宴会場には俺、郷田さん、紫、藍、パイパー軍曹、バートレット大尉とランクの上の人物だ

バートレットは有名な戦闘機乗りである大戦に生き残った人物である。腕はまさに神業と言われている

「で？重要とは話ってなんだ？」

バートレットが言う

「実は、基地に仕掛けた際、捕虜を救出して欲しいんだが、誰かその役目を持ってもらいたいと思ってな」

俺が言った

「うーむ、それだと私や郷田はダメだな。戦車に乗っているし尚且つ誘導に使えるかもしれないからな」

パイパー軍曹が言う

「確かにな。それだとバートレット大尉はどうなんだ?」

郷田さんが言った

「俺も駄目だな。俺達は航空の方に回ると思っし、それに負傷兵とか捕虜を運ばなきゃあいけないしな。そっちまで回らないと思っ」

バートレットが言った

「だったら、私が行くわ」

そう言って紫が手を上げた

「しかし、危険だぞ?いくら、妖怪とはいえ・・・」

「あら、私にはスキマの能力があるのよ?その気になれば基地の中に侵入できるわ」

紫は自信満々に言う

「そうだな。じゃあ、紫は別働隊で動いてくれ。騒ぎはこっちでやるから」

俺が言った

「いいのか？孟君」

「ええ、こつちで手が回らなきゃあ捕虜が危ない目に遭うんだ。それを見過ごすほど俺は馬鹿じゃあないですよ」

「そうか。分かった」

「決まりね。じゃあ解散」

紫が言つて幕を閉めた

〈庭〉

俺は庭に出てトラックの方に向かった。そして、自分の武器を準備し始めた

「さて、俺は歩兵で行こうかな？だとしたら、遠距離からやるか。」
そう言つてバレットライフルを出した。

このバレットライフルは今までのバレットより改良してある。まず、銃身が短くなつておりパーツ自体も軽い材料を使用しているため持ち運びがより効率的になつた。そして、弾は12・7mm弾から15・5mm弾となっている。この弾はアメリカ軍が独自に開発しその試験的な意味で日本に送られてきたのだと言う。

弾自体がでかいので最新の戦車でさえ撃ち抜けるとの噂が立っているほどだ。それが本当かどうかは俺自身知らないがな。まあ、使つて見りゃあ分かる事だ

ガチャガチャ

「うーん、スコープは倍率の高いものしておこう。」

そう言いながらバレットにスコープを取り付ける

「孟さん」

「ん？おう、ちえんかどうした？」

トラックから顔を出すとちえんが立っていた

「孟さんにお客さんですよ。紅魔館のレミリアさんが」

「レミリアが？なんだろ。分かったすぐに行くよ。どこに向かえば良い？」

「客間の方に向かって下さい。」

そう言っでちえんは行った

俺はすぐに客間の方に向かった

〈客間〉

ガラッ

「すまん。遅くなった」

入って見るとレミリア、咲夜、紫がいた

「気にしないで、それより座ってよ」

そう言っつて紫の隣に俺は座った

「それで、どうしたんだ？レミリア、こんな真昼間から」

「ええ、実はあなたに頼みがあつて来たのよ」

「頼み？」

俺は首をかしげた

「ええ、実は・・・数日前から妹のフランが行方不明になったの。」

「ああ、妹さんか。行方が分からないのか？」

「ええ、あの子は最近、出ている事が多かったけどでも、どこかに行く際、あの子私か咲夜、美鈴に必ず言うの。それなのに突然、いなくなつたの。周辺を皆で探したけど、どこにもいなかったわ・・・もしかしたらあなたの言つてた傭兵部隊に連れ去られたのかもしれないわね。」

レミリアは暗そうに言う

「そうか。タイミングが良いなレミリア」

「どういつ事？」

「実は、その傭兵部隊の場所が分かつたんだ。」

「本当に!？」

レミリアはばつと立ちあがった

「ああ、それで今準備している所なんだ。準備ができ次第、奇襲を掛けるつもりだ」

「それで、場所は？」

レミリアが聞いてくる

「場所は太陽の畑の更に奥、そこにある山に基地がある」

「あそこは、妖怪とかも近づかない場所ね。どうりで見つからない訳ね」

「ああ、そうだ。それと、これは別の話だが今の話を聞いて行くこととするなよ?いくら妖怪とはいえ多勢に無勢だ。」

俺は忠告を言った

「その通りね。だけど私も手伝いたい。どうすればいい?」

レミリアが聞いてくる

「簡単な事だ。俺達と一緒に来ればいい。紫が別働隊として捕虜の救出を行うからそれに付いて行けばいい」

俺が言った

「そうね。分かったわ。紫、よろしくね」

「ええ、よろしく。お互い、頑張りましょう?」

「そうね」

そう言って紫とレミリアは笑った

「ふう」

これで、無駄な犠牲は増えずに済むな。大切な家族がさらわれたとはいえ取り乱してしまっただけは元も公もない

「孟さん」

「ん?」

咲夜が近づいて来た

「ありがとうございます」

「待った。礼なら後にしてくれ。まだ、終わってないんだ」

「そうね。お讓様が行くのでしたら私もついて行くかどうかと思います」

咲夜が言った

「そうか。まあ人数が増えるに越したことはない。」

「それで、孟さん」

「なんだ？」

「あなた達の武器を一つ、私にくださいませんか？」

「それってと銃の事か？」

「はい」

「でも、扱えるのか？」

俺が聞いた

「一応、私も人間ですので」

「え？でも、時間を止める事が出来るんでしょ？」

「ええ、確かにできますわ。私は元々バンパイアーハンターでしたので銃の扱いは一応心がけていましたわ」

「バンパイアーハンター……」

となると中世の頃の銃になっちまうな。現代とじゃあ結構、差があるぞ

「分かった。でも、今の銃は咲夜が知ってるような銃とは桁違いだと思うから一応、教えておきな」

「はい、分かりました」

そうやって俺達も準備を始めた

基地急襲

俺たちは外人部隊の基地がある所に急襲を掛けようとしていた。そのためいろいろ下準備をしてきた。そして、準備を終え、次の日を待った

〽次の日 早朝〽

チュンチュン

まだ、外は太陽も出ていないほどの早朝だ。これなら奇襲には持つて来いって感じだな。空は雲ひとつない星空が広がっていた

八雲邸

「GO!GO!GO!」

俺の合図とともに兵士たちが一斉に動き出し、それぞれの車両に搭乗した。

「エンジン始動!」

「了解、エンジン始動!」

一斉に戦車や装甲車のエンジンが動き出し、エンジンを温めた

ザッ

兵士たちは車両の前に並び敬礼した

「これから、敵基地奇襲作戦を行う。各員、しっかりと状況を把握して臨むこと！それと決して無駄死はするな！危なくなったら下がってもいい。その事をしっかりと頭に叩き込んでおけ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そう言っつて兵士たちは再び敬礼した

「よし！作戦開始だ！全員搭乗！」

おれの掛け声で各々の車両に乗り始めた隊員達、俺はハンヴィーの方に乗った。今回は武器庫として使っているトラック以外全部動かした

「隊長、よろしくお願いします」

そう言っつてきたのはグリム二等兵だった。彼は戦闘機乗りであるがあつちの世界ではまだ、補習教育生としていたため正式的にはまだ、実戦経験はない。そのため、今回は俺が連れていくことにした

「ああ、よろしくな。戦闘に入ったら俺に近くにいればいい。危ない時は下がってもいいからな」

「分かりました」

「よし、各車両、準備ができしだい目的地に向かえ、尚、航空隊は先ににとりの所に向かいヘリを回収してきてくれ」

俺がそういつと航空隊のバートレット大尉が返事をした

「了解だぜ。孟、すぐに行くから待ってるよ」

「ええ、もちろん、期待してますよ。バートレット大尉」

そう言っつて無線を切った

「さて、俺たちも出発だ。ホープ、言っつてくれ」

「了解しました」

そう言っつて俺らも出発した

く太陽の畑付近く

ブオオオ

キュラキュラキュラ

ブオオオオオオ

俺たちは太陽の畑付近を通っていた。この付近は慎重に進めていた。なぜかっつて？

幽香の畑に入ろうものなら俺達が全滅しかねんからな。

「隊長、どうしてこんなに遅く行くんですか？」

グリムが聞いてきた

「ああ、この近くなな畑があるんだが、前にその主と会ってな。彼女のおかげで今回の作戦が実行できたようなものだ。だから、せめてもの配慮だよ」

「なるほど、」

グリムは納得したように言った

そして、そのまま進んでいった

「敵基地付近」

「よし、全車、配置についたか？」

俺が無線で全車に聞いた

「戦車隊、配置につきました」

「機甲部隊、配置につきました」

「歩兵部隊、配置につきました」

「航空隊、もう少しで到着する」

と全部隊から連絡が入った

「よし、作戦開始！」

と言った瞬間、戦車隊が動き出した

戦車隊は基地に一番近い場所に配置しており、目と鼻の先には敵基地の門が見えていた

「パイパー軍曹、前のこと覚えていますかな？」

「ええ、もちろんですとも。是非とも勝負させて頂きましょう」

無線越しで郷田さんとパイパー軍曹が言っていた

「撃てー！ー！！」

ドドーン

爆音が静寂を壊した

ドカーーン！

門に見事、戦車弾が直撃して爆発を起こした

そして、中から外人部隊が出てきた

「よし！戦闘開始だ！歩兵部隊、機甲部隊、共に進軍せよ！」

俺が無線で指示を出した。その後、俺もハンヴィーを降りて森を駆け抜けていった

「よし、ここら辺が一番いいだろう。グリム、いるか？」

「はい、ここにいます」

「よし、ここら辺で見張っていてくれ。もし、敵が来たらお前の判断で攻撃してもいいから、頼んだぞ」

そう言っつて俺は射撃体勢に入りバレットのスコープを覗いた。

夜間のため暗視付きのスコープに取り換えておいて正解だった。夜でも昼のように周りが見えていた

「あそこは、歩兵部隊だな。ということは……」

最初に見つけた人影は歩兵部隊だった。近くに機甲部隊である89式戦闘車両がいたからだ

「いた。スウ」

俺は敵を見つけると息を吸い込んで集中し始めた

ドーン！！

バレットが火を吹いて数キロ先にいた敵兵を撃ち抜いた

「よし！」

そう言っつて俺は次の兵士を探し始めた

（戦車隊）

「撃て！」

私はパイパー軍曹と一緒に敵基地の真正面から砲撃を行っていた。

敵は突然の攻撃で浮き足が立っているようだ

「こちら、パイパー軍曹、郷田砲兵長調子はどうかね？」

パイパー軍曹から連絡があった

「ああ、まだまだいけるよ。そちらはどうかね？」

「久々に乗ったがやっぱり戦車は良い。落ち着くな」

「同感だな。よし、一気に攻め落としてしまおう」

「了解した」

そう言ってどんどん攻め込む私達であった

〔戦車隊 終了〕

「おし、いい感じだな。」

俺は戦闘状況を見て言った。圧倒的に我々の方が圧していた

「孟君、歩兵を出してくれ、敵は対戦車ランチャーを持ちだしてきた」

郷田さんから連絡が入った

「分かりました。場所は分かりますか？」

「正面の建物の中から撃ってきている。」

なるほど、敵は籠城戦に持ち込む気だな

「分かりました。聞いたな？移動するぞ」

そうやって俺と複数の部下を連れて正門の方に向かった

「正門」

正門に着くと戦車隊が壁を盾にして止まっていた

「よし、スナイパー隊、狙撃を開始しろ」

俺が指示を出した。すると、ライフル銃を持った兵士が近くの木に上り狙撃を開始した

バーン！

「よし、移動するぞ」

そうやって俺達が先に中へ入り近くの小屋の陰に入り、暗視装置で周りを確認した

「ふむ、建物はそれほど大きくはないな。中規模の基地か。よし、二つの班に分かれる一つは正面から入る。もう一つは裏から入り上の階を目指してくれ」

俺は小さな声で言った

そして、皆が黙って頷いた

「行動開始」

そう言つて複数に分かれた。俺はM4に持ち替えそのまま正面の方に周った

「そら！出てこいや！」

ダダダ！

俺は柱の陰からぶつ放した

中で小さな断末魔が聞こえた

「よし！皆付いて来い！敵を圧倒するぞ！」

そう言つて中に入る俺達であつた

フランドール・スカーレット

俺達は外人部隊の基地を急襲しなんとか中に潜入する事が出来た。

「隊長、こちらはクリーンです」

グリムが言った

「よし、二階はどつだ?」

無線機で別働隊に連絡を取った

「二階もクリアです。というか人っ子一人いません」

「分かった。そっちは二階で見張りをしてくれ。何か変化があればすぐに連絡してくれ」

「了解しました」

そう言って無線を切った

「よし、俺達は捕虜になっている市民を助けるぞ。」

「了解です」

「了解」

グリムとホープが応えた

「地下」

最初俺達は一階を搜索したがどこにも変化はなかったのものでそのまま地下に降りた。地下は最近作られた物らしくきれいな状態だった

「隊長、この地下、最近作ったものですね」

グリムが言う

「そうだな。と言う事はだ。最近になって捕虜を捕まえ始めたと言う所だろう」

だとしても捕虜を捕まえる要因は何だ？兵力を作るつもりだったのか？基地の広場には射撃訓練場があったからその可能性が高いかもしれないが

と思っていた時

「・・・後ろから誰かが来る」

ホープが異変に気付き俺達に教えた

「敵ならすぐに撃ってくるはずだ。と言う事は……………」

そう言って振り向いた

「盃」

そこに居たのは紫であった。隣にはレミリアと咲夜がいた

「よう、何なく来れたみたいだな」

「ええ、そっちの状況はどう？」

紫が聞いた

「表じゃあ派手にドンパチしてるぜ。おかげで侵入しやすくなってる」

「そう。それじゃあ、早いところ見つけて帰りましょう」

「そうだな」

そう言っつて俺達は奥へ進んだ

く地下 奥く

あの後も敵の襲撃はなく俺達は奥の部屋まで辿りついた

「この奥がもしかしたらあるかもな」

俺が言った

「フラン……」

レミリアが妹の事を思い手を握り締めてきた

「大丈夫だ。レミリア、フランは必ず見つけよう」

「ええ、こんな所で止まっつていてはいけないわね」

そう言って扉を開けた

ギギ

鉄の扉は重く重低音を出しながら開いた

「こいつは牢獄だな」

俺は中の様子を見て言った

だが、牢獄に入れられている市民は居なく静まり返っていた

「妙だな。捕まってる奴がない」

ホープが言った

「確かにな。ここは警戒しておいた方がいい」

そう言ってさらに奥へ進んだ

「ここで最後だな」

あの後もいくつか牢獄はあったがそれでも捕まってる奴はいなかった。そして、一番奥にある扉に辿りついた

「開けますよ」

グリムはそう言って扉を開けた

ギギッ

「よし、先に入って確認する。グリム、ホープ付いて来い」

そう言っつて三人で中に入った

「クリアです」

「こっちもクリア」

「よし、レミリア、紫、咲夜入っつて来てくれ」

そう言っつた後、三人が入っつて来た

「！フラン！」

「見っつかったのか？レミリア」

俺が聞いた

「ええ、ここに居るわ」

そう言っつたのでライトを向けると手錠と足枷に繋がれたフランドール
ルスカーレットがそこに居た

「フランお嬢様！大丈夫ですか？」

咲夜もすぐに寄っつた

「んん・・・お姉ちゃん？咲夜？」

フランは気絶していたらしく意識は朦朧としていた。

「私よフラン。良かった・・・無事で・・・」

レミリアは泣きながら言った

「良かったな。レミリア」

そう言って肩をたたいた

「ええ、さあフラン、ここから出ましよう？」

「う・・・うん、でもまだ、足の感覚がないよ」

フランが言った

「薬剤でも投与されたか？」

ホープが言った

「ああ、その可能性が高いだろう。グリム、お前が背負ってやれ」

「了解です」

そう言ってグリムの背中にフランが背負われた

「二人にもう用はない。早いとこ出よう」

「そうね。」

紫が応えた

その時だった

「ガツ孟君！聞こえるか！」

無線から郷田さんの声が聞こえた

「こちら、孟です。何かありましたか？」

俺が言った

「少々問題が起きてな。奴ら、戦車を用意していたみたいだ。しかも入口を陣取られている。こちらは負傷兵多数だ。今は何とか抑えられているが、正直どこまで持つかわからん。早く出て来てくれ」

「何！？分かりました！すぐに向かいます！」

そう言っつて無線を切った

「どうかしたの？孟」

紫が聞いた

「少々厄介なことになった。あいつら逃げたんじゃなくて俺達を嵌める為に誘い込んだんだ。表じゃあ負傷兵が多数出たみたいだ」

「なんですって！？すぐに向かいますよ」

そう言っつて俺達は一階に戻った

く一階入り口く

俺達は入り口まで戻って来られた。途中紫達はスキマで戻った方がいいと言っつたのだが頑なに断られてしまひ。結局付いて来てしまつた。

「よし、一旦ここで待っつていてくれ。郷田さんに現状を聞いてみる。

」

そう言っつて無線機を取り出した

「郷田さん、聞こえますか？」

「ああ、聞こえる」

「今、俺達は一階の入り口に居ます。そちらから見えますか？」

「ああ、見えたよ。こちらは分かるかね？」

確認して見ると郷田さんやパイパー軍曹が戦車を盾に座つていた

「ええ、見えますよ。それで、現状は？」

「変化なしだ。奴らは表を陣取つて私達が出てくるのを待っつているみたいだ」

「なるほど、袋の鼠と言っつ訳ですか」

「そんな所だ。しかし、どうする?」

郷田さんが聞いて来た

「一旦、防戦に入りましょう。この武器庫に対戦車ランチャーがないかどうか。調べてきます」

「頼む、変化あり次第連絡はする」

「分かりました」

そう言って無線を切った

「よし、俺とホープ、咲夜は武器庫に言って武器を探す。紫、レミリア、グリムはここで待機してくれ」

「分かったわ。気お付けてね。孟」

紫が言った

「ああ、それじゃ行ってくる」

そう言って俺達は武器庫に向かった

〈武器庫〉

「よし、咲夜は右の部屋をホープは左の部屋を頼む」

「分かったわ」

「了解した」

そう言っつてそれぞれの部屋に入った

「さて、武器庫には何があるかな？」

そう言っつて俺は真ん中の部屋に入った

「おお、こいつはM G 4 2、いいもん持ってるな」

暫く探索して見たが俺の部屋には対戦車ランチャーは置いてないみたいだ。代わりにあるのは軽・重機関銃、アサルトライフル、などの物ばかりであった

「孟！これはそうなんじゃない？」

どうやら咲夜が見つけてくれたみたいだ

「どれどれ？おお！パンツァファーストにジャベリンじゃないか。それにR P Gもあるぜ」

どうやら咲夜の部屋にロケット弾などが置かれていたみたいだ

「よし、運び出すぞ。咲夜はこの箱を持って行ってくれ。ホープ、お前はジャベリンを頼む」

「分かったわ」

「了解」

そして、分担して重兵器を入口まで持って行った

く再び入り口へ

「ふう、これでよし」と

ガタン！

「孟、それは？」

紫が聞いて来た

「ああ、これで何とかなるかもしれない」

そう言ってランチャーに弾を装填した

「よし、ホープ、お前はジャベリンを使え、グリム、お前はRPGを頼む」

「了解」

そう言ってそれぞれのランチャーに装填した

おれはパンツァーファーストを持った

「よし、紫、ここで待っていてくれ。ちやちやっと済ませてくるから」

「ええ、」

そう言って表に出た

「基地の中央付近のバンカー」

俺達は近くにあったバンカーまで移動した

「よし、敵さんの数は？」

「えっと、結構いますよ。多分、十両位あるんじゃないでしょうか」

グリムが暗視装置で見ながら言った

「マジか。これはちょっときついかもな」

ホープが愚痴るように言った

「愚痴るな。それより行動だ。三段方式で行く。分かるな」

二人は頷く

三段方式とは戦国時代、織田信長が火縄銃を手に入れた時に開発した方式である。一人目が撃つた後、二人目が撃ち、その間に一人目は弾を装填する。これにより大幅な時間を短縮できるようになっている。これにより当時、最強であった武田騎馬隊が壊滅された

「よし、行くぞー！」

バシユウウウウウウウー！！！！！！

俺の撃った弾はそのまま直線状に向かった

ドカーン！！

そして、弾は戦車に当たり爆発を起こした。

「次！」

ピピピ

バシユウウウウウウ

ドカーン！！

ホープの撃った弾も見事戦車に当たった

だが、敵も負けてはいなかった

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

戦車砲で俺達がいるバンカーめがけて撃ってきた。だが、どれもバンカー自身には当たらなかった

そうした攻防がしばらく続いた

「隊長！これじゃあいつまで持つか分かりませんよ！？」

ブシユウウウウ

「分かってるさ。少しでも隙ができればいいんだがな」

と思っていた時だった。思わぬ援軍が来てくれた

ビカ　ーッ！！！！！！

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

「な、なんだ！？」

いきなり光ったかと思えば敵戦車が急に爆発を起こし始めた

俺達はバンカーの外に出た

「おいおい、どうなってんだ？」

ホープが言った

「わからん……ん？あれは……」

よく見てみると燃えている戦車の奥から誰かが歩いて来た

「じぎげんよう。孟」

「幽香！どうしてここに？」

現れたのは幽香であった。

「ええ、ちよつとした逆恨みよ。あいつら人の畑を横断して行ったんだから当然の報いよ」

「ああ……」

なるほど、幽香の畑に入り込んだのか。納得した

「だけど、武器は持っていないよな？どうやって攻撃したんだ？」

最もな質問をした。

「ああ、これで壊したのよ」

そう言って出してきたのは日傘だった

「日傘で壊したってのか？」

「と言っても日傘自体じゃないわ。そうね。あっあの向こうにある
乗り物を見ていてちょうだい」

そう言って指さしたのはまだ、生き残りかと思われる敵戦車であった

「行くわよ。元祖マスターパーク！」

ピカッ！ドーン！！

「」「」なっ！？」「」

俺達は目を瞠った。日傘から一直線の光が出ていたんだからな。

光は見事戦車に当たり爆発した

「どひっ？」

幽香が言った

「どうも何もすごいの一言しかないさ。それはともかくとしておかげで助かった。ありがとう幽香」

「気にしないで、あいつらに畑を潰されたのが許せなかったただけだから」

「そうか。」

そう言った時だった

ヒュンヒュンヒュン

バートレット大尉の航空隊が丁度、着いたみたいだ

「いやゝすまん、孟、遅れてしまった」

「いいですよ。丁度、終わりましたから、直ちに負傷兵の運搬を行って下さい。それと捕虜になっていた人もいますので」

「了解した。おい！お前ら、出番だ」

そう言って航空隊の人達はすぐに動いた

こうして、俺達の基地急襲は無事、成功に終わったのであった

ちよつと寄り道

俺達は無事、敵基地急襲を成功させ、八雲邸に戻った後、紫主催の宴でどんちゃん騒ぎをした。フランは少し衰弱はしていた物の命に別条はないとの事（まあ、吸血鬼なんだしそう言う所は大丈夫じゃね？）だ。しかし、少しの間安静にしておいた方がいいと言っていた。by 永琳

宴にはレミリア、咲夜が代表で来ていた

く八雲邸、縁側く

「ふう」

俺は縁側で一人座って飲んでいた。宴会場では郷田さんが歌を歌い始めていた

「隣、いいかしら？孟」

やって来たのはレミリアだった

「ああ、どうぞ」

そう言った後、レミリアは俺の隣に座った

「どうだ？フランの様子は」

「ええ、永琳が言うには大丈夫みたい。孟、今回は本当にありがとうあの子に変わって礼を言うわ」

そう言って頭を下げた

「気にすんな。俺は困ってる奴がいるとどうしても助けたい性質でな。」

「フッフッそう」

そう言ってレミリアも酒を飲んだ

「でも、なんでフランをさらったりしたのかしら？」

レミリアは疑問そうに言った

「これは、俺の推測だがあの子は今まで館の中しか見た事なかったんだろう？だとしたら奴らは言葉巧みに言ってフランを外に連れ出したんだと俺は思うぜ」

フランがずっと中にいると言う事は咲夜から聞いていたため勝手ながら憶測を言った

「だとしたら、許せないわね。私自身があの子を閉じ込めていたとはいえ大切な家族には変わりないのだから」

そう言って持っている盃を握り締めた

「それと、あいつらは簡単には終わらないと思う。もっと後ろ盾がいるはずだ。あれだけの装備、いくら幻想郷とはいえ揃わないだろう。それに情報よりも兵がいなかった感じだ」

「そう。だとしたらそれは厄介になるわね。私も情報を集めて見ようかしら」

「ああ、そっちからもできればお願いしたい。情報があつてこそ作戦は成り立つからな。さて、話はここまでだ。今夜は飲もうぜ」

そう言つて酒を出した

「ええ、そうね。」

カコンッ

そうして夜は更けて行った

～翌日～

「うう太陽が黄色だ」

俺は朝の光を浴びながら言った

レミリア、咲夜は昨日の内に帰つたみたいだった。

「おはよう。盃」

「ああ、おはよう。藍」

「すごい寝癖だな」

「ん？ああ」

俺は髪を触って言った

「待ってる。」

そう言って懐から櫛を取り出して俺の髪を整えてくれた

「……よし」

「おお、ありがとう、藍」

「何、それほどでもないさ。それより」

「なんだ？」

「今日はどうするんだ？」

「ああ、今日は幽香の所へ行ってくる」

「どうしてまた？」

藍が聞いて来た

「花畑が無茶苦茶にされたらしいからな。だとしたら、あのきれいな花畑が台無しだ。だから、花を植えてこようと思ってな。昨日の借りもあるし」

「そうか。私は人里に用があるから。もしかしたら途中、行くかも
しれないな」

「ああ、分かった。それじゃあ、さっそく行ってくるよ」

そう言つて宿舎の方に向かった

〈宿舎〉

コンコン

「ん？誰かね」

「俺です。孟です」

「孟君か。どうぞ」

ギギ

「どうしたんだい？こんな朝早く」

「実は頼みごとがありまして、昨日の騒動のせいで近くの花畑が無茶苦茶にされたみたいなんですよ。なので、今日は花を植えてこようかと思つて」

「なるほど、分かつた。私が何人が集めてこよう。他は車両の整備・修理に向かわせよう」

「ありがとうございます。では、後ほど」

そう言つて部屋を出た

〈数分後〉

俺はハンヴィーと75式トラックを門の前に止めて待っていた

「孟君、人数が揃ったよ」

郷田さんが連れて来たのはパイパー軍曹とバートレット大尉、グリム、ホープ、プリスキンなど昨日の戦闘で負傷しなかった者たちだった

「聞いたぜ。孟、社会貢献するんだってな。俺達も是非手伝わしてくれ」

パイパー軍曹が言った

「ええ、ありがとうございます。それじゃあ出発！」

そう言って二台の車両に乗り込む俺達であった

ブオオオオオ

〜太陽の焔〜

「到着」

ガタンバタン！

「うわ〜こいつは酷いな〜」

俺は焔の惨状を見て言った。焔はキャタピラの後で花が踏みつぶされて

「ん？おーい、幽香！」

俺は幽香を遠くで見たので呼びかけた

「あら、孟、どうしたの？そんな大人数で」

「いや、昨日のお礼も兼ねてなんだが花を植えに来た。結果的には幽香にも迷惑を掛けちゃったしな」

「あら、そんなの良いのにもありがとう。それで、花は？」

「ああ、その車に積んである。では、郷田さん」

「うむ。全員、作業始め！」

郷田さんの号令の元、それぞれが分担して花を持ってきた

「一応、この畑に見合う花を持って来たんだが、どうだ？幽香」

俺が聞いた

「どれも、きれいな花ね。これなら前よりもいい花畑になりそうね」

幽香は笑顔で言った

「よし、それじゃあ始めよう」

そう言って俺達は作業を開始した

ザックザック

ポンポン

「それにしても結構やられたみたいだな」

俺は花畑を見ながら言った

「ええ、私が寝ていた時にここを通ったみたい。あいつらは本当に許せないわ」

拳を握りながら幽香は言った

「本当にすまないな。」

俺は謝った

「孟が気にする事じゃないわ。」

「だが、結果的には幽香に迷惑を掛けちゃった。」

「いいのよ。あなたはこうして花を植えに来ているのだからそれだけで私は十分満足してるわ」

幽香は笑顔で言った

「なら、いんだが」

「それより、あの連中はまだ、いるのかしら?」

「ああ、あの基地を襲撃した時、敵はそんな人数がいなかった。と

言う事は他にも基地があるのかもしれない。そこはまだ調査中だ」

「そう。もし、見つけたら私に教えてね。今回程度じゃあ済まさないんだから」

顔は笑っていたが目は笑っていなかった

「あ、ああ。分かった」

(この人、絶対地獄の惨状とか作る気だぜきつと)

そんなこんなで俺達はどんどん作業を進めるのであった

またまた寄り道

俺達は幽香の畑に無事、花を植えて戻って来た所八雲邸に咲夜がいた

く八雲邸く

「よっ藍」

「あっ孟」

藍は買い物袋を持っていた

「一つ、持つよ」

「すまない。助かる」

「いいさ。どこまで運べばいい？」

俺が聞いた

「ああ、台所まで頼む、それと孟」

「なんだ？」

「咲夜がお前に用があるそうさ。荷物を運んだら客間に行ってくれ」

「了解した」

そう言って台所に荷物を運んでさっそく咲夜がいる客間に向かった

〈客間〉

「よう。咲夜」

客間に入ると咲夜はソファーに座っていた

「孟、ごきげんよう」

咲夜は立って挨拶した

「まあ、座ってで、どうした？」

「ええ、実はレミリアお嬢様があなたとグリム、ホープを館に招待したいそうよ」

「そうなのか。なんかイベントでもあるのか？」

俺は聞いた

「ええ、夜のパーティーに招待したいそうよ。」

「そうか。分かった行くよ。何時くらいに向かえばいい？」

「だいたい八時ぐらいに来て頂戴。」

「了解した。」

「じゃあ、用件はそれだけだから、失礼するわね」

「あつと、まった咲夜」

「何かしら？」

「ほら、前に銃が欲しいって言ってたる？丁度いいからお前にやるよ。付いて来てくれ」

そう言つて俺達は武器庫に向かった

武器庫

武器庫は前のトラックではなく正式的に武器庫が出来た。見た目は小屋に見えるが中は広々としている

「すごい、いっぱいあるわね」

咲夜は見渡しながら言った

「ああ、より取り見取りさ。で？どんな武器が欲しいんだ？」

「そうね。軽く振り回せて尚且つ両手で撃てるのが欲しいわね」

「なるほど・・・だとすると、これかね」

そう言つて取り出したのはベレッタM92Fだ。この銃はアメリカ軍がコルトガバメントの代わりとして採用してきた銃で幾多の戦場を駆け抜けている

「この銃なら変な操作もいらなからな。シンプル且つ信頼の高い銃だ。始めはこれを持っていればいいさ。咲夜ぐらいたと扱いやす

「いはずだ」

そう言っつて手渡した

「んっ確かに操作は簡単そうね。これ、弾はどうするの？」

やっぱりその質問が来たか

「ああ、弾はなこのマガジンと言う物に収まっている。だから、いちいち面倒な操作はいらないぜ。」

そう言っつてマガジンを渡した

「で、これをここに入れるんだ」

「ん、簡単に入るわね。すごいわね現代の銃っつて」

「何、撃てればそんなに変わらないさ。おまけだ、もう一丁同じのをやるよ」

そう言っつてもう一丁銃をやった

「ありがとう。」

「それじゃあ、簡単な操作説明をするな。まずはさっきのマガジンを入れて上のスライドを動かすんだ」

そう言っつて実演した

「そして、セイフティーを外して、後は撃てばいい」

「二二二を・・・二二二して・・・二二二ね」

そう言っつて咲夜もできたのである

「飲み込みが早いな。暫くはそれを使えばいいさ。慣れてきたらまた、持ってきた新しいのと交換してやるぜ」

「ありがとう。そうさせてもらっわ」

「後、弾な練習用も含めて渡しとくわ」

そう言っつて袋を咲夜に渡した

「ありがとう。じゃあ、私はこれで」

そう言っつて咲夜は八雲邸を後にした

俺はグリムとホープに今日の夜の事を連絡しそのまま夜を待った

〜夜、八雲邸〜

ブロロロロ

「じゃあ、行くとするか。」

「了解だ」

運転はホープに任せてある

「じゃあ、紫、藍行ってくるわ」

「ええ、気お付けていってらっしゃい」

「気お付けてな。存分に楽しんで来い」

そう言つて八雲邸を後にする俺達だった

〈道中〉

「そう言えば、隊長」

「なんだ？グリム」

「なんで、自分達だけなんでしょうね？」

「呼ばれたのがって事か？」

「はい」

「そうだな。いちばん関わり合いがあつたって事じゃないか？あの基地急襲で」

「なるほど、確かにそうですね」

グリムは納得したように言った

そんな話をしながら俺達は紅魔館に向かった

〈紅魔館前〉

俺達は無事、紅魔館に着いた。門にはいつも通り美鈴が立っていた

「よう、美鈴ちゃんと仕事してるか？」

俺は車の窓から手を出していった

「失礼ですね。それじゃあ、私がいつも寝ているみたいじゃないですか」

美鈴は怒っているつもりなんだろうが俺にとっちゃあ可愛い女の子でしかない

「悪い悪い、それより、俺達レミリアにパーティに呼ばれたんだけど」

「はい、承知しています。どうぞ、中に入って下さい」

そう言って美鈴は門を開けた

「後で、なんか夜食でも持って来てやるうか？」

俺が言った

「ええ、できればお願いします。では、」

そう言ってまた、美鈴は門の前に立った

「さて、俺達も向かうか。グリム、ホープ」

「ああ」

「了解です」

そう言っつて紅魔館の中に入っていく俺達だった

〈紅魔館内〉

「ようこそ、お待ちしていました」

中に入ると咲夜が待っていた

「よっ来たぜ。案内、よろしくな」

「はい、ではこちらへ」

俺達は咲夜の案内でパーティ会場に向かった

〈会場〉

「では、どうぞ。お楽しみください。私はレミリアお嬢様を呼んできます」

そう言っつて立ち去っていた

ギギ

「あつ！グリムお兄ちゃんだ！」

そう言っつてグリムの所にフランが来た。なぜか、グリムはフランの

お気に入りになっているらしくいつつも遊び相手に呼ばれるそうだ

「やあ、フランちゃん元気かい？」

「うん！フラン、お兄ちゃんに会うのとっても楽しみにしてたんだよ。」

「ははは、それは嬉しいね。」

そう言っつてフランはグリムを連れて行った

「あつホープさんだ。おーい」

今度は小悪魔のこあがやって来た。こつちの方は分からないのだが、こあはホープを気にいつてるらしい理由は不明だ。ホープに聞いてみると何かあったらしい

「よう、こあ。元気にしてたか？」

「はい、ホープさんは元気そうですね」

「そりゃあ、毎日、トレーニングしてるからな、こあはちゃんと俺が教えたメニューはやってるのか？」

「はい、あのメニュー楽しくやってますよ。紅魔館内でも人気があります」

「そうかそうか。そりゃあ嬉しいな」

そう言っつてホープもこあに連れられて行った

「おいおい、人気があるなああの二人は……」

なんでだろう？急に悲しくなってきた……

「あら、いらっしやい、孟」

「おう。パチュリーか」

俺の所に来たのは紅魔館にある大図書館を管理しているパチュリー
ノーレッジだ。彼女も魔里沙と同じ魔法使いである

「ど、どうしたの？」

「いや……何でもない。気にするな」

「そ、そう。ならいいけど、今日はどうしたの？」

「ああ、レミリアにこのパーティに呼ばれてな。」

「そう。なら、私と一緒に中を見る？」

「そうだな」

そう言っただけ俺達はパーティの中に入って行った

「そういえば、パチュリー」

「何かしら？」

「図書館の本は全部魔法書とかなのか？」

「いいえ、図書館には他にもあるわ。それこそ、私達には分からない物もあるし、と言っても私は魔法書ぐらいしか読まないから」

「そうか。今度、読みに行ってもいいか？」

「ええ、歓迎するわ。是非、読みに来て頂戴」

「そうさせてもらおうよ。そこに座ろう」

そう言って特設のソファに座った

「何か、飲み物持ってこようか？」

俺が言った

「ええ、お願いするわ。」

「じゃあ、その妖精さん。ウイスキーを二つ」

近くにいた妖精に頼んだ

「かしこまりました。すぐにお持ちしますね」

そう言って妖精は飛んで行った

「孟、向こうの世界の話をしてくれない？」

パチュリーから要望が出た

「おう、何から話す?」

「そうね。じゃあ、あなたの国について」

「了解した」

そう言って俺はパチュリーに話した

〈少年説明中〉

「………と言っ訳なんだ」

「へ〜いろいろ発達しているのね〜」

パチュリーは俺の話聞いて驚いたように言う

「そうかもしれないな。こっちじゃああまり発達してないからな」

「そうね。」

「だが、発達するのは良いんだがいろいろ問題も起きていてな。それが対処できないとやっぱり駄目だと俺は思っぜ」

「へ〜いろいろ考えているのね」

パチエは納得するように言った

「そりゃあな」

そう言ってるよ

「いざっしゃい、孟」

レミリアが来た

「おう、レミリアか。楽しんでもらってるぜ」

「ふふ、そう。フランも元気になってあなたの連れを連れまわしてるわ」

「そうか。まあ、あいつは子供が好きだとか言ってたから大丈夫だろう」

そう言った後、レミリアはパチエとは反対側に座った

「おお、これぞ両手に花だな」

俺が言った

「ふふ、感謝なさい。私の隣に座れるなんて早々ないわよ？」

と言いながらも嬉しそうに言うレミリアだった

「うるさいわよ！ナレーション！」

「誰に言ってるんだ？」

俺が言った

「な、何でもないわ」

「そうか。それより、レミリア」

「な、なにかしら？」

「なんで、俺達を呼んだんだ？」

「ああ、それはお礼も兼ねてよ」

「お礼？」

「ええ、フランを助け出してくれたのは本当に感謝しているわ。だからこそ、このパーティに呼んだのよ」

「そうか。それはありがたいな」

「それに、あの連中に対抗できるのはあなた達の集団しかないからな。」

「だろうな。前に紫から聞いたんだがこっちじゃあ弾幕勝負で決着を付けるんだってな」

「そうよ。これは私達の中のルールなの」

「だが、外の世界じゃあ弾幕勝負なんてものはない。生きるか死ぬかのどちらかではない。」

「そう。私は今回の件ではつきりしたわ。あいつらは幻想郷にとって危ない存在であることがね。私達、紅魔館勢も全面的に協力させ

てもらおうわ」

「そうか。それは助かる」

「で、どうすればいい？」

「そうだな。情報の方を頼む、レミリアならいろんな方に情報が持つてくれるだろう？」

「ええ、そうね」

「だから、定期的でもいい情報が入ったら俺達に教えて欲しい」

「分かったわ。実戦の方はどうなの？」

「いや、そっちは俺達専門だ。多分、訳が違うからな。そこは任せて欲しい」

「そう。でも、必要になったら呼んで頂戴、その時は全面的にバックアップするから」

「分かった」

「さて、この話は終わり。孟、パーティを楽しむわよ」

「ああ」

そうやって俺達はパーティを楽しんで行った

新たな介入者（前書き）

今回はB-2さんの作品のキャラが介入します。ん？インターホンが鳴った。誰だろう？・・・

新たな介入者

俺はレミアアのパーティに呼ばれてそのまま紅魔館で一晩過ごす事となった。

「うゝ太陽が黄色いぜ」

俺は外に出て太陽を見た瞬間そう言った

「それにしても、いい天気だなゝ平和その物って感じだ」

そう言っつて背伸びした。背骨からボキッボキッと骨が鳴った

「ん？あいつは……」

そう言っつて東の空を見た。

ブオオオオオ

そこにいたのはAC130のガンシップだった。

「あいつは、ガンシップだなゝでも、なんでこんな所を飛んでんだ？今まで飛行機は見つからなかったしな」

そう言っつて見ていると……

ヒュン

「あつ誰かが飛び出た」

後方のハッチから誰かが飛び出たのが分かった。それは、まっすぐ俺の所に向かって来ていた。だが、俺はそのまま見続けていた

「おいおい、そろそろパラシュート開いてもいいだろう。あんなに下がったら危険じゃないか？」

「誰か！助けてくださいーい！」

「えっ？ちよちよつと！？」

それはまっすぐ俺の所に来て……………

ドッシーン！！

思いつきり俺にぶつかった

「いててて……………なんだってんだ？」

ポムッ

「おろ？」

この柔らかい感触は何でしょうか？俺はさっきまで何も持ってなかったから落ちてきた人の物か？

「きゃー」

「きゃっ？」

「きゃああああ、変態　　！！！！」

ドゲシッ！！！！

「アベシッ！！？」

俺が触っていたのはその人の胸だった。そして、思いっきり回し蹴りを喰らった。

そうして、目の前がブラックアウト・・・しなかった・・・なんとか起き上がって見るとそこにいたのは・・・

「弱音・・・ハク・・・？」

その姿は紛れもなく弱音ハクの姿であった。しかし、格好は郷田さんと同じ陸上自衛隊の迷彩服であった

「ハアハア、え？・・・この姿を知ってるんですか？」

女性は息を切らせながら言った

「ああ、俺の世界じゃあ割と有名だったからな・・・それと、さっきはすまなかった。事故とはいえ胸を触ってしまった」

そう言って俺は謝った

「いや、いいですよ。非は私の方にありますし・・・あっ申し遅れました。私は左近・・・左近雪穂です。」

「ああ、俺は、戦場孟だ。よろしく」

そう言って互いに握手した

「えっと、雪穂ちゃんは どうしてこんなところに？」

「私は、さっきのガンシップである所に向かっていたのですが、突然、光ったかと思っただらこの場所に出て来ていてガンシップもいきなりエンジンが停止して先に私が脱出したんです。それで、さっきの事になりました」

と、淡々と語ってくれた

「そうか。となると、別の世界から来たって事か。郷田さんとかと同じって事になるな……」

俺は独り言のように言った

「あの……ここは、どこなんでしょうか？」

雪穂が聞いて来た

「ああ、ここは……」

そうやって俺は幻想郷の事を教えた。ついでに今までの戦闘の事や事件なども教えた

「そうなんですか。そんな事が……」

「頼む、少しの間でもいい手を貸してくれないか？」

そう言って頭を下げた

「あ、頭を上げて下さい。私もぜひとも手伝わせて下さい。微弱ながらも戦闘はできますから」

雪穂は慌てるように言った

「そうか。ありがとう」

そう言った後、皆が館から出てきた。そして、今までの状況を説明した

「私はレミリアよ。よろしくね。雪穂」

「こちらこそ、よろしくお願いします。レミリアさん」

そう言って握手をした。

レミリアは状況を説明したら快く歓迎してくれた

「雪穂はこれからどうするんだ？」

「うーん、そうですね。まずは寢床を探さないといけませんね。」

「なら、俺の所はどうだ？一応、俺も身を寄せてる所なんだが、皆優しくていい所だぞ。」

「本当ですか？ありがとうございます」

そう言って頭を下げた

「いって事よ。お互い様じゃないか。仲間になったんだしな。」

そう言って俺は笑った

「ふふっそうですね」

彼女も笑った

「よし、レミリア、俺達は八雲邸に戻るよ」

レミリアに言った

「ええ、紫とかによろしく言ってね」

「おう。ホープ、グリム行くぞ」

「了解しました」

「りよ〜かい」

グリムはちゃんと返事をしたがホープはまだ、酒が抜けきってないようだ。そのままハンヴィーに乗り紅魔館を後にする俺達であった

〜林道〜

ブオオオオ

「そついえば、孟さん」

「ん？なんだ？」

「孟さんの仲間ってどんな人たちなんですか？」

雪穂が聞いて来た

「ああ、俺達の仲間はな、一部を覗いてゲームやWW？の時代の間を紫に頼んで呼び寄せたチームなんだ。実際、グリムとホープだってゲームの中の人間だぜ」

俺はチームの事を説明した

「へ〜そうなんですか〜」

雪穂は納得したように言った

そつして、そのまま八雲邸に直行する俺達であった

〜八雲邸〜

八雲邸に着くと門で紫と藍が待っていた

「おかえりなさい。孟」

「お帰り、孟」

「ああ、ただいま。紫、ちょっと紹介したい子がいるんだけど」

そう言って雪穂を前に出させた

「あ、あの、左近雪穂と言います。よろしく願います」

そう言って頭を下げた

「あら、ずいぶんかわいい子ね。どうしたの？」

「ああ、実は……」

そう言って紫と藍に説明した

「なるほど、彼女も迷い込んだのね」

紫は唸るように言った

「ああ、だから、しばらくここに置いてはくれないか？」

「分かったわ。それなら、空いてる部屋を貸してあげるわ。藍、案内してあげて」

「分かりました。さっ雪穂さんこちらへ」

そう言って藍と雪穂は八雲邸に向かった

「悪いな。紫」

「いいのよ。人数が多ければ多いほど越したことはないわ」

「そうか。それで、変わった事はあったか？」

「いいえ、相変わらずってとこね。あれ以来、奴らの情報が入って来ないわ」

落胆して言う紫

「仕方ないさ。あれだけの損害だ。暫くは動けんさ。でも、情報は逐一調べてくれないか？」

「分かったわ。そうだ。さっき郷田さんから連絡があつてまた、車両を見つけたみたいよ。しかも三両も」

「ほゝそうか。それはありがたい事だな。」

「私達も中に入りましょうか。」

「そうだな。」

そう言つて俺達も中に入り平和な日を過ごすのであった

新たな介入者（後書き）

B-2さん雪穂さんはこんな感じで良かったでしょうか？

もし、要望とかあれば連絡を下さい。では、失礼します。

今日はお使いかな？

俺達の所に新たな仲間が出来て一日が立った。彼女を紹介した時は兵士たちは乱舞していたな。まるで学校に転校生が来た時のようにはしゃいでいた。……一部分はおかしい所もあったけど……

しかも、その日の夜は紫主催で雪穂ちゃんの歓迎会が開かれ、夜通しでどんちゃん騒ぎが行われていた。途中から郷田さんやパイパー軍曹が暴走したが……。俺が制裁を加えて大人しくさせた

そして、次の日になり俺は藍やちえんと一緒に後片付けを行っていた

～宴会場～

「あゝあ、こんなに散らかしちゃってまあ」

俺は愚痴るように言った

「孟、そう愚痴るな」

藍が言った

「だって、この状況、俺が来た時より酷い事になってんぜ？」

「まあ、そうだな。しかし、協力すればあっという間に終わるさ」

そう言って藍は片づけ始めた

「りょーかい。俺はこっちの方から片づけるよ」

そう言っつて俺も片づけを始めた

一時間後……

「よし、これで終了っつと」

ガタン

最後の食器を片づけて宴会場を元通りにさせた

「お疲れ様、孟、お茶だ」

藍がお茶を差し出した

「おう。サンキュー」

そう言っつてお茶を飲んだ

ズズ

「ふう〜一仕事後のお茶は格別だね〜」

「あはは、孟さんお爺さんみたいですよ?」

ちえんが言っつた

「失礼だな。これでも二十歳のお兄さんだよ？」

「でも、行動と言動が一致してないぞ。孟」

そう言っつて縁側に腰を下ろした藍。その後ちえんが隣に座った

「そうかね？でも、こういう労働をしたときはやっぱり違うぞ」

そう言っつてお茶を飲んだ

「確かにな。私もこういう時はほっとする」

藍もそう言っつてお茶を飲んだ

しばらく静寂が支配した。他に音がするのは静かな風の音と虫の声だった

「平和だね」

「ああ、そうだな。」

「よし、久々に銃の整備でもするか。」

「私も家事の続きをするか」

そう言っつて俺達は一旦分かれた

武器庫

俺は藍達と分かれた後、武器庫で銃の整備を行っていた。因みに今整備しているのはM4である

「あちゃ〜油が古くなってるな〜新しいのと交換しとくか〜」

そう言っつて銃に油を指した

「ふんふん」

俺は鼻歌を歌いながら銃を整備していた。お茶でのんびりするのもいいがやっぱこの時が一番落ち着くな

その時

「盪」

「うわっと!?!?」

いきなりスキマから紫が現れた

「?どうしたの?」

「ビックリさせるなよ。紫、思わず落としそうになったじゃないか」

「あら、ごめんなさい。でも、何度も呼んだのよ?」

そう言っつてスキマから出てくる紫

「そうか。そりゃあ悪かった。で、何か用か?」

「ああ、孟にお使いを頼みたいのよ」

「お使い？」

「ええ」

「藍とかちえんは？」

「あの二人は今、私の代わりに結界の方に周っていてくれてるから手が離せないのよ」

「そうか。分かった。で、何をして来ればいいんだ？」

「この手紙を冥界に居る幽々子に渡して来て欲しいのよ」

そう言って手紙を渡してきた

「分かった。この手紙を幽々子に渡してくればいいんだな？」

「ええ、お願いするわ」

「それで、冥界ってどこにあるんだ？」

俺は聞いた

「ここから結構、近いからすぐに分かると思うわ。」

「分かった。じゃあ、すぐに行ってくるとするか」

「ええ、お願いね」

そう言って紫はスキマに戻って行った

「さて、俺も向かうとするか」

そう言って武器庫を後にした

く八雲邸前の道く

「今回は歩きかゝでもまあ、健康のためにたまにはいいかな？」

俺は八雲邸を出て歩きで冥界を目指していた。紫の話では八雲邸の近くに冥界に続く階段があるらしい

「えゝと次の林を抜けたらあるんだな」

そう言って手元の地図を見ながら言った

「おっあつたあつた」

そう言うってお目当ての階段を見つけたのだが……………

「何？この長さ……………」

俺は階段の長さを見て言った。だって、そんじよそこらの階段より長いのは明白だ頂上が見えないもん

「これは、何かの試練ですか？この長さ、あの博麗神社よりあるだろ……………まあ、愚痴つてもしょうがない行くとするか……………」

そう言いながら俺は階段を昇り始めた

（数分後）

「はあはあ、これ……お使ってレベルじゃないぞ。軽く富士登山は超えるだろ……」

俺は息を切らせながら言った。最初は順調に昇っていたが、途中から疲れ始めた。訓練で富士登山はやった事があるけどあれよりレベルが上だろ。まるで装備を付けたままエベレストに向かうような感覚に陥ってしまう

「こいつは……今日中に帰れるかどうか分からんな……」

そう言いながらも昇っていく俺だった

更に数時間後……

「あれは……頂上か！」

上を見上げると頂上には立派な門がそびえたっていた

「パトラッシュ、もうすぐ天国に行くよ……」
そんな事を言ってる場合じゃなかった。さっさと済ませてくるか

そう言ってまた、昇っていく俺だった

く白玉楼く

「すみませ〜ん。どなたかいらっしやいますか〜?」

俺はやつと頂上に着いて誰かいないかと呼びかけた

「はい? あっあなたは……………」

現れたのは銀髪の髪をしていて身の丈に合わない刀を持っている少女だった。

「あっ妖夢ちゃん?」

「はい、あなたは孟さんですよね?」

「ああ、」

「ここを昇り切ったんですか?」

「そつだ。ふい〜疲れた〜」

そつ言つて門の近くに腰かけた

「よく、昇り切れましたね。普通、人間なら到底無理でしょうに」

「これでも、体は鍛えてんだ。簡単にあきらめてなるものか……………」

「・

「お疲れ様です。今、お水をお持ちしますね」

そう言っ中に入っ行っ

「はあ、本当に疲れたく普通の人間なら無理っ俺はもう人間じゃないのか？」

人外確定しちやっったパターンか？これ

「お待たせしました。どうぞ」

そう言っ水を持ってきた妖夢

「悪い。ンクツンツク・・・プハー！」

俺は一気に水を飲み干した

「それで、どんな御用で来られたのですか？」

妖夢が聞いて来た

「ああ、そうだった。幽々子さんいる？」

「幽々子様ですか？はい、いらっしやいますよ」

「紫から手紙を預かっったんだ。それを渡しに来た」

「そうですか。では、ご案内しますね。付いて来て下さい」

そう言っ俺は中に入っ行っ

（白玉楼内部）

内部は日本家屋の旅館版と同じ構造みたいだな

そう思いながら付いて行くと・・・

「幽々子様、お客さんですよ」

妖夢が言った

「お客さん？だ〜れ〜？」

「孟さんですよ。ほら、紫様の所の」

「ああ！彼が来てるの？ちょっと待ってね〜」

そう言う中からガタンガタンと物音が聞こえた

スッ

「お待ちどうぞさま〜いらっしやい、孟さん」

襖が開いて中から幽々子が出てきた

「こんにちわ、幽々子さん」

「今日はどんな御用？」

幽々子が聞いて来た

「ああ、実は紫から手紙を預かっててなそれを渡しに来た」

そう言って手紙を出した

「珍しい事もあるわね、何かしら？」

そう言っつて幽々子は手紙の内容を呼んだ

「うーん、なるほどなるほど」

「何がなるほどなんですか？」

妖夢が言った

「孟さん、今、下界じゃあ大変なことになってるみたいね」

「ええ、まあ、外の世界の奴らがこの幻想郷を支配しようとしてるみたいなんです。それで、紫達と協力して調査している所なんです。」

「そう。手紙はあなたは読んだ？」

「いえ、あの階段を昇るのが精一杯で読む暇がありませんでした」

苦笑いしながら言った

「そう。手紙の内容はね、私達にも協力して欲しいって書かれていたわ。おもに情報面で」

「でも、幽々子さんとかは何か使えるんですか？」

「私は霊を扱えるのだから、下つ端の幽霊とかは自由に動かせて尚且つ下界の住民には気づかれたいわ」

「そうですか。協力してくれるってんなら拒む理由はないですね。よろしくお願いしますよ」

そう言って手を出した

「私もここは、好きだから、変な奴らに盗られるより十分マシって思っただけよ」

そう言っつて幽々子も手を出し互いに握手した

「せっかくだからお茶でも飲んで行きなさいな。妖夢、用意して」

「はい、幽々子様」

そう言っつて妖夢は台所に向かった

「じゃあ、ここら辺で待ちましようか」

そう言っつて桜の見える縁側に座った

「きれいな桜ですね」

「ええ、私が一番に言えるほどの桜よ。存分に見て行って」

「あ、そうそう。幽々子さん」

「何かしら？」

「この近くで見た事のない物を見た事はありますか？」

「うん、あっアレかしらね。裏庭に止めてある奴、使い方が分からないからずっと、そのままでもしかしたら孟さんの世界の物かもしれないわね」

そう言っとうんうんと頷く

「じゃあ、後で見せて貰ってもいいですか？」

「ええ、いいわよ。もし良かったらそのまま持って帰ってくれませんか？家にあってもしょうがないから」

「分かりました。」

と話している時

「幽々子様、孟様へお茶が入りましたよ」

お盆を持ちながらやってくる妖夢

「さっこの話は後にしましょ？今はお花見でもしながらお茶を飲みましょ」

「ええ、そうですね」

そう言っってお花見をする俺達であった

新しい兵器

俺は紫のお使い（そう言う名目の登山？）を受けて冥界の西行寺幽々子の元にやってきた。そして、やっとの思いで頂上の白玉楼に辿りついた。着いた時、妖夢がいて俺の事を人外扱いした。正直、心にグサツと来る言葉だった。

そして、幽々子に紫からの手紙を渡すとなんと、幽々子から協力を受ける事となった。幽々子には主に情報面でやってもらえると云ってくれた。そして、そのまま俺は白玉楼で花見をすることになった

（白玉楼）

「いや〜花見っていいね〜」

俺は妖夢からもらったお茶を飲みながら言った

「そうでしょう？ここならいつでも花見ができるから今度、あなたのお仲間にも呼び掛けたらどう？その時は歓迎するわよ〜」

幽々子が言った

「マジか。じゃあ、決まったら紫を通じて連絡するよ。その時はよろしくな」

「ええ、待ってるわ〜」

そう言いながら俺達はのほほんとしていた。いつ以来だろうこんなにも花見をしながらお茶をすすめるのって思えば、こっちに來てから

こういう行事はできなかったな。

「孟さん？」

妖夢が俺を不安そうに見ながら言った

「あついや、大丈夫、ちょっと昔の事を思い出してたんだ」

そう言いながらお茶を飲んだ

「昔って言うと外の世界にいた時のですか？」

「ああ、あつちじゃあお花見は盛んに行われててなよく、仲間たちと花見に行つては騒いだもんだ……懐かしいな」

俺は桜を見ながら言った

「なら、やったらいいじゃない」

幽々子が言った

「え？」

「さつきも言ったでしょ？ここならいつでも花見はできる。だから、こっちにいるお仲間と一緒に花見でもしなさいな」

幽々子は扇子を仰ぎながら言った

「……ああ、そうだな。確かに幽々子の言うとおりだ。この戦争を終わらしたらやるとしますか……盛大な花見でも……」

そう言って再び桜を見る俺だった

「あゝそうそう。あなたに見せたい物があったんだっただわゝ付いて来て」

そう言って幽々子は立ちあがって歩く

俺もついて行った。きっと裏庭に置いてある物だろう

ゝ裏庭ゝ

「ここよ」

「おいおい……こんな物まで幻想郷に入ってるのか……」

そこにあっただのはMH-53　パイブロウとF/A-18スーパーホーネット艦上戦闘機が駐機してあった

「こいつはどこで見つけたんだ？」

俺が聞いた

「この前、家にいたらものすごい音がして見に行ったらここにこれがあったわゝ」

幽々子と言った

「なるほどなゝ」

でも、見た所状態は良好に近いむしろ、駐機してあったのがそのままここに来たって感じたな……

「で、孟さん、これは何なのですか？」

妖夢が言った

「ああ、こつちのでかい乗り物がヘリコプターって言うてもうこつちの方は戦闘機って言うてどちらも空を飛べる代物なんだ」

「へへ」

二人はそう言うのとパイプロウやホーネットを見た

「こんな大きい物が飛ぶなんてね」

「まあ、こつちの世界じゃあ見ない物だしな。こつちの住人は空を飛べたりするんだろ？」

「はい、霊夢さんや魔里沙さんとかそうです。もちろん、私や幽々子様も飛べますよ」

妖夢が言った

「へへすごいな。俺達にとっちやあそつちの方が十分だとおもうぜ」

「？それは、なんで？」

「この二つだってそうだが、どちらも燃料が必要なんだ。それがないただの鉄クズだからな」

ガンガン

そう言ってパイブロウを叩いた

「へ〜いろいろ大変みたいね。妖夢」

「そうですね。幽々子様」

「そうだ。お礼も兼ねてこっちのへりに乗って見たくはないか？」

「いいんですか？」

妖夢が言った

「ああ、外の世界の乗り物なんざ早々に乗れないからな。こっちの世界じゃあ」

「どうしますか？幽々子様」

妖夢が言った

「いいんじゃない？たまにはこっちの経験は滅多にないんだから」

そう言ってへりに近づく幽々子

「決まりだな。じゃあ、乗ってくれ」

そう言って俺達はパイブロウの方に乗った

（機内）

機内に入ると手前の方に席が四つ配置されており残りには降りた溜められていた。そして、後ろの方にはなぜか、弾薬箱がたくさん積んであった。

こいつはどっかに輸送するために積んであったのか？それは、置いて二人を案内した

「へ〜中はこうなってるのね〜」

幽々子が言った

「さ、二人ともその席に座っててくれ。今から動かすから」

俺が言った。俺はコックピットの方に行き各種計器類を確かめた

「えーと、燃料は・・・十分だな。操縦系統も異常なし、本当に飛び立つ前にこっちに来たって感じだな。」

そう言っていると・・・

「孟さん、こんなのがありましたよ」

妖夢が何かを持ってきた

「どれどれ？・・・なんで、こいつの設計図があるんだ？」

妖夢が持ってきたのはパイプロウの設計図であった。他にも今まで見つかったてきた車両の設計図がたくさん置いてあった

「それは、なんなの？」

幽々子が聞いて来た

「こいつは設計図と言って、このへりの元になる物なんだ。こいつがあるおかげで同じ型の奴が量産できるんだ」

「へへ」

「まあ、こいつはにとりの所を持って行けばいいかな。とにかく出發しますか」

そう言つて各種のスイッチを押した

ウイイイイ………

ヒュンヒュンヒュン………

バラバラバラバラ

パイプロウはゆっくりと動き出してメインローターが速くなつていった

そして………

フワッ

「「キャッ!?!」」

二人は浮いた事によって驚いたようだ

バラバラバラ

「よし、浮いたな。このまま上昇するぞ」

そう言っつて操縦かんを引いた

数分後……

バラバラバラ

「よし、二人とも窓から外を見てくれ」

二人に言った

「どれどれ……わあ〜!!す〜い!!」

「ほんとに……飛んでる」

二人は驚いたりして外を覗いた

「あつ妖夢、白玉楼があそこにあるわよ」

「本当ですね。白玉楼ってあんな形してるんだ。」

「二人は空を飛べるんじゃないか?」

俺が言った

「ええ、そんなんですけど。こんなにも高く飛んだ事はなかったの
で白玉楼を上から見た事がなかったんです」

妖夢が言う

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、暫くは空の散歩でも楽しんでくれ」
そう言っただけ俺達は散歩を楽しんだ

(藍とかにもこういう景色を見せて見たいな……)

俺は心の中で思った

↓所変わってある場所↓

キュピーン

「ハッ!!」

藍は気づいたように顔を上げた

「どうしたの？藍」

紫が言った

「いえ、なんとなく孟が私を呼んでいたような……」

「あらあら、孟も人気が出てるわね」

今日も八雲家は平和であった

く戻って白玉楼く

「今日はありがとう。孟」

幽々子が言った

「いや、いいんだ。俺はお礼も兼ねてした事なんだから」

「でも、本当に楽しかったです。また、乗せて下さいね」

妖夢が言った

「ああ、ぜひともさせてもらうよ。それじゃ」

そう言って俺は階段をおり始めた

パイプロウとホーネットは白玉楼に置いたままである。後で紫に頼んでスキマから輸送してもらおう予定だ。

パイプロウはまだしもホーネットの方は滑走路が無いと飛べないしな。仕方あるまい

「はあ、降りるときもまた、一苦労するな」

そう言いながら俺は階段を下りて行った

幻想飛行場（前書き）

孟「なんだ？このタイトルは」

思いつきでやって見た

「おいおい、しっかりしてくれよ……」

とにかく始めるよ

幻想飛行場

俺は紫のお使いから戻って、紫に幽々子の返事を言った。その後、白玉楼に置いてあるペイプロウとホーネットをスキマを使って八雲邸に置いてくれた。

「これで、いいかしら？」

紫が言った

「ああ、悪いな。」

俺が言った

「いいのよ。気にしないで、じゃあ私は霊夢の所に行ってくるわ」

「なんだ、用事か？」

「ええ、ある意味、用事ね」

ニヤリと笑って紫はスキマに入って行った

「まあ、あんまりひどい事はするなよ。それよりも、こいつらはどうするか……」

そう言ってた時だった

「昏」

「ん？あつバートレット大慰」

後ろを振り返るとバートレットが立っていた

「こいつはどうしたんだ？」

「ああ、この二機は白玉楼ってところに駐機していたみたいですよ。でも、戦闘機の方がどうしようか迷っています」

「とうとう？」

「ほら、こつちの世界はそんなに技術が発達していないじゃないですか、だから、飛行場もないですし、滑走路さえないですからね」

そう言つてホーネットを見た

「だったら、作つちまえばいいじゃないか」

バートレットが言った

「でも、こつちにある乗り物つて言つたら全部、戦闘車両ですよ？それこそ、滑走路ができるような重機はもってないし」

「いや、実はなついさつき、郷田から連絡が入つて戦闘工兵車とかパワーショベルとかが見つかったみたいだ。今、こつちに向かつて来ている」

「おいおい、なんて、ご都合主義だよ」

俺が言った

「ん？なんか言ったか？」

「いや……とにかく、揃えられる物が揃っているということですね。後は、場所だけでも……そっちは俺の方で任せてくれませんか？」

「ああ、分かった。それと、グリムの事なんだが、あいつはこっちに戻してもらってもいいか？」

「ええ、もちろんですよ。グリムにはそっちから伝えてくれませんか？」

「分かった。じゃあ、決まったら教えてくれ。手伝うから」

「分かりました。」

そう言って一旦、別れた

く八雲邸内く

「らん、らん」

俺は八雲邸の中で藍を探していた

「うん、どこいったんだろ。今日は藍は仕事はないって紫が言ってたけど、いないな。買い物にでも行っちゃったのかな？」

そう言いながら歩いているといつの間にか藍の部屋の前にいた

「まあ、いなかっただらしょうがないな。後日、改めよう」

トントン

「藍？いるかー？開けるぞ〜」

スツ

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・

一瞬、時間が止まっていた。藍は確かに部屋にいた。だが、着替えの途中だったのであろう。近くにはいつもの青い服が置いてあった。肝心の藍は何もきていなかった・・・・・・・・・・つまりは裸である。

「キャツ!?!」

「す、すまん!?!」

ピシャ!?!

俺は襦を思いつきり閉めた。

「おいおい、こいつってデジャブか？前にも同じ事があったような・・・・・・・・・・」

俺は独り言を言った。そうしている内に藍の部屋の襦が開いた

スッ

「孟……」

「藍！さっきはすまなかった！ちゃんと声はかけたんだが、返事になかったからいないのかと思ってな、本当にすまん」

そう言つて頭を下げた

「そうか。それならいい、返事をしなかった私も悪い。それで……その……／／／／」

「な、なんだ？」

藍の顔を見ると若干、赤くなっていた

「その……どうだった？／／／」

「は？」

「だから……私の体を見て、どう思った？／／／」

「え！？い……いや……その……とても……きれいだったよ／／／／」

俺は恥ずかしそうに言った

「！そ、そうか。それは良かった……所で、何か用事があったのか？」

一瞬嬉しそうに言ったが、その後、いつもの顔に戻った

「あっそうだった。藍、この近くで結構広めな土地はないか？人間や妖怪が使っていないような土地は」

俺は言った

「広いと土地か・・・そうだな・・・この家を出て数里行った所に人間や妖怪が使っていない土地があるが、どうするんだ？」

「ああ、実は・・・」

俺は飛行機の事や飛行場の事を藍に説明した。

「・・・と言う訳なんだ」

「ふむふむ。つまりはその飛行機？だったか。それを飛ばすために広い土地が必要になった訳か」

「そう言う事」

「分かった。この事は私から紫様に伝えておこう。孟はさっそく作ったらどうだ？」

「悪い、そうしてくれると助かる。それじゃ」

そう言って藍と分かれた

〈藍side〉

ああ、ビックリした。正直、孟が部屋に来た時は驚いた。男に裸を見られたのは初めてだったからな。でも……見られたのが孟で良かった。

あの後、自分の体の事を聞いたら赤くなりながら……きれいだったと言ってくれたからな。嬉しかった

私は必死だった。なるべく顔に出さないようにしながら孟の要件を聞いた。

そっちの要件にもビックリしたな。広い土地が必要になったと聞いたから何に使うのか？と聞いたら飛行場とかいう物を作るらしい。

それは飛行機と言う乗り物の専用の場所なのだとか。とりあえず、場所を教えてこの事は私から紫様に伝えることにした

それにしても嬉しかったな。今日は孟の好きな晩御飯にしようかな？

そう思いながら私は台所に向かった

〔藍side out〕

「バートレット大慰、いますか？」

「おう、孟、こっちだ」

そう言って呼ばれた方向に向かうとさっそくホーネットの整備をしていた

「もう、手を付けてるんですね」

「まあな、銃以外で扱える物って言ったらかれぐらいしかないしな俺は」

「そうですね。それと、さっきの要件ですが見つかりましたよ。滑走路にできる場所が」

「お！本当か？」

「ええ、ここを出て少し行った所です。せつかくですからイロコイの方でその場所まで行きましょう」

「よっしゃ、了解した」

そう言ってホーネットから降りた

「じゃあ、孟はヘリポートで待っていてくれ。すぐに取ってくるからよ」

「分かりました」

そう言って俺はヘリポートに向かった

（簡易ヘリポート）

ここは、ヘリポートの代わりに使用している場所である。探していた時、丁度いい高台と広い土地があったため飛行場ができるまでの間、使用してる

バラバラ

すぐにバートレットの乗ったヘリがやってきた。近づくにつれ機体のペイントが視認できる。ヘリの前にはサメの顔が描かれていて、横には犬のマークが付いていた

「待たせたな。乗ってくれ」

ヘリが着陸すると同時に大尉が窓を開けて言った。俺は助手席に乗った。そして、飛行場が作れそうな土地に向かって飛んで行った

（機内）

「そういえば、大尉」

「なんだ？」

「郷田さん達には言ったんですか？」

「ああ、さつき無線で言っておいたさ。場所はまだ言っていない」

「そうですか。じゃあ、俺から言っておきますよ」

そう言っつて無線機を取った

「アーアー、郷田さん聞こえますか？」

「こちらは郷田、孟君かどうしたんだ？」

「さつき、バートレット大尉から、飛行場の件は聞きましたよね？」

「ああ、私達は今日、戦闘工兵車などの車両を発見したからな。」

「じゃあ、飛行場の予定場所を言いますね。今はどこらへんか分かりますか？」

「ああ、人里を抜けたばかりだ」

「なら、近いですね。そこから東の地点に無人の広い土地があります。そこに向かってくれませんか？」

「了解だ。それじゃあまた」

そう言つて無線を切つた

「じゃあ、バートレット大尉、お願いしますよ」

「了解だ」

そう言つて俺達は向かつた

（飛行場予定地点）

バラバラバラ

「うゝむ、結構広いな」

藍から教えて貰つた場所に到着したのだが、思った以上に広がつた。

「孟、結構広そうだな」

「ええ、飛行場以外にも何か別の奴ができそうですね」

「そうだな。とりあえず、着陸するぞ」

そう言っつて着陸した

ヒュイイイン……

ガチャ、バタン

「ひろ〜」

地上に降りて見ると広さが実感できる離れた所に森が見えた

「いや〜広いな〜」

大尉が言った

「ええ、そうですね。これなら大規模な飛行場ができますね」

「ああ、そうだな。」

そう話していると……

パン！カーン

「ん？」「ん？」

なんだ？今の音は……俺達の聞き覚えのある音……と言つ事は……

「できるだけ、速めをお願いしますよ。こっちは二人しかいませんから」

そう言って無線を切った

「大慰、少しの辛抱です。郷田さん達が急ぎで向かって来てくれますから」

「了解した」

そう言って俺達は奴らに向かって撃ち始めた

攻防戦

俺とバートレット大尉は飛行場を作るべくその予定地点に来た。しかし、着いた時奴らの奇襲を受けてしまう。俺はすぐさま郷田さんに連絡し来て貰うように要請した。

「飛行場予定地点」

ダダダダダ!!!

カン!カン!カン!

「クソ!これじゃあギリ貧だな」

バートレットが言う

「確かにそうですけど、諦めないでください。もうすぐ郷田さん達が来てくれますから」

俺が言った

とは言った物の相手は不特定多数、こっちはたったの二人である。それに武器はへりに付いていたM4が二丁M9が二丁とかなり不利な状況である。

今回はかなり油断した。だが、それを言っても始まらない今は郷田さん達が来るまでの間ここを防衛しなければならぬ

ダダダダ!!!

敵は俺達から見えない森の中から攻撃して来ている。スナイパー
イフルがあれば話は別なのだが無い物嘆いてもしょうがない

ダン！ダン！ダン！

「孟！M4の弾はないか！？」

「待って下さい……………」

そう言つてマガジンをバートレットの方に投げた

「サンキュー！」

ガチャ！ダダン！ダダン！ダダン！

バートレットはすぐさま装填し三点バーストで撃っている

ダン！ダン！ダン！ダン！

俺はM9で撃っていた。飛距離は少ないが牽制ぐらいにはなるだろう

「クソ……………」

俺は愚痴るように言つたつとその時であった

「ガツ孟君！聞こえるか！」

「はい！聞こえます。どうしました？郷田さん」

無線から郷田さんが聞こえてきた

「もう、間もなく到着するぞ！待っている。君たちから見て東側から出る！」

「了解です！敵は郷田さん達から見て三時方向の場所の森に隠れています！着いたらじゃんじゃん撃つて下さい！」

「了解した！それと、八雲邸に居る雪穂君にも無線で連絡した。今、ヒューイの改造型でこちらに向かって来ているぞ」

そう言つて無線を切つた

「大慰、もう間もなく援軍が来ますよ！」

「よっしゃ、もうひと踏ん張りだな」

そう言つて撃ち続ける俺達であつた

暫くして……

キュラキュラキュラ……

バキツバキツバキツ！！！！

俺達から見て東側の森から郷田さん達と思われる車両部隊が出てきた。一番前にはエイプラムズを改造した戦闘工兵車であつた

ドカーーン！！

エイプラムズの砲が火を吹き一直線に進んで行き森に直撃した

「遅れてすまないね。孟君」

郷田さんが無線で言ってきた

「いいえ、丁度良かったですよ。ありがとうございます」

バラバラバラ……

上空を見るとヒューイの改造型が三機編成でやってきた

「ガッ 孟、今来たよ」

無線からは雪穂ちゃんの声が聞こえた。でも、おかしくね？

「ああ、ありがたい、それとなんか口調変わってね？」

俺が言った

「戦闘になると癖で変わるの。だから、気にしないで」

「分かった。よし、へり部隊は敵の掃討に向かってくれ。敵は君たちから見て真正面の森に潜んでいる。ありったけの弾をくれてやれ」

「了解」

そう言うとへりは森に機銃掃射を行う

ドルルルルルル！！！！！！！！！

ブシュ！ブシュ！ブシュ！

ガトリング砲とロケット弾が敵を襲う

キュラキュラキュラ

バカン！

エイプラムズから郷田さん達が降りてきた

「援軍、ありがとうございます」

そう言って敬礼した

「いや、間に合ってよかった。」

そう言って郷田さんも敬礼する

「二人はどこも怪我はしていないかね？」

「はい、へりを盾にしていたんで何とか免れましたね」

「でも、へりがな・・・」

そう言ってバートレットはへりを見る

銃で撃たれていた方の機体は穴だらけになっていた。ペイントも無残な形になっている

「いつは……しばらく出せないな。後でにとりの所に持って行く」

「そうだな……」

そう言ってへりを見つめる俺達

ヒュンヒュンヒュン……

雪穂ちゃん達も着陸したようだ

「孟さん。敵の掃討、終わりました」

そう言って近づくと、いつの間にか口調はいつもどおりであった

「ああ、ご苦労さん。」

「それにしても広い土地ですね」

「ああ、ここなら大規模な飛行場が作れる」

「飛行場を作るのかね？孟君」

郷田さんが言った

「ええ、実は自分がこの前行った白玉楼つとここでホーネットを見つけてましてね。そこで、この幻想郷じゃあ飛行場なんて物はない。だったら作ってしまおうって事になったんですよ」

「なるほど、それで戦闘工兵車が必要になったと言う訳か」

「その通りです。」

「しかし、飛行場はすぐにできる物でもないぞ。資材だってないしな」

ホープが言った

「確かにそうだけど、まあ、探せば見つかるかもしれないしな。後にはとりの所からもらってくればいいさ」

バートレットが言う

「そうだな。よし、今回はここに泊まろう。いつ奴らが引き返して来てもおかしくないからな。見張りは交代でする」

「「「「「了解!!」「」「」「」」」」」

俺が言うのと皆その場で敬礼した。その後は戦闘工兵車両などをカモフラージュするため特別なネットを用意した

こうして、飛行場予定地点を防衛する事が出来たのであった

孟、ナイフ投げをやって見る

俺達は飛行場予定地を敵から防衛した後、取られないようにそこで野宿をした。見張りは三時間交代でやった

そして、襲撃を受けることなく無事に翌日を迎えた。そして、郷田さんや自衛隊員、雪穂ちゃんにその場を任せて一旦八雲邸に戻った。そこで、パイパー少佐などに相談して複数の兵士を飛行場建設に回してもらった。

俺は現場監督をバートレットに任せ、紅魔館へと向かっていた。目的はレミリアから情報を聞くためだ

く山道く

ブオオオオ

俺はハンヴィーで移動していた。

「さて、レミリアは何か情報を掴んでるかね」

俺は誰もいない車内で言った

運転して十分ほどで紅魔館に到着した。門にはいつも通り美鈴が立って寝ていた

「グウくグウく」

「気持ち良さそうな寝息たてやがって……ほら、美鈴起きろ
朝だぞ」

俺は耳元で言った

「ひゃい!？」

美鈴は体をビクンと震わせて起きた

「おっ起きたか」

「つ……孟さん、酷いですよ、耳元で囁くなんて」

美鈴はほっぺを膨らませながら言った

「悪い悪い、だが、寝ていたらお前が咲夜とかに酷い目に遭うんだぞ?」

俺が言った

「うぐ……それを言われると反論できないじゃないですか」

「まあ、とにかく寝ないようにするんだな」

「所で何かご用だったんですか?」

美鈴が聞いて来た

「ああ、レミリアはいるか?」

「お譲様ですか？今なら多分、紅茶を飲んでる時間だと思いますよ。」

「そうか。ちょっと邪魔してもいいか？情報が入ったかどうか聞きたいんだ」

「そうですか。分かりました。入口付近に咲夜さんがいると思いますからそちらで言って下さい」

「分かった。」

そう言っただけで俺は中に入った

（紅魔館入り口）

「よう、咲夜」

俺は入り口にいた咲夜に挨拶した

「あら、いらっしやい孟、今日はどうしたの？」

「ああ、レミリアに用があつてな。」

「お譲様に？」

「ああ、前に言った情報が入ったかどうか聞きたくなつてな。今の時間帯は大丈夫か？」

「ええ、お譲様は二階のベランダで紅茶を飲んでるから案内するわ。付いて来て」

そう言って階段を上がる咲夜。俺もその後が続いた

くベランダ

「お譲様、孟が来ました」

「孟が？いいわ。入って来て頂戴」

「失礼します」

そう言って咲夜と俺はベランダに入った

「孟、今日はどうしたの？」

レミリアが聞いて来た

「ああ、前に言ってたろ。情報を集めるってだからそれを聞きに来たんだよ」

「ああなるほどね」

「で、どうだ？情報は入ったのか？」

俺が聞いた

「その前に座ったら？いつまでも立ってられないでしょ？」

そう言ってレミリアの前の席を指さした

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言って俺は席に座った

「はい、紅茶」

「悪い」

そう言って一杯飲んだ

「おお、うまいなこの紅茶」

「でしょ？咲夜がこの前手に入れたらしいのよ。って情報だったわね。なかなか面白い物が入ったわよ」

「ほう？どんな？」

「ある妖怪から聞いたんだけどね。あなたが奇襲した基地とは反対側にもう一つ大きな基地があるみたいなの」

「それは間違いないのか？」

「ええ、信用できるルートで辿ったの。ガセではないわ」

そう言ってレミリアは紅茶を飲んだ

「なるほどなく大きさ的にはどんな感じだ？」

俺が聞いた

「そうね……だいたい前のよりは大きいらしいわ」

(ふむ……だとしたら大規模な基地になるな……)

「それともう一つ、その基地には私達が見た事のない物が置かれてるらしいわ」

「見た事のない物？それはなんだ？」

「さすがにそれは分からなかったみたい。でも確かなのは大規模な基地が存在するって事よ」

「確かにな……場所は割れているのか？」

「細かい事は分からないけど、この紅魔館より東の山の所にあるみたい」

「また、山の付近か。そうになると結構、移動が遅くなるな」

俺が言った

「それってあなた達の世界の乗り物の事？」

レミリアが聞いて来た

「ああ、俺らの乗る乗り物は大体の物が遅い物ばかりなんだ。前の基地は近かったから良かったものの東の森となると結構な距離があるからな。時間がかかっちゃう」

「そう。でも、あなた達も新しい建物を建ててるんでしょ？」

「どうして知ってるんだ？」

「さっきグリムから聞いたのよ。あの子、たまにフランの遊び相手になってくれているでしょ？その時に聞いたのよ」

「なるほど、それでか。その通りだ俺達は航空基地を建設中だ」

「航空基地？」

レミリアは首を傾げた

「簡単に言つと空の乗り物を飛ばすための専用の基地なんだ」

「ふ〜ん」

「情報はその位か？」

「ええ、今は言ってる情報はこのくらいね。また、何かあつたら咲夜を迎えに出すわ」

「そうか。分かった。それじゃあ俺も行くとするかな。建設中の基地を見なきゃあいけないし」

「そう。またいらっしやい」

「ああ、それじゃあ。紅茶、ごちそうさん」

そう言つてレミリアと分かれる

「さて・・・基地はどのくらいで完成するかね。できれば早い方がいいが」

そんな事を言っていると

「ハッ!!」

カコーン!

「ん?なんだ?」

俺は音のする方に向かった

〈裏庭〉

音は裏庭から聞こえた。そこにいたのは・・・

「はっ!」

ヒュン!

カコーン!

咲夜がナイフの投げる練習をしていた

「音の正体はこれか。それにしても投げるのうまいな」

俺は影から投げナイフの様子を見た

「あら？盃、そこにいるの？」

咲夜がきが付いたようだ

「悪い覗き見る気はなかったんだが、音がしたから気になってきただけだ」

「いいのよ。気にしてないわ」

「そうか。それにしても投げるのうまいな。」

俺が言った

「そう？そう言われると照れるわね／＼」

「謙遜するなってうまいのは確かなんだから、どれ、俺も挑戦してみようかな」

そう言つて木に刺さつてるナイフを抜いた

「それ！」

ヒュン！

スカツ・・・

「おろ？おかしいな、もう一回」

ヒュン！

スカツ・・・

「あれ？」

そう言っただけかナイフを投げたか全く木に刺さらなかった

「はあ〜」

俺は体育座りをしながらのの字を書いていた

「だ・・・誰にでも得意不得意はあるわよ。だから、元気出して、
ね？」

咲夜が慰めた

「グスン、そうだな。でも、なんで当たらないんだろう」

「そうね・・・投げ方は特に問題なかったわ。後は・・・力加減
ね」

「力？」

「ええ、孟は投げるとき思いっきり力を入れて投げてるように見えるわ。だから、もうちょっと力を抑えた方がいいと思うわ」

「そうか。よし、投げて見よう」

そう言っただけナイフを持った

「そりゃー!!--」

ヒュン！

カシッ！

ナイフは見事木の峰に刺さった

「おお！咲夜！刺さったぞ！」

俺ははしやぎながら言った

「ええ、良かったわね。もう一回投げて見る？」

そう言ってナイフを出した

「ああ、そうだな」

そう言って投げナイフを練習する俺であった

大図書館

俺は咲夜から、ナイフ投げを習った後、お礼に射撃訓練に付き合うことにした

（裏庭）

「で、孟、最初は何をするの？」

咲夜が聞いた

「まずは、基本だ。銃の構え方を教える。と言っても一緒にやった方が効率はいいだろう。俺と同じ事をやってくれ」

俺が説明した

「分かったわ」

「じゃあ、まずは銃を両手で押さえてくれ。それから足は肩幅ぐらゐに開いてくれ」

そうやって俺は基本の構えをやった

「えーと、こつという感じかしら？」

そうやって咲夜は銃を構えた

「そうそう。そんな感じ、この構えは両手で押えることによって銃の反動を抑える事ができる。ついでに言うと命中率も上がるからこ

れを基本にして構え方を応用すればいい」

「分かったわ」

「後は・・・そうだな。咲夜、ちょっと失礼するよ」

そう言っつて咲夜に近づいた

「孟？ひゃあ!？」

咲夜は突然、孟に触られて驚いた

「もっとこう、右腕を伸ばしてそうすると反動を抑えられるから」

「そ・・・そう／＼／」

咲夜は内心、それどころでは無かった。異性に触られてビククリしないはずがない

「よし、いい感じだ。って大丈夫か？咲夜」

咲夜の顔は茹でダコ状態になっていた

「だ、大丈夫よ。続けて・・・」

「そうか？じゃあ、実践だあの的に向かって一発撃ってみる」

「分かったわ」

次の瞬間、茹でダコだった顔が真面目顔になった咲夜

そして、一発撃った。乾いた音がその場を支配した。

「beautiful」

俺は的を見て言った。弾は見事、ど真ん中に命中しており文句の言いようがないほどだった

「すごいな。いくら撃ったことがあるとはいえ、こんなにも綺麗にできたのは初めて見た」

「そうかしら？でも、この銃も中々使いやすいわね。」

咲夜は銃を見て言った

「まあ、昔のよりは幾分か性能は上がってるからな。よし、じゃあ、*toohand*に挑戦してみようか？」

「え、もう？」

「ああ、一発でできたんだ。一二丁の場合ならどうなるかな？っと思っただけ」

「分かったわ。挑戦してみる」

「よし、じゃあお手本を見せよう」

そうやって俺は愛銃のイーグルを取り出した

「それは、孟の？」

咲夜が聞いてきた

「ああ、こいつには幾度となく助けられたからな。まさに相棒だ」

そう言っただけで構えた。的を増やして、今度は5つにしてある

「行くぜ……」

そう言っただけに向け弾を発射した。乾いた音が連続で響いた。そして、弾は吸い込まれるように的に命中していった

「ふう、終わりだ」

そう言っただけイーグルをホルスターにしまう

「す……す……す……」

咲夜は呆然としていた

「そうか？」

「ええ、まるで踊ってるみたい見えただわ」

「そう言われるとなんか、照れるな」

「私、ナイフ以外だとこれに自信があったけどまだまだみたいね」

そう言っただけ自分の銃を見る

「そんなことはないさ。咲夜だって十分にうまいぜ。俺が保障する」
そう言っつて咲夜の肩に手を置いた

「孟……ありがとう」

「さあ、咲夜やってみよう」

「えええ！」

そう言っつて俺は射撃訓練に付き合っつのであつた

〈紅魔館内〉

「さて、今度は大図書館に行っつてみようかな？」

俺は咲夜と別れた後、紅魔館の地下室にある図書館に向かつて歩いていた。途中、妖精メイドに会つたりして立ち話を繰り返したりしていた。

〈大図書館〉

「ここが、大図書館か〜広いな〜」

俺は大きな扉を開けて思つた事を言つた

「さ〜て、パチエはどこにいるかね？」

そう言っつて図書館内に入る

「こらー！！待ちなさい！魔理沙！」

「いやだぜ〜！この本は借りてくぜ〜！」

広い図書館を歩いていると反対側からパチエが誰かを追いかけながら走ってきた

「あれは……魔理沙だっけ？」

白黒の服装に魔女帽子が特徴的な女の子の魔理沙が箒に乗りながら飛んできた

そして、俺の前を通り過ぎて行った

「はあ、はあ、」

パチエは俺の前までくると肩から息が上がってしまった

「パチエ、大変だな」

「え？孟！来てたの!？」

パチエは驚いたようだ

「ああ、今さっきな。所でなんで、魔理沙が来てたんだ？」

俺が聞いた

「ああ、あの子、いつもこの本を借りる（盗む）って言って勝手に持ち出しちゃうのよ。」

「ん？なんか、字が違つような」

「本当は後者が正解よ。それで、今日という今日は駄目って言ったのにいつも通り持つてかれちゃったって訳」

そう言つてパチエは大きく溜息を吐いた

（なんとというか。ご苦労だな〜パチエ）

俺は心の中でそう思った

「孟はどうしてここに？」

パチエが聞いてきた

「ああ、今日はレミリアに用があつて来たんだが、思ったより早く終わつてな。それで、図書館に来たつて訳だ」

「そう。歓迎するわ。ついでに言つと先客が来てるけどね」

「先客？」

「ええ、ホープがここに来てるわ」

「ホープがか？」

「ええ、こあに気に入られちゃつてね。暇な時はここに来てるみたいよ」

どつりで最近、グリムとホープを見かけないと思ったらそついう訳だったのか。まあ、そんなに厳しくは決めていないからな。別にいいか

「で、今日はどうするの？」

パチエが聞いてきた

「ああ、ここつて魔法の本以外の本が置いてあるつて言つてたよな？」

「ええ、と言つても私は分からないからそのままにしてあるわ。案内するわ付いて来て」

そう言つて先導していく俺はその後に続いていく

あれ？パチエつて確か、喘息じゃなかったけ？まあいいか（by作者）

「たくさんあるな、幾つぐらいあるんだ？」

俺が聞いた

「まあ、ざつと一千万冊つてとこね」

「一千万冊！？」

俺は驚いた。だつて、現代でもそんなに置かれてる図書館なんて数えるほどしかないしな

「着いたわ。ここよ」

そう言つて一角の本棚に到着した。近くに寄つてみると確かに魔法の本とは関係ない物ばかりであつた。中には天才、バカ〇ンと言つたマンガまで置いてあつた

「ふむ、いろいろあるな。おっここは軍事関係かどれどれ……」

そう言つて一冊の本を手を取つた。題名はこう書かれている

【必見！これを読めば君も超兵器を作れるぞ！！】

「……なんぞ？これ」

思わず言つてしまった。内容的には現代ではありえない作り方の兵器がたくさんあつた。それこそ、映画や漫画の世界にしかないような兵器まで記述されていた

「おいおい、こんなにありえないぜ。おっここは通常兵器か」

途中、息抜きのためか従来の兵器が載つていた。ハンヴィーや90戦車、イージス艦と言つた現代を代表する兵器が書かれていた。

その時

「ん？なんだこれ」

ページに紙が挟まれていたので抜き取つてみた。中を見ると……

【B - 52改 設計図】

「B - 52改つてアメリカ軍で試作中の爆撃機じゃないか!どうしてこんなところに?」

「孟?どぶしたの?」

パチエが心配そうに言ってきた

「あ、ああ、大丈夫だ。ちょっと驚いただけだ」

「そう。で、どうなの?役に立ちそう?」

パチエがいう

「ああ、大いに役に立つよ。ありがとうパチエ」

「むきゅ!?そ、そんなことないわ///」

パチエは顔を赤くした

「?どうかしたか?」

「な、何でもないわ。じゃあ、ゆっくりして行ってね」

そう言つてそそくさと戻つて行つた

「?なんだつたんだ?まあいいや」

そう言つて俺は本を読み続けた

大図書館2（前書き）

前回の続きからです。しかも短いかもしれません

大図書館2

俺は大図書館で軍事関係の本を読み漁っていた。近くではパチエが紅茶を飲みながら魔法の本を読んでいる

「孟、どう？何か進展はあったの？」

突然、顔を上げて言うパチエ

「ああ、結構な掘り出しもんがあったよ。今後の進展が期待できそうだ。」

俺は笑いながら言った

「そう、それは良かったわね。私も役に立てて嬉しいわ」

「ああ、本当にありがとう」

そう言ってまた、読書に深け込む俺達

俺は軍事関係の本を読み漁っていると聞いたが、実戦で役に立ちそうなのはそこまで多くはなかった。中には、ゲームに出てきそうな兵器の総集本なんてものがあったくらいだ。

超兵器？なにそれ、おいしいの？まあ、幻想郷なんだしこんな物が置いてあってもおかしくないと思う俺であった

そんな中、図書館の奥から話声が聞こえてきた。多分、ホープとこあである

「でな、俺の世界は結構発展してるんだ。一度、こあにも見せてやりたいぜ」

「私も見てみたいです！ホープさんの住んでた世界、きっと素敵なんでしょうね」

「おい、ホープ」

俺が呼びかけた

「おう、って孟じゃないか。どうしてこんな所に？」

ホープは質問した

「ああ、レミアリアに用があったんだが早く終わってな。今、軍事関係の本を読み漁ってる所だ。今後、奴らがどんな武装をしてくるかわからないしな。それに多くの部隊を持って越した事はないだろ？」

「まあ、そりゃあそうだ。どれ、俺も手伝おうか？」

ホープが言った

「いや、大丈夫だ。後、少しで終わるしな。お前は今日、帰ってくるのか？」

「いや、今日はここに泊まっていくよ。こあがどうしてもって言うからな。因みにグリムも泊まるそうだ」

「分かった。楽しんでこいや」

「ああ、そうさせてもらおう」

そう言つてホープはこあと一緒に奥へと向かつた

「大丈夫なの？」

パチエが言つた

「ああ、兵員は他にもいるしな。それに奴らだつてそれなりの損害は受けたはずだ。無理に動く事は出来んよ。」

俺は本を読みながら言つた。おつこれは使えそうだな。メモつとこ

「あつそうだ。」

パチエはそう言つと近くの引き出しを漁り始めた

「孟、これ」

そう言つて一枚の紙を渡してきた

「これは？」

「前に言つてた。訳の分からない物よ。あなたの世界の物だと思
うのだけど」

「ふーん」

そう言つて紙を広げた。中々に大きかつた

「こいつは……火器管制型迎撃用車か？」

そこに書かれていたのは設計図だった。だが、このタイプは俺の世界でも開発されていない新型の迎撃車両のようだ。しかも、指揮車としての役割も果たしているようだ

日本とかだと、高角砲戦車などが有名だけだな

「ん〜こいつは俺の世界の物じゃないかもしれないな」

「どういう事？」

「こいつは俺の世界じゃあ開発もされていない新型のようだ。その証拠にこの火器管制型は軍艦とかに使う代物だ」

「軍艦？」

パチエは首を傾げながら言った

「ああそうか。パチエ、こっちの世界に海と違ってあるか？」

俺が質問した

「いいえ、本では見た事あるけど、実際には見た事はないわ」

「そうか。軍艦ってのはその海って言う所だけの専用の船だ。大火力の砲台を装備している。この火器管制型はそれに使われる物みただ」

「ふうん、つまりは陸上では本来、使えない物って事になるわね」

「ああ、そうなんだが、これの設計者は改良を加えた上で完成にまで至ってる。」

実際、使えるかどうかは別としてだがな・・・と付け足していった

「まあ、とりあえず、持って帰って見るわ。にとりの所で相談してみる」

「そうね。それが一番妥当ね」

そう言っつて視線を本に落とす

俺もまた、漁りに集中した

〜一時間後〜

「うーん、今日はこれぐらいしておこうかな？日も傾いてきたみたいだし・・・」

地下室なのになぜか窓があった。窓はただの飾りではなかった。その証拠に窓から日の光が差し込んでいる。空はあかね色に染まっていた

「グウ〜グウ〜」

「ん？あらら」

パチエの方を見ると寝てしまっていた。読み疲れて寝てしまったの

であろう。読書をするのもいいが長時間はつらいしな

「おい、パチエ〜」

俺は体を揺さぶった

「う、うん」

体を揺さぶってもパチエは起きなかった

「あれま〜完全状態に入ってるな〜仕方ない。パチエ、ちょっと失礼するよ」

そう言つてパチエの体を持ち上げた。パチエの体は思ったよりも軽かった。伊達に軍に所属してるわけではないぞ！

お姫様抱つこで近くにあったソファーに寝かせた。ついでに近くにあった。毛布を掛けてやった

「すう〜すう〜」

パチエは気持ちよさそうに寝息を立てていた

「女の子はやっぱりこうでなくっちゃな。寝ている時は可愛い物だ」

そう言つて俺は使った本を元に戻すことにした。使った物は元に戻す、これ常識！

「え〜と、これが、ここで、こいつがここか」

そう言って順序良く本を整理していった。とその時

「んあ？なんだ、こりゃあ」

整理している時に落ちたであろう一枚の紙が落ちていた。拾い上げてみるとそれは………

「おいおい、こいつはまた違った設計図だな」

中身はまた、設計図であった。しかし、車両の設計図ではなく銃の設計図であった。

「こいつは……見た事がないな。どこの国の物だ？ジャンルのにはスナイパーライフルか対戦車ライフルだとは思うのだが………」

設計図に書かれた銃は見た事のない銃だった。外見はチェコのファルコンかソ連のPTRD1942に似ていた

「まあ、作ってみりゃあ分かるこつた。とりあえず、保留っと」

そう言って胸ポケットに仕舞い込んだ

「さて、帰るとするか。夕飯は何だろうな」

そう言って大図書館を後にする俺であった

孟、藍のお手伝いをする

紅魔館から戻った俺は、八雲家で夕食をとった。夕食はカレーであった。何でも、郷田さんが「金曜日は海軍カレーの日だ!」と言った事から始まったらしい。日付を見たら丁度、金曜を指していた紫も藍もカレーと言う物を食べた事がなかったらしいので俺が藍に作り方を教えた。

く八雲家、台所く

「孟、ニンジンはこのくらいの大きさでいいのか?」

エプロンを付けた藍が言った

「ああ、それを全部、鍋の中に入れちゃってくれ。」

俺も藍の隣で肉を均等に切っていた

(それにしても、藍のエプロン姿は普段と違って新鮮なものがあるな〜)

俺は藍のエプロン姿を見ながら心の中で思っていた

「ん?どうした、孟」

藍が俺の視線に気づいたようで呼びかけてきた

「い、いや、何でもない。ただ・・・」

「ただ？」

「エプロン姿が新鮮に感じたからさ。新妻ってこんな感じなのかな
〜？って思ってたさ」

「に、新妻！？」

藍は驚いて包丁を落とした

「わ、悪い、気を悪くしたなら謝る」

「べ、別に悪いとは言っていない。ただ、その嬉しかった・・・／
／」

顔を赤くしながら言ったが後半は孟には聞こえなかった

「え、なんだって？」

「い、いや！！何でもない！さ、さあ、早く支度をしないと。皆
が待ってる！！」

「あ、ああ」

そう言ってカレー作りに戻る俺達であった

〜数分後〜

「これで、後は煮込めばいいのか？」

藍が聞いた

「ああ、そうすれば完成だ。」

俺が言った。

鍋はコトコトと音を立てながら中の食材を煮込んでいった。その間、暇だったので俺は食器などを用意した。藍も人数分の箸などを用意したりしていた。

さらに、数分後

「よし、開けるぞ」

俺が言った

ガパツと言う音と共に中からスパイシーの利いた匂いが二人の鼻に入ってくる。俺は久々だなと思いつつながらおたまでかき混ぜた

「ほ、これがカレーと言う物が。おいしそうだな」

藍は初めて嗅ぐ香りにクンクンと可愛らしく嗅いでいた。尻尾も振っていた。

「ああ、初めは辛く感じるかもしれないが、慣れてくればどうってことはない。」

「そうか。じゃあ、盛ってしまおう」

「ああ」

そう言つてカレーを人数分に分けて皿に盛つた。途中、匂いに釣られてちえんがやって来たので運ぶ手伝いを頼んだ。ちえんは元気よく返事をして居間へと運んで行く

〈居間〉

「よし、これで全員分だな」

藍が言つた

「ああ、そうだな」

「じゃあ、紫様を呼んでくる。待っててくれ」

そう言つて藍は紫の所へと向かつた

「いや〜カレーは久々だな!」

郷田さんが言つた。

「ええ、金曜日は海軍カレーが一番ですよね!」

自衛隊員の若い兄ちゃんが言つた

「うむ!その通りだ!」

その言葉に郷田さんが返事をした

「おはよ〜」

襖が開くと奥から紫が出てきた。さっきまで寝ていたのだろう欠伸をしながら入って来た

「ん？今日は変わった料理が出てるわね」

紫がカレーの存在に気付いたのか、鼻をピクピクさせながら言った

「ああ、今日は外の世界の料理だ」

俺が言った

「これは・・・なんて言う食べ物なの？」

紫が聞いた

「ああ、これはカレーと言って外の世界じゃあ有名すぎるほどの料理だ。」

「へえ〜じゃあ、さっそく頂きましょうかね」

そう言って座った

「じゃあ、皆手を合わせて・・・頂きます!」

「頂きます!」

その声と共に皆が食べ始めた。カレーを初めて見た三人は恐る恐る口に運んで行き・・・

「「「おいし〜!」「」

文句一つない言葉が出た

「どうだ？紫、藍、ちえん」

俺が聞いた

「すごいおいしいです！孟さん！」

そう言いながらバクバク食べていくちえん

「こんなのは生まれて初めてだわ。ちょっと辛さが残るけど、嫌な辛さではないわね」

紫はそう言いながらもちえんと同じく食べていた

「孟、これはおいしいな！」

藍も笑顔で言った

「それは何よりだ。手伝った甲斐があったよ。」

そう言って俺も口にカレーを運んだ。うん！カレーは文句一つない
うまさだな

そうしながら夕食は過ぎていった

（台所）

「よし、藍、これでいいか？」

俺はそう言っただけきれいになった皿を藍に見せた

「ああ、」

俺は藍と一緒に後片付けをしていた。大人数で食べたため皿が異常なほど残った。さすがに藍一人では大変だろうと思っただけ俺が手伝う事にした

「しかし・・・藍はいつも早く起きて朝食を作っているんだろう？」

俺が言った

「ああ、最初は大変だったが今ではどうってことはないさ。むしろ、楽しいぐらいだ」

そう言っただけ皿を洗う藍

「そうか。もし、他の事でもいい何か手伝う事があったら遠慮なく言ってくれ。俺が出来る限りの事は手伝うから」

「本当か!？」

「あ、ああ、ただし、俺ができる事な?いくら、軍人とはいえ人間にできる事なんか数が知れてる。」

「そうだな・・・じゃあ、孟、今夜、ちょっと私に付き合ってくれないか？」

藍が言った

「ああ、いいけど、何するんだ？」

「いいから、いいから、今晚、縁側に居てくれ。孟の前の部屋でな」
そう言いながらウキウキになる藍

「あ、ああ分かった」

俺は何があるか分からないがとりあえず了承した

↳数分後、縁側↳

「さて、何を頼まれるのかね？」

俺は言われた通り縁側でタバコを吸いながら座っていた。フウ〜と
はくと白い煙が空に向かって昇っていきやがて消えた

「孟」

藍が来たようだ

「おう、藍、待ってたぜ。何をすればいいんだ？」

俺が聞いた

「いや、一緒にこれでもどうかな？って思って」

そう言つて袖から出したのは一升瓶だった。なるほど、夜酒に付き合へつて事か。いや、月が出ているから月見酒か？

「なるほどな。いいぜ」

そう言つと藍は隣に座つた

「そういえば、杯はどうするんだ？」

「ちよつと待つてくれ・・・えつと・・・あつた」

そう言つてまたもや袖から木の杯を取り出した。つて言つかどういふ仕組みなんだ？まるで、ど〇えモンじゃないか・・・まあ、いか

「ほら、盃」

そう言つて一升瓶を出す藍

「おつと悪いな」

トクトクと音を鳴らしながら杯は酒でいっぱいになった

「ほら、藍」

「すまないな」

そう言つて俺も藍の杯に酒を注いだ

「じゃあ」

「ああ」

「乾杯」

カコンという音が静かな夜に響く。それを合図に俺達は酒を飲んでいく

「あゝきつついな。この酒」

俺が言った

「そうか？私はそうでもないと思うがな。ほら、お稲荷さんだ私の手作りだぞ」

「おう、サンキュー」

そう言って口の中にお稲荷さんを入れた。油揚げと酢飯がマッチしていてうまい

「うまいぜ。藍」

「そうか。それは良かった」

そう言って笑顔になる藍、藍の顔が酒で艶やかになっていたため少し、緊張したのは別の話だ

「なあ、孟」

「なんだ？」

「孟は外の世界では何か目指していた物はあったのか？」

「そうだな・・・まあ、元々軍人に憧れで入ったつてもあるけど、人を守る仕事つてのは半端でできるもんじゃない。俺は一人の日本人として国を守りたいっていう目標があったな」

月を見ながら言った

「じゃあ、今は？」

「今？」

「ああ、そうだ。外の世界からやって来て守り物とかできたのか？」

「そりゃあ、もちろん。藍や紫、ちえんこの幻想郷すべてを守りたいと思ったさ。一番思うのは藍、君だ」

「私？」

「ああ、恩返しって言うのもあるが・・・何より守りたい存在ができたともいえるのかな？」

「孟・・・／＼／」

藍は顔を赤くした

「とは言っても俺なんか守れるのかな？時々、そう思う時がある」

そう言っただけ笑った

「そんな事はない！孟が・・・その・・・守ってくれるなら・・・
私は嬉しい／＼／」

藍は恥ずかしそうに言った

「藍・・・・・・・・」

「孟・・・・・・・・」

そう言っつて俺達はキスをした。俺にとって初めて、いわゆるフアーストキスっつて奴だ

暫くは時間が止まったように感じた。だが、それも悪くない

濃厚なキスをした後、口を離す

「さて・・・夜も更けてきたし、寝るとするか」

俺が言っつた

「あ、ああ。そうだな。な、なあ、孟」

「な、なんだ？」

俺達はぎこちない会話で喋っていた

「その・・・・・・・・今日は・・・・・・・・一緒に寝ないか？」

「分かった。さあ、おいで」

そう言つて俺は藍の手を引つ張つて部屋に入った。

その後は普通に寝ましたよ。はい、別にやましい事なぞしてないからな！期待していた諸君、残念だったな！ふはははは！！！あつちよつ誰だ！？石を投げる奴は！？

孟、藍のお手伝いをする（後書き）

はい、今回はシリアスを入れてみましたがいかがでしょうか？自分的にはあんまり書けていないかなー？と思っっちゃったりするこの頃です。

さて、孟と藍の関係が一気に縮まりました。果たして、この関係はどうなるのか？非常に楽しみです。では！次回も楽しみに待っていて下さい！

にとりの兵器工房

俺は、藍と月見酒をした後、そのまま眠ってしまい、朝を迎えた。そして、文から朝の新聞を受け取るついでにとりから兵器が完成したので見て欲しいとの連絡が入った

～妖怪の山～

「フワ～・・・眠い～」

「フフ、相変わらずだな孟」

俺は藍と一緒に妖怪の山に来ていた。なぜ、藍が一緒なのかと言うと一人で行こうとしたら藍が頑なに着いて行くと言いだしてしまった。結局連れて来てしまった

「わざわざ、ついて来なくても良かったのに」

俺が言った

「いいじゃないか。私の勝手だ」

そう言ってニコニコと笑う。この付近じゃあ文がいるからな～新聞にでも載せられたら大変なことになるぜ～

そう思っていた矢先・・・

「あやや～？これはいい記事が書けそうですね～」

木の上からパシャパシャとカメラのフラッシュをたきながらこちらを取る文がいた

「おいおい、思ってた矢先じゃないか……文、新聞に載せるのは勘弁してくれないか？」

「嫌ですよ！それじゃあ、どうしろって言うんですか？せっかく面白そうな記事が書けそうだって言うのに」

「おいおい、マジで言ってるんじゃないだろうな？それなら、こっちもそれなりの手段をさせてもらっぞ」

「あややく？幻想郷一俊足の私にどうやって立ち向かうと言っのですか？ぜひ、見せて欲しい所ですね」

文は木の上で踊りながら言った

「言ったな？その言葉、ウソ偽りはないな？」

「ええ！」

「そうか……なら、O h a n a s iと行くっじゃないか？」

俺は口をニヤリと開けながら言った

「え？ま……まさか」

文も気づいたのか逃げ出そうとしていた。

俺は手元の無線機である人物に連絡を取った。無線越しに「りよーかーい」と言う声が聞こえた。次の瞬間……

「あややー！ー！！なんですか、これは！？」

文が飛びだつた後、後ろからミサイルが追尾していた。

「悪いなー！精々、逃げ切ってみるよー！大丈夫だ！瀕死の状態にはならない！」

俺は大きく手を振りながら言った

「そんなの分からないじゃないですかー！！ってアブな！？」

ミサイルは一発だけではなかった。その後も一つ、また一つ文の方に向かって飛んでいった

「さて、藍、行こうか？」

「あ、ああ」

藍は今の光景に啞然としていたようだ

くにとりの工房

俺達は何事もなくにとりの工房に着いた。着く直前に山の方で爆発音が聞こえた。その後、「孟さんの馬鹿ー！！！」と言う声が聞こえたが気にしないでおう

「にとりー！いるかー？」

俺は大きな声で言った。すると中から「はいはい」と言う声が聞こえて、扉が開いた

「よっ、にとり」

「孟、待ってたよ。それよりどうだった？例のミサイルは」

にとりは悪戯顔で言った。実は、さっきのミサイルはにとりが発明した地对空ミサイル通称SAMと呼ばれるものである。こいつは先日図書館で設計図が見つかったためにとりに開発を頼んでおいたのだ。そして、完成したので文を使って実験を行ったと言わけだ。

別に証拠隠滅とかそういうじゃないぞ？これだけは言っておく

「ああ、精度もばっちりだったよ。見事、命中した」

俺はニヤリと笑った。

「孟、さっきのはもしかして……」

「ああ、藍の思ってる通り、ミサイルはにとりが開発した物だ。実験用に作ったのを使って文に打ち込んだのさ。大丈夫、死にやしない程度に爆薬を使ってるから」

「そ……そうか……あはは」

藍は苦笑いしながら言った

「それより、孟！出来上がったよ！」

「おお、できたのか！見せてくれるか？」

「もちろん！ついて来て！」

そう言って工房内に入る俺達

（工房内）

「じゃじゃーん！」

にとりが電気を付けるとそこにはいろいろな兵器があった

「おおー！ずいぶん早く出来上がったな」

「うん！と言っても全部で来たわけじゃないよ。大型の物はまだ建造中だし、高性能な物は十分じゃないと言えるね」

にとりが言った

「しかし、作るのは大変だったろ？」

俺が言った

「ううん、仲間とか、孟が連れて来てくれた作業員のおかげで作業ははかどったよ。」

「そうか。それは良かったな」

そう言って兵器の方を見る。ここで、開発された兵器を簡単ではあ

るが紹介していこう！

〈A H - 64 アパッチロングボウ〉

このへりはA H - 1の後継機として対地専用につられた攻撃ヘリで
主な任務は敵拠点制圧である。そのため、機銃はM 230機関砲を
装備しており、ミサイルはヘルファイアという対戦車ミサイルを積
んでいる。その他にも無反動ミサイルなども装着できるようになっ
ている。また、機銃などは操縦者のヘルメットについでるカメラと
連動しているため、自由自在に操れるのだ

〈10式戦車〉

この戦車は自衛隊であるときに開発されたM B Tである。90の後
継機として開発された。総合的に能力は90より格段に上がってい
ると言われる。主砲は90と同じ44口径の120mm滑腔砲であ
る。出力的には90の方が上ではあるが10式は軽量化されており、
その分、スピードも若干ではあるが上がっている。俺達の期待の星
というわけだ

〈カエサル 155mm自走榴弾砲〉

カエサルはその名の通りトラックの荷台に155mm榴弾砲をのせ
た自走砲である。普通は戦車を改造したバージョンがあるがこのカ
エサルは機動力を生かし効率的に展開できる能力を持っている。し
かし、装甲は普通のトラックと変わらないため、あまり前線には出
せない代物である。しかし、コストが普通の自走砲よりも安いため、
大量生産が可能なのである。採用している国はフランス、タイ、サ
ウジアラビアなど、比較的経済が裕福ではない国が採用している

〈UH-60ブラックホーク〉

これは現アメリカ軍が採用している。汎用ヘリである。UH-1ヒューイヘリの後継機として、様々な局面で頼れる便利ヘリなのだ。武装はヘリの横に付いている機関銃しかないが、改造版は大型の機関銃を乗っけて攻撃用に変換されている。もちろん、ミサイルも装備できる。

〈M2ブラットレー〉

このブラットレーは戦闘歩兵車である。先に出てきた89式の同系と思ってくればいい。主砲はM242 25mm機関砲である。副武装としてTOW対戦車ミサイルが付属されている。戦場だけでなく住宅街の戦闘も予想されていたため、車体は比較的小さめである。しかし、これによって小回りな機動を確保できる結果になったのだ

〈BTR-80〉

この装甲車はソ連が作りだした装甲車でソ連で出てきた装甲車の中で一番改造が施されている。まず、エンジンはディーゼルエンジンを搭載しており、発火防止と出力向上ができるようになった。また、上部にハッチを追加して上から入る方式になっている(エンジンが後方に付いていたため後ろから乗りづらくなったため)。主砲はNSVT 14.5mm機関銃という重機関銃で頼りないが、それなりに威力はある

「とまあ、こんなものかな？」

俺が言った

「誰に言ってるのだ？孟」

藍が突っ込んだ

「気にするな。作者の心優しい解説って所だ」

「そうか。では、作者、私をもっと出せ。そして、孟の傍にいさせろ」

藍は警告を発してきた。おお怖い怖い

「藍、大丈夫か？」

「孟、気にしちゃあいけないよ。しばらくそっとなじりてあげよう」
にとりが言った

「まあ、そう言っなら」

「それより、孟！」

「なんだ？」

「今回の一番のオススメを紹介するよ！」

「オススメ？」

「うん！とりあえず、付いて来て！」

そう言ってにとりが走った。俺もその後続く

.....

暫く行った所でにとりが止まった。目の前には大きなブルーシートがあった

「にとり、こいつか？」

俺が言った

「うん！紹介するね！じゃーん！！」

そう言ってにとりがブルーシートを引っ張った。すると、そこにあったのは.....

「おお、こいつは.....」

俺は驚いた。

そこに停まっていたのは、前回の図書館で見つけた火器管制型迎撃専用車であった。大きなトレーラーをそのまま改造したみたいな形になっている。トレーラーの屋根には中型のアンテナ横の部分には対空ミサイルであろう箱が積んであった。

「いや、これを作るのにどれだけ時間を費やしたか」

にとりは満足そうに言った

「こいつがあれば、結構変わってくるかもな.....」

俺は迎撃車を見ながら言った

「そうだね。この一台があれば戦場を瞬時に把握する事が出来るよ。あと、設計図以外にも私なりに改造を施したからね。」

「例えば？」

「うん、そうだね。例えば、この車対空装備しかなかったから、対地専用にはガトリング砲を取り付けて見たよ。それに本来、これだと動かせないようになってたからトラックから、装甲車に変換したよ。そうすれば、馬力の問題はなくなったからさ。」

「装甲車の方は？」

「これだよ」

そうやって出したのはコンドル装甲車である。この装甲車はドイツが作りだした装甲車で水陸両用タイプである。

「ほ、コンドルにしたのか」

「うん！こつちの方も改造したから外の世界にある物より遙かに性能は上がってるはずだよ」

「なるほど」

「まあ、今できてるのはこれくらいだね。後はまだ、建造中だよ」

「そうか。にとり、本当にありがたい」

「いって私もこういう作業は楽しいし、それにあっちの世界の事も勉強できるから楽しいんだよね」

「そうか。」

こうして、孟達は新たに兵器を確保する事が出来たのである

海は、広いな、大きな……実際の戦艦ってどのくらいの大かさかな？

ごめんなさい、調子に乗りました

海は〜広いな〜大きな〜……実際の戦艦ってどのくらいの大きさかな？
おれはにとりから、兵器を買った後、一旦、八雲邸に戻った。郷田
さん達は最初、見て驚いたが、その後、すぐに兵器の講習を開始した
そんな中、慧音が八雲邸に訪れてきたのだ

〜八雲邸〜

「あ〜あ、暇だな〜」

俺は自分の部屋でゴロゴロしていた。講習は郷田さん達に任せてあ
るしかと言って何かしなければいけないというわけでもなかったた
め、ゴロゴロしていた

しばらくすると襖が開いた

「孟、いるか？」

やって来たのは藍だった

「どつした？藍」

俺は寝ころびながら言った

「慧音がお前に用があるそつだ」

「慧音が？なんだろう？分かった。すぐに行くよ」

そうやって俺は部屋を出た

〈客間〉

客間につくと慧音と紫がお茶をしていた

「ふむ、おいしいなこのお茶は」

慧音が言う

「でしょう？最近、スキマの方に届いてくるのよ。誰の仕業か分らないけどね」

紫が言う

「よう、慧音」

俺は襖を開けて慧音に挨拶をした

「盃」

「ああ、いいよ。そのまま座って」

そうやって俺は紫の隣に座った

「で、話って何だ？」

「うむ、実は他の妖怪から聞いた情報なのだが、人里より、北のところにでっかい水溜りができたそうなんだ」

「水溜り？」

なんだそりゃ、そのどこがおかしいって言うんだ？

「実は、元々そこには誰も入っていない森だったはずなのだが、突然、水たまりができたそうなんだ。それも対岸が見えなくらいに」

「へえ……そいつは面白そうな話だな。他になに情報はあるのか？」

「ああ、その水たまりは塩が入っているみたいでな。飲み水として使えないというのも聞いた。それなら、外の世界にいた孟なら、何か分かるかもって思ってな」

「ほうほう……」

大体分かってきたぞ、答えは一つしかない

「読めたぞ。答えは海だ」

俺が言う

「」「海？」「」

三人が口をそろえて言った

「ああ、そうだ。外の世界にある物でなっていうか。三人とも海は見た事ないのか？」

「ええ、こっちには湖はあるけど、海なんて物は存在しなかったら

ね」

「私も初めて聞いたぞ。」

「私もです」

三人が言った

「そうか。説明に戻るけど、海っていうのは塩分が主な要素になる。そのせいで舐めたりすると塩辛い感じになるんだ」

「」「ふん」「」

「とりあえず、行って見ないと分らんな。よし、」

そう言って立ち上がった

「どつするんだ？ 孟」

藍が言う

「決まってる。海に行くんだよ。誰か付いて行きたい奴はいるか？
はい、拳手！」

そう言うと三人が同時に手を挙げた。どんだけぐって言いたい

「よし、へりで移動するとするか。じゃあ、三人は表で待ってて」

そう言って俺は外に出た

「八雲邸、射撃訓練場」

「それ！もっと腰を低くするんだ！でないといいたくなるだけだぞ！」

指揮はパイパーが取っていた

「郷田さん」

俺は観覧席にいた郷田さんに話しかけた

「おお、孟君、どうした？」

「この後って空いていますか？」

「ああ、空いてはいるが、どうした、何か用事か？」

「ええ、人里からの情報なのですが、海がこっちに入っただけなんです」

「なんと・・・海が」

郷田さんは驚いた

「と言っても全体ではないみたいです。ほんの一部がこっちに入っただけで、これから出ようと思っているんですが、一緒に来てくれませんか？」

「分かった。行こう、他にも誰か連れていくか？」

「そうですね……じゃあ、バートレット大尉をお願いします。」

「分かった。すぐに向かおう」

そう言って郷田さんはバートレットを呼びに行った

「さて、俺も準備をするかな」

そう言って俺は一旦、自分の部屋に戻った。万が一というのものもあるかもしれない。なので、護身用にイーグルとM4を持ち出した。

そして、部屋を出て紫達がいる庭に出た

「悪い、遅くなった」

「別にいいわ。それより孟」

「なんだ？」

「ここから、どうやって行くの？ 慧音に聞いたけど、遠いらしいわ
「よ」

紫が言った

「大丈夫だ。俺らの世界の乗り物に乗って行くから心配する必要はない（ババババ……）おっ来たな」

そう言って上空を見上げた。そこには白玉楼で見つけたパイプロウが飛んできた。パイロットはバートレットである

そして、仮のヘリポートに着陸した。前にも言ったであろうが飛行場はまだ、建設中である現場監督は雪穂ちゃんに任せてある

「悪い、こいつを引っ張り出すのに時間を食っちゃまってな」

バートレットが降りて言った

「いいですよ。それより、さっそく行きましょう」

「そうだな。久々に海を見れるなんて感激だぜ」

そう言ってバートレットが乗り込んだ

「孟……これは？」

慧音が言った

「ああ、慧音は初めて見るんだっただな。こいつはヘリコプターと言って空を自由自在に飛べる乗り物だ」

「ほ〜」

そう言ってパイプロウに周りを見る慧音

「さっ、さっそく乗ろう。目標は海だ！」

そう言って俺たちもパイプロウに乗り込んだ

く上空へ

「すごい・・・こんな物が空を飛ぶなんてな・・・」

慧音は窓の外を見ながら言った。紫や藍も見たことはあるが乗るのはこれが初めてであった。紫は子供のようににはしゃいでいた

「すごい！すごい！自分で飛ぶのとは訳が違うわね！」

「藍様、すごいですね！」

ちえんが言った。因みにちえんは藍が連れて来た。まあ、人数を制限していた訳じゃないしな。多ければ楽しいだろう

「ちえくん、ハア、ハア」

藍は外の事よりもちゃんのはしゃいでいる姿を見て喘いでいた。

「藍、戻って来い」

「はっ！？私は何を？」

覚えていないのか。こりゃあ重症だな

「おっ見えて来たぞ。こいつはでかいな」

バートレットが言った。俺も正面に行って見た。確かに大きかった
それこそ、霧の湖より倍はあるであろう大きさであった

「しかし、なんで出てきたんだ？」

俺が言った

「そうね・・・もしかしたら、これも関係してくるんじゃないかしら？あなた達や奴らと同じように・・・」

紫が言った

「確かにな・・・まあ、着いてみれば分かることだ。バートレット大尉」

「おうよ。任せろや」

そう言っつて着陸態勢に入った。近くに丁度いい大きさの広場があったのでそこに着陸することになった。

〈海岸〉

へりから一步出てみると潮の香りが鼻をついた

「おお、やっぱり海だな。こりゃあ」

俺が言った

「すごいわね。この匂い」

紫は鼻を押さえながら言った。他の三人も同じ行動をしていた

「四人にとつちやあ初めてかもしれないが大丈夫だ。すぐに慣れる」

そう言っつて俺は海の方へと歩き出した。もちろん、何があってもいよいよに銃は構えられるようにしておいた。

それから、数分歩いたところで俺達（郷田さんなど）はある物を目の当たりにしてしまう。

「孟君、あれが見えるかね」

「ええ、あの大きな岩の後ろにある奴ですよね？」

「ああ、そうだ」

俺達から数メートル離れた所に大きな岩があった。しかし、その後ろには見覚えのあるマストが見えていた。日本人なら誰もが知っているだろう船である

「紫、藍、慧音、少し、待っててくれないか？」

俺が言った

「どうしたんだ？孟」

藍が言った

「何、心配することはない。ちょっと調べ物ができただけだ。大尉、紫達の護衛をお願いします」

「分かった。何かあればすぐに戻って来い」

「ええ、行きましょう。郷田さん」

「うむ」

そうやって俺と郷田さんは岩の方へ歩いて行った

（海の近くの岩）

「あのでかさは間違い不是吗？」

俺が言う

「ああ、まさか・・・とは思ったが間違いないだろう。よもやまた、あの船と再開できるなんてな」

郷田さんが言う。郷田さんは呉の出身だそうで例の船も一度は見たことがあるのだという。ここまで来ればわかるだろう。日本最大いや、当時、世界最大と言われた戦艦、名を”大和”日本の工業力を最大限にまで生かした世界最大の戦艦、46？砲を標準装備とし、日本の誉れと謳われた

しかし、最後の任務で沖縄に向かおうとしたところアメリカ軍の航空隊に攻撃を受ける。その巨大な船体は大きく傾斜し東シナ海の海の底へ轟沈して行ったと言われている

「こいつは・・・やっぱり大和だな」

俺が言う

「そうだな。このでかさ。そして、あの砲台、間違いない」

郷田さんも確信したようだ

「しかし、打ち上げられているってのはどういう事でしょうかね？」

「確かにな……孟君、これは私の推測なのだが、大和はあの航空隊の攻撃を受けている途中でこっちに入ってきて来てしまったのではないかね？ほら、横っ腹に穴が開いている」

そう言って郷田さんは大和の船体を指さす。確かにそこには小さくではあるが穴が開いていた

「なるほど、確かに郷田さんの言う通りかもしれないですね。でも、どうしましょう？いつまでも置いておくわけには行かないでしょう」

「そうだな。奴らの行動も気になるしな。紫君に相談してみてもどうかね？彼女の能力なら可能かもしれないぞ？」

「なるほど、名案ですね。さっそく呼びに行きましょう」

そう言って紫達のいる場所へと向かった

続 海はく広いな（略）

俺らは慧音の依頼で海を探索することになった。当初はそこら辺を適当に探索して終了しようと考えていたが思わぬ物がこっちに入ってしまったのでびっくらこいた

く海岸、大和付近く

しばらくして、紫達が俺らの処に到着した

「ほへ〜」

「これは……」

「また、幻想入りしたのね……」

上から藍、慧音、紫の順番に感想が出た

「孟さん、これはなんですか？」

ちえんが聞いてきた

「ああ、こいつは戦艦と言って俺らの世界の乗り物さ。ただし、見での通りでかいからな。こういう広い場所ではか使えない物だ」

「へ〜」

ちえんはそう言って大和の方を見た

「で、孟、この後はどうするの？」

紫が言った

「そうだな……もしかしたら、他にもこういう風に入ってるかもしれない。手分けして探さないか？」

俺が言った

「確かにな。孟君の言う通りだ、私は賛成だが、他の者はどうする？」

郷田さんが言った

「私は賛成よ？他にも面白そうな物が見れそうじゃない？」

そうやって紫は賛成の意見を言って扇子を広げた。紫が言った後、藍、慧音も賛成してくれた

「よし、じゃあ手分けして探そう。みんな分かれてくれ」

俺がそう言つと次のように分かれた

く郷田組く

郷田、紫、ちえん

くバートレット組く

バートレット、慧音

（孟組）

孟、藍

以上のように分かれた。

「じゃあ、郷田さん達は大和の方を、バートレット達は着陸地点より反対側の地域を、俺らはこの先を調べます」

俺がそう言つと郷田さんとバートレットが「了解」と言つてそれぞれ分かれた

「さて、俺らも行くとしますか？藍」

「ああ、行くこうじゃないか。孟」

藍はそう言つと腕に絡みついてきた

「お、おい、藍」

「いいじゃないか。せつかくの二人つきりなんだし、こうしても構わないだろ？それとも・・・嫌だったか？」

そう言つて上目遣い&涙目攻撃を炸裂してきた

「・・・しょ、しょうがないな。ただし、二人つきりの時だけだぞ？」

俺は了承してしまった。だって、しょうがないじゃないか。美少女

が上目遣いと涙目攻撃をしてきて耐えられると思うか？もし、耐えられるならやり方を教えてほしいわい

「」

藍は嬉しかったのか鼻歌を歌い始めた。しかし、俺の腕にはでっかいおっ・・・ゲフンゲフン、双子山が絡み付いて来ていた。

（くお〜、藍さん、胸が当たってますよ！）

俺が心の中でそう言った。だって、実際に言ったら何されるかわかったもんじゃないしな

そうして、探索を開始する俺達であった

青年、美少女移動中・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく、歩いてみたがこれと言って重大な物はなかったというよりも初めっから何も無かったと言って方が正しいのかもしれない

「う〜ん、何も無いな〜」

俺が言った

「そうだな。あんなでかい物があるから、他にも何ある思ったがな」

藍が言う

「確かにな〜俺もそう言う風に思っていたが、ここまで何も無いと

逆に警戒心が出てくるな」

「そういうものか？」

「そういうものなんだよ……待て、ありやあ一体何だ？」

そう言っつて海岸線のずっと先に何か黒い物が横たわっていた。

「孟、あれは一体何だ？」

藍はそう言いつつも警戒態勢を取っていた

「分らん……とにかく行っつてみるしかないな」

そう言っつて俺らは黒い物体に近づいて行っつた

……

「こいつは……軍用輸送機か？」

そこにあっつたのはバラバラなっつていた輸送機であっつた。バラバラと言っつても翼などが折れて飛べないよっつうな状態であっつた。機体自体は原型を保っつていた

「孟、横に何か書かれてるぞ。」

藍が言っつた

「どれどれ……こいつは旧ドイツ帝国のマークだな」

皆さんも歴史の教科書で拝見したことがあるだろう。ドイツ第三帝国の国旗、当時ヒトラーが入っていた政党のマーク、通称ナチスマーク。そのマークが墜落した機体に描かれていたのだ

「こいつはどいう事だ？なんで、ナチスの機体がこんな処で墜落してんだ？」

俺が言った

「孟、こっちにもそれと同じ物があるぞ！」

藍がそう言った

「おいおい、こいつはただの輸送部隊じゃないな」

最初の墜落機より先にあつたのはそれよりデカイ輸送機であつた。レシプロ機であることには間違いないのだが、如何せんエンジンが両方合わせて12基も搭載されていた

「なんだ？こいつは、あの時代に無かつたものの筈だが……」

そう、孟はWW？時代の兵器には目がないので学生時代、国立図書館など、有名な図書館で第二次世界大戦の兵器を漁りに漁つたのだ。その結果、そこらの軍オタ、軍人よりもはるかにレベルの高い状態になっている

「とりあえず、中に入れてみよう。何か分かるかもしれない」

俺が言った

「分かった。私はどうすればいい？」

藍が言った

「一緒について来てくれ。こいつを一人で探索するにはちと骨が折れるからな」

「分かった」

そうやって俺達は超大型輸送機の機内に入って行った

（機内）

「思ったよりきれいだな……」

俺がイーグルを構えながら言った。普通、墜落した場合、外だけでなく中にもなんらかの影響が出ている、しかし、中は墜落した機体とは思えないほどきれいにできていた

「孟、これは？」

そうやって藍が見せてきたのはワルサーP38だった。この銃はナチスで多くの軍人に親しまれていた銃であり、弾は9mmパラベラム弾を使用する。装弾数は8+1発仕様の物が多いがロングマガジンも実在する。他に有名だとルパン三世もこの銃を愛用していたと言われている

「そいつは、P38俺らの世界の物だ。せっかくだ。もらっとけよ」

「いいのか？」

「ああ、俺にはこいつがあるしな。撃ち方も教えてやるよ」

そう言っつてイーグルを指さす

「ああ、頼む」

「まずは、そこに落ちているマガジンをここに入れるんだ。そして、上部のスライドを動かす」

俺はそう言いながら実演した

「ん……こう……か？」

藍はオドオドしながらもマガジンを挿入し、スライドを引いた

「そうそう、で横にあるちっちゃいボタンみたいなものがあるだろ？それをこつという風に上下に動かすんだ。そうすることによって安全装置が外れるようになる」

「孟、この状態は？」

そう言っつて見せてきた

「あーこいつはロックがオフになってるな。この状態だと下の引き金を引くことによつて弾が発射される仕組みになってるから気をつけろよ。それと、絶対、引き金に指をかけるな。引く時は相手がいる場合のみだ」

「分かった。」

「よし、ちゃっちゃんかと調べることにしますか。藍、ホルダーをやるよ。それがあれば銃を落とさずに済むだろう?」

そう言ってホルダーを渡した

「すまないな。孟」

「いって事よ。さて、どこから調べるとしますか……」

「孟、私は後ろの方を調べよう」

「了解、じゃあ、前の方を調べてくるわ。十分後にここに合流だな」

「分かった」

藍はそう言って機体より後ろの方を調べ出した

「さて、行くとしますか。何かあるか分からんから警戒態勢で行こう」

そう言って俺はイーグルを取り出す

くコックピットく

俺はまず、コックピットにやって来た。ここでならある程度の空路は分かるだろうと思いやって来たのだ

「さてさて、おっフライトの記録か……何何……」

記録にはこう記されていた

我々は最後の任務としてある大隊に武器弾薬をたんまりと送る予定であつた。しかし、途中連合の連中と出くわしてしまい、護衛にあつてた戦闘機はほぼ全滅した。残るはこのヴァルキリ号と複数の輸送機になつてしまい攻撃は皆無に等しいほど脆弱であつた。攻撃を受け、次々と墜ちていく仲間たちそして、ついに我々にも牙を向いた。エンジンをやられ航空機能を失つたヴァルキリは我々を乗せたまま海に落ちるだろう。私は任務を果たせないでいる事を後悔している。しかし、ヒトラー総統がいる限り、我々に負けは無い、そう信じたい物だな……

記録はここで終了していた。走り書きであることから、きっと落ちる直前に書いた物だろう。

「ふむ、大隊か……だとすれば、あの部隊しかないな。」

独り言のように言った。第二次世界大戦の後期、ヒトラーの最後の部隊、またの名を最後の大隊、この部隊は首都の最終防衛として使われていた物だが連合国の圧倒的戦力の前に猛々しく惨敗、全滅した部隊である

「武器弾薬か……もしかしたら積みまれているかもしれんな。」

そう思った矢先

「孟……」

藍がやって来た

「どうした？藍」

「ちょっと来てくれないか？後ろの方でものすごい物を見つけた」

そう言われたので藍に付いて行くことにした。そこにあっただのは・・・

「おお、こいつは・・・すごいな・・・」

そこには第二次世界大戦で最も使われたであろう。武器、そして弾薬がこれでもかってぐらいに押し込まれていた。きつと大隊が使う予定だったのだろう。

「孟、こいつは何なんだ？」

「ああ、こいつは俺らの世界の武器だ。と言っても俺より昔の軍人が使っていた兵器だけだな。藍、郷田さん達を呼んで来てくれないか？」

「分かった。待っている」

そう言って外に向かう藍だった

「さて・・・どういう使い道があるかね・・・」

そう言って目の前の備蓄を見た

ナチス＋戦闘開始か？

俺らは海で捜索を開始した際、海岸でナチスのマークが入った輸送機を発見した。中は、外見より損傷が酷くなかった。

そして、藍が大量の武器弾薬を発見したため、郷田さん達を呼んでもらえるように頼んだ

（武器弾薬庫）

「しっかし、まあ、よくも暴発しなかったな。それだけ頑丈に出来てたってことか」

武器弾薬庫内を調べたが、どれもが無傷の状態であった。まるで、衝撃が何もなかったように……

「ん？なんだ、この武器は」

俺が一番近くにあった武器ボックスに目が行った。それはどの武器の入った木箱よりも一際目に留まるような大きさだった。試しに開けてみた

「こいつは……バレットライフルか？いや、形は似ているが違うな……」

中に入っていたのはバレットライフルに似ていた対物ライフルだった。外見はバレットを縮小させたように見えた

「えーと、名前は……タンクキラー tank killer？聞いたこと

ないな」

現代のM B T（第三世代の主力戦車の事）にも勝てる威力を持った対物ライフルらしい（説明書にもる書いてあった。しかも、赤丸で囲ってあるぐらいに）

木箱に名前があつたため読んでみたが聞いたことのない名前であつた。というか、意味はそのままだろ。まあ、それは置いて・・・

あの時代ならば対物というより対戦車ライフルとして有名なのがP T R D 1941というソ連の対戦車ライフルだ。P T R Dはポルトアクション式の対戦車ライフルだが、ドイツがタイガー戦車を出した際に開発されたライフルだ。弾は14・5mm弾を使用する。今となつては規格外の弾だ。そのため、威力が強すぎて歴戦に兵士でも三度までしか撃てないと言われた代物である

「はてさて、こつちの物はどうなんだろうな。弾は自動で出てくる仕組みのようだが、弾は・・・キャリバー50か。ずいぶんと現代的だな」

そう言いながらボックスマガジンを入れ弾を装填した。ガコンツと重い音を立てながら弾が装填されていく

「うーん、持ちやすさはちょうどいいな。しかもバレットと違って軽量化されているのか。これなら歩きながらも撃てるか。命中率は最悪になるが、」

「孟君！」

どうやら郷田さんが到着したようだ

「郷田さん、こっちですよ。」

「おお、そっちにいたか。それにしてもすごいな。まさか、ナチスの物まで見られるとは」

「ええ、本当ですよ。貴重な体験ですね。あっそれと、この機の記録が残ってましたよ。読んで見てください」

「分かった」

そう言って記録を読む郷田さんであった

「ふむ、落ちる直前に書いた物だな。」

読み終えた郷田さんが言った

「その通りです。なら、ここにある武器も貰っておいた方が有効ですよね」

俺は武器などをまさぐりながら言った

「そうだな。いつ、奴らがここの存在に気づくか分らんしな。」

「そうですね。しかし、どうやって持ち運びしましょうか？さすがに持って歩くとなったら時間が掛かりますよ？」

「そうだな、しかし、ここに置いておくという訳にもいくまい。どうしたのか……」

「孟、いるの？」

紫が来た

「おう、こつちだ」

「あつそつちにいたのね。どうしたの？何か困りごと？」

「ああ、この武器弾薬をどうやって運び出そうか。悩んでいた所だ。このまま置きっぱなしにしておいたら奴らに渡ってしまうかもしれないしな」

そう言っで目で武器弾薬を見た

「なら、私のスキマで運べばいいじゃない」

そう言っで扇子で半分、顔を隠しながら言った

「ああ！その手があつたか！」

俺はポンと手を叩きながら言った

「そうとなりゃあいいか？紫」

「ええ、ここに入れておけば後で向こうに着いた時、取り出せばいいわ」

そう言つてスキマを作る紫

「悪いな。じゃあ、さつさと運んじやいましょう。郷田さん」

「うむ、そうだな」

そう言つて武器、弾薬をスキマに入れる作業をした。因みにt a n k k i l l e r は俺が所持することにした。なんたつて持ち運びやすういからな。弾薬も持てる分だけ持つた。

M4の方は郷田さんに持つてもらつた

〈海岸〉

「そつといえば・・・」

「どつしたのだ？孟君」

「いや、郷田さん達の方は何か収穫はありましたか？」

「いいや、私達は大和の方に入ったのだが、中はきれいさつぱり無かつたよ。武器や弾薬さえもな」

郷田さんは残念そうに言つた

「うゝん、そうなるとあれはただの船になつちやいますね。でも、奴らに使われないだけまだ、マシですね」

俺が言つた

「そうだな。」

郷田さんも納得したようだ

その時、無線が入った

「孟！郷田！聞こえるか！」

相手はバートレットだった

「どうかしましたか？大尉」

俺が答えた

「ヤバイことになった！例の連中がここまで進軍してきた。今、俺と慧音はそっちに向かっている！相手は強襲揚陸艦から戦車を出して進軍中だ！」

「なんですって！？」

おいおい、あいつら強襲揚陸艦なんてものまで持ってたのか！？となると、俺らよりも先にこの海にいたってことになるな

「分かりました。大尉はすぐにごっちに向かって来て下さい。俺達は大和の付近にいますから」

「了解だ！」

そう言って無線を切る

「何があつた？孟」

藍が聞いてきた

「奴らだ。本当に神出鬼没だな。突然現れやがった」

「なんですって？」

紫が言った

「しかも、こっちに来てるっていう特典付きだ。まったく尽いてないぜ」

俺は溜息を吐きながら言った

「しかし、どうする？こっちには対等な武器など持ってはいないぞ？さっきの武器の中にパンツァーファーストはあつたが……」

パンツァーファーストとは対戦車ロケット砲のこと。ドイツの物

「そうですね……試しにこいつを使ってみるとするか」

そう言って背負っている tank killer を取り出した

「孟、それは？」

紫が言った

「こいつは対物ライフルと言ってな。今までの武器の中でも攻撃力

が高い狙撃ライフルだ。人間なんかに使ったら、頭と胴が一生、お別れすることになるぜ」

「へえ、それは怖そうね」

紫は納得したように言ったが若干分り切っていないようだ

「紫、スキマからさっきの武器を出してくれ。」

「分ったわ」

そう言つてスキマから武器が降つてきた

「じゃあ、郷田さん、さっきの通りでよろしくお願いします。やるとしたらあの岩影がいいと思いますよ?」

「分かった。孟君はどうするのかね?」

「俺はこの大和から狙撃をしますよ。あの艦橋からね」

「そうか。」

そう言つて郷田さんはロケット弾を持ちながら行った

「孟、私達はどうすればいい?」

藍が言った

「そうだな、この大和の中に隠れていればいいさ。多少なりとも攻撃は防いでくれるだろうから」

「あつ孟」

「なんだ？紫」

「今回は私達も参戦していい？」

「どうしてだ？」

「私達に逆らったらどうなるか。思い知らせてあげるわ」

そう言つて扇子で顔を隠しながら笑つた。それもニヤリと

思わず、恐怖感が漂つた感じがした

「孟、私もやるぞ。幻想郷最強の妖獣と言われた實力を見せてやる」

藍も紫と同じくニヤリと笑つた。いつもの笑顔ではなく戦闘に入る時の顔だつた。なんで分かるかつて？そりゃあ長い事、軍人をやればぶっついん気というものが分かってくる

「……分かつた。だけど、無茶はするなよ？二人とも大事な家族も同然なんだからな」

「あら、孟にそう思われるなんて光栄ね」

「いいから、早く行ってこい。さもないと獲物を先に取っちゃうぞ」

「あら、怖い。藍、行くわよ」

「はい、紫様」

そう言って二人はスキマの中に入って行った

「さて、俺も上るとしますか・・・」

そう言って大和の中に入っていく俺だった

対戦車ライフル・tankkiller(前書き)

更新が遅れてしまって申し訳ない

それと、スペルカードは名前が分からないのでオリジナルも入れてみました

対戦車ライフル・tank killer

前回までのあらすじ・・・ナチス機発見、新たな武器、奴らの急襲、八雲家参戦、以上！

く大和 艦橋く

俺は大和の艦橋に昇り、一番見晴らしのいい場所まで来た。下では郷田さんが近くの岩陰に隠れ、その後バートレットのチームも合流してみたんだ。

「さて、こいつの威力を試してみるとしますかね」

そう言つてtank killerの三脚（バイポットとも言つ）を立て伏せ射撃状態に入った。スコープは4〜12倍タイプの物だ

「敵さんは・・・あちゃくどう見てもタイガー戦車だな〜それに試作品だった超重戦車マウスまでいやがる・・・こいつはちと厳しいな〜」

スコープで覗いた結果がこれだよ！全くもってチートだな。敵さんは・・・

そう思つてその先の部分を見ると紫と藍が塞ぐ形で立っていた

く紫sideく

私達は孟と分かれてスキマで奴らの前に登場した。さすがに相手も驚いたようで全軍が停止した・・・あれは、孟が言つてた戦車？

と言う物かしらね。それが何台かとその後ろにそれよりでかい戦車が停まっていた

「紫様、どう動きます?」

藍が聞いて来た

「そうね……まず、私のスペルカードで一泡吹かせた後、藍の好きなようにしなさい。思いつきり暴れていいわよ」

「分かりました。リミッターは外しておきます」

そう言つて再び前を向いた。

「さあ、まずは私の番ね……礼符『軍用列車、最後の旅』」

そう言つと私の左にスキマが出て来て中から……巨大な列車が姿を現す、第二次世界大戦時、ドイツが使用した巨大列車で表沙汰には出て来ていない。しかし、その頃では最新式のガスタービンを使用しておりスピードが倍の速度まで出ている。

今回の行先はあの戦車軍団である。汽笛を上げ、列車が思いつきり衝突していった。いくつかの戦車がオシャカになった。しかし、生き残りがこちらに攻撃を仕掛けようとした

「フツ甘いわね。藍!」

「はい!紫様!霊符『プリンセス天狐』」

藍が言つと一つの弾幕が戦車に向かって行き、当たる直前に数個に

分かれた。そして、それぞれの戦車に当たって行き動力を壊したりしていた。

「藍、ここから先は孟達の仕事よ」

「はい、紫様」

そう言っただけ私達はスキマの中に入って行った

（紫 side out）

「おお、すごいな、二人とも」

俺はスコップで覗きながら言った。だって、紫は軍用列車なんて物を出すし、藍はきれいな弾幕だっけ？それもすごいの一言しか出ないな。俺にとっては……

「さて、仕事だ。郷田さん、聞こえますか？」

「ああ、聞こえている。どうした？」

「まず、郷田さんからやつちやって下さい。」

「了解、派手に行かせてもらいますわ！」

無線越しでそう言うと、ロケット弾がきれいに戦車に直撃して炎上した。中から人が火で炙られながら出てきた。素人なら戻しているだろう場面だが、俺達のとっちゃあ苦じゃない。しかし、これに慣れてはいけないのだ。これに慣れてしまったら最後、人間を捨てる羽目になるのと同じだからな

「じゃあ、俺はマウスを狙うとしますか」

そう言つて超重戦車マウスに照準を合わせ言つた

「goodnight」

引き金を引くと巨大な発射音と共に12.7mmの銃弾が発射された。弾は吸い込まれるようにマウスを直撃した。しかも、今回使っているのは徹甲弾と言つて通常の弾より弾が鋭利になっておりそのため装甲車や戦車の装甲まで貫く万能的な弾なのだ。

しかもマウスは第二次の物、装甲は現代に比べると低いのであっさりと貫いて行つた。

「さすがは、tankkillerの異名を持つだけの事はあるな。あのマウスが一発でオシヤカになるんだから」

そう言つてマウスの方を見る。マウスからは黒い煙がエンジン部分から上がっており意気消沈していた

その後も抵抗を受けることなく戦車部隊は壊滅まで行つた。因みに乗員は殺してはいない。何故かつて？後を追っかけて基地を見つけないのさ。

そのためにバートレットにはスナイパーライフルで通信弾を打ってもらつ事になっていた。

「大慰、成果はどうですか？」

無線越しで聞いた

「ああ、孟、良好だ。奴ら分散して森の中に入ったぞ。どうする？」

「そのままにしておいて下さい。何か変化があればすぐに連絡下さい」

「了解だ」

そう言って無線を切る

「ずいぶん、勇ましいわね」

後ろを振り返ると紫と藍が立っていた

「よせやい、寝めても何も出ないぞ」

「あら、本当の事を言ってるまでよ？ねっ藍」

「ああ、紫様の言う通りだぞ。孟」

「そうか？」

「当然でしょ？私達、家族なんだから」

そう言ってにこっと笑う紫

「ふっそうだな。」

そう言って俺も笑った。

その後、敵は撤退したとの郷田さんの連絡も来た。そこで、一旦八雲邸に戻ることにした。海にはいまだに漂着物が多い、なので、定期的に回収チームを編成する事にした。

中間基地は大和を拠点にしている。

こうして、俺は海から贈り物？を頂いたのであった。

孟の長い一日（前書き）

今回は孟の一日をご覧ください。あつちよ！単なる尺稼ぎとかいわないで！？ちゃんと書いてるつもりですから！

石投げんな！危ないだろ！

孟の長い一日

「朝、八雲邸」

孟が起床するのは日が昇らない明朝から起きる。何故かというのだが、候補生だった時に訓練で朝早くから起きなければならなかった。なのでその名残とも言える

「ふわ～もう朝か・・・眠いな～・・・しかし、寝れん」

孟は一度起きてしまうと二度寝に入れない性質だった

「仕方ない、体を動かすとしますか」

そう言っつて孟は部屋を出る

「庭」

「ここら辺で良いだろう。さて、始めるとしますか」

そう言っつて俺は誰もいない庭で近接近戦闘術の訓練を行う。相手がいると想定して行う訓練方法だ。腰には大型軍用ナイフを入れてある

「はあ！せいっ！」

まずは相手が攻撃してきたとしてそれを受け流しつつ回し蹴りで相手のわき腹に入れる。

「それ！」

そして、大型ナイフで腕や足などを機能停止状態にさせる。これにより、無闇に殺すことなく相手から情報を入手する事が可能になる。しかし、それは隠密行動のみの状態の時だけだ。戦闘になれば相手は銃を使用して攻撃してくる

だから、これは潜入作戦で使用する物だ。とは言ってもこれは制圧作戦でもかなり役に立つ建物の中の場合、相手がどこから来るかわからない状態の時は銃を使うよりも戦闘術の方が格段に役に立つまた、弾薬の節約にもなるしな

戦闘術の型を何度か繰り返した後は銃の整備、点検である。これは超が付くほど重要な事だ。ろくに整備も行わないで戦闘に入った場合銃がジャム（弾詰まり）や故障を起こす確率が高い、そのためにも日々の整備、点検は重要項目である

俺は自分の部屋の前の縁側で愛銃であるイーグルとM4、最近手に入れたtankkillerの整備に入った

「イーグルはここに来て一番使ってきたからな。よく整備しなきゃ」
そう言つてイーグルを分解する。この銃は孟がとある機関に特注で作らせた武器でそう簡単に壊れる物ではなかったが、毎日使えばそれだけ支障をきたすことになりかねない。そのためイーグルの部品は常に自分のバックの中に収納している

「ふむ、やっぱり特注だからそんな簡単には壊れないか。さすがだな。特に問題はないからM4の方に移るか」

そう言つてM4の方を分解する。

この銃は日本軍として樹立した際にアメリカ軍から提供された銃である。もちろん、89式も支給されるのだがM4か89のどちらかを選択できるようになっている。

「さすがは、特殊部隊でも使われるだけあって頑丈だな。汚れを拭いてやるとするか」

そんなこんなでtank killerを整備してる際に声を掛けられた

「孟、おはよう」

藍がやって来た

「おう、藍、おはよう。」

「早いな今日は」

「まあ、なんというか。早く起きちゃってな。寝るにも寝れなくて仕方ないからこうやって武器の点検を行っているんだ」

「そうか。じゃあ、私は朝ご飯を作ってくる。」

そう言って台所に向かう藍であった

数分後、朝ご飯ができ、その時、皆（郷田さんや他の兵士、紫など）が起き始めた。そして、朝食を取り、その後は各々の時間となる。

俺は自室に戻り、パチエから借りた本を呼んでいる所だ

〈自室〉

「こいつは使える作戦だな。今度、使って見ようかね？」

俺は戦術本を見ながら言った。その時襖が開いた

「孟、いる〜？」

やって来たのは紫だった

「おう、紫、どうした？」

「藍のお手伝いを頼もうと思ってね。今日は買い出しの日だから藍も手伝ってくれない？私も一緒に行くから」

「そうか。分かった。いつ出かけるんだ？」

「孟が出かけられるなら今すぐにでも」

「分かった。行くよ」

そう言って部屋を出る

表には藍が待っていた

「孟、すまないな」

「いや、ここに居させてもらってるんだ。いつかいつかお返しはさせてくれ」

「そうか。」

「じゃあ、車で行くか？」

「そうだな。紫様、どうします？」

「そうね。せつかくだし乗って行くこうかしら」

「決まりだな。じゃあちよっと待っていてくれ」

そう言っつて俺は車両を取りに行く

ハンヴィーは整備点検が行われているため使えない。代わりに高機動車を出すことにした。俺はそれに乗り藍達がいる門に向かった

「お待たせ」

「あら、思ったより早かったわね」

紫が言った

「女子を待たせちゃいけないって昔、じっちゃんが言ってたからさ。さあ、とつとつと行こうぜ？」

「そうね」

「そうだな」

そう言っつて俺達を乗せた高機動車は人里へと向かった

く人里く

「いやく相変わらず賑やかだな」

俺が言った。因みに高機動車は人里入口に置いてある。ヘタに子供とか出て来て轢いてしまったら取り返しがつかないからな。そのため歩いて買い物をしている

「あつ孟先生だー！」

どうやら寺子屋の子供が俺を発見したらしい

「よう。今日は寺子屋に行かなくていいのか？」

「今日はお休みだから、他の皆と遊んでるんだよ。」

「へくそうか。なら、思いっきり遊んでこい」

「うん！じゃあね」

そう言っつて子供は走って行く

「へく孟、人気があるのね」

紫が言っ

「ああ、俺が初めて授業やってから妙に気にいられちゃってな。その後も時々だが、寺子屋の手伝いをしてる」

「そうだったのか。どうりで最近、家にいないと思ったら」

藍が言った

「まあ、子供は見てて楽しいからな。そう思うとやりがいもあるってもんさ」

「へえ」

そういう話をしながら俺達は買い出しを済ませるのであった

〜団子屋〜

俺達は買い物物の途中で団子屋を見つけたので休んでいくことにした。そしたら、その女将が俺を見て両手に花だねと言ってきた。正直、恥ずかしかったが藍や紫は嬉しそうに笑っていた

「ん〜こいつはうまいな〜」

団子を頬張りながら言った

「ほんほよへ〜）略 ほんとよね〜（」

団子を詰めながら言う紫、

「紫、口の中の物を失くしてから言え、何言ってるのか分からん」

俺が言う

「それは失礼しました〜」

と悪戯っ子のような仕草を見せた

「孟、紫様、お茶だぞ」

藍が手渡してくれる

「ありがとう、藍」

俺が言う

その後は談笑しながら休憩をしていった。そして、高機動車で八雲邸に戻って行った

く八雲邸

「孟、御苦労さま、おかげで助かったわ」

紫が言う

「こんなことぐらいしか手伝えることがないからな。いつでも言うてくれ。ああ、それと二人とも手を出してくれるかい？」

二人は不思議そうに思っていたが手を差し出してくれた

「さつき、店先で良い物があってね。これなら二人とも似合うんじゃないかな」

そう言って渡したのはネックレスだった

「わあ、綺麗」

「本当ですね」

紫と藍が言う

「本当に良いのか？」

藍が言う

「ああ、たまには贈り物でもしようかな？って思っただけさ。」

「そうか。さっそく付けて見てもいいか？」

「ああ」

そう言って藍はネックレスを付ける

「ど、どうだ？」

そう言ってきた

「ああ、とてもよく似合ってるよ」

俺が言う

「そ、そうか・・・ありがとう／＼／」

藍は照れた

「じつじて、俺の一日が終了する

幻想空軍基地

前回のあらすじ：孟の日常を描いた。（だから、石を投げるな！危ないだろ！）

俺は雪穂ちゃんから飛行場が完成したとの報告を受けたので郷田さんや紫、藍を連れて飛行場に向かった。

～道中～

「いや～楽しみですね。郷田さん」

「全くだな。この飛行場が運用できれば空輸もできるようになるかな。それに戦闘機だって発進する事が出来る」

「ですね」

「ねえ、孟」

「なんだ？紫」

「その飛行場？だっけ、どれくらいの広さなの？」

紫が聞く

「そうだな～少なくとも八雲邸よりは大きいはずさ。まあ、みれば分かるさ」

「そう」

そうこうしている内に飛行場に辿りついた。周りはフェンスで覆われている。入口には雪穂ちゃんが立っていた

「お待ちしてましたよ。孟さん、どうぞ中へ」

そう言っつてフェンスを開ける雪穂

俺らはすぐに中に入った

〜飛行場〜

「おお〜こいつはでかいな〜」

俺は周りを見渡しながら言った

「ふむ、確かにでかいな」

郷田さんが言う

「すごいわね〜雪穂ちゃんがやったの？」

紫が言う

「まあ、と言っつても私は現場監督をしていただけですから」

照れくさそうに言う雪穂

「ご苦労だったな。雪穂ちゃん、君はどこに所属したいとか希望はあるか？」

俺が言った

「そうですね〜では、陸の方を私はもっぱらこっちの方が好きです
から」

そう言ってM16をかざす

「そうか。じゃあ、バートレット大慰」

「あいよ」

「この警備と整備は任せてもいいですか？」

「いいぜ。任せてくんな」

そう言って部下達に指示を出す

「じゃあ、中を見て行こうか」

そう言って一行は基地内に入って行く

〜基地内〜

俺らはまず、管制塔に昇った

「うわ〜高いわね〜」

紫が言った

「そらそうさ。ここで飛行機の離発着を支持を出す。そのための指示を出す施設なんだ」

「へえ」

紫と藍が言った

「さて、次に行こうか」

「ハンガー」

俺らはハンガーに到着する。中にはホーネットやイロコイなどが既に運び込まれていた

「孟、ここは？」

藍が言った

「ここは、ハンガーって言ってな。ここに止まってる飛行機やヘリなどを整備するための施設なんだ。大型の飛行機も整備できるようにでかく作ってあるんだ」

俺が説明を言う

「へえ」

「とまあ、主な施設の説明は済んだが、なんか質問はあるか？」

「孟、この施設は役に立つのかしら？」

紫が言う

「まあ、そうだな〜できるだけ出したいとは思ってはいるが緊急で動かす事もあるかもしれんな。と言っても動かさない事に越した事はないが」

「そうね。その方がいいけど……」

そう言うおうとした瞬間、衝撃が起こった

「キャツ!?!」

「な、なんだ!?!」

紫と藍が言う

「緊急事態発生! 敵軍が攻めてきた模様! 敵は陸、空の編成部隊でこの飛行場に向かって来ています! 目的はここの奪還かと思われます! 総員直ちに戦闘準備に入ってください! 繰り返します……」

どうやら敵軍がこの施設に攻撃を仕掛け始めたようだ

「孟君!」

「ええ、迎撃しましょう」

「孟、協力するわ」

「私もだ」

紫と藍も参戦するようだ

「ああ、ぜひともお願いする」

そう言ってハンガーから出る俺達であった

（滑走路）

外では兵士たちが防衛陣地を敷いていた

「急げ！敵は待っちゃあくれないぞ！」

雪穂ちゃんが指示を出していた。しかも口調が代わってる

「よし、俺達も手伝う事にしよう。」

そうやって俺達も防衛陣地の構築を手伝う。しかし、材料が足りないため、簡易的な防衛網しか造り出せなかった。そこで、紫のスキマを使って他の空間から廃車や鉄道車両を取り出すことにした。これで簡易的でも防御能力は上げる事が出来るだろう

「さあ、皆準備はいいか？」

俺は tank killer を担ぎながら言う

「もちろんだとも」

「ええ」

「問題ない」

上から郷田さん、紫、藍が答える

「よし、行くぞー！」

こうして防衛線に努めることになった俺達であった

基地防衛

俺らは新しくできた航空基地の視察をしていた。だが、突然奴らがこの基地に矛を向けて来たのだ。そこで、防衛態勢に入ることにした

（基地内）

「敵、1000m以内に入りました！」

観測兵が無線で全員に知らせる。因みにこちらの武装は前回、海の近くで見つけた飛行機の残骸にあった大量の武器弾薬を全員に配った。

俺は郷田さん達と分かれ、管制塔より次に高いハンガーの屋根に昇ってtankkillerを構えて撃てる体制を取っていた。弾薬は紫に頼んでスキマから送ってもらった。なので弾切れの心配はない

「孟君、聞こえるか？」

郷田さんから無線が来た

「はい、なんででしょうか？」

「まずは、君の銃で合図を上げて欲しい。そしたら我々は攻撃を開始する」

なるほど、開戦の狼煙を上げろって事か。面白れえ

「分かりました。自分が撃った後は各々、攻撃を開始して下さい」

「了解した」

そう言つて無線を切る

「敵、目視しました！そちらでも見えるはずですよ！」

俺はスコープで覗いた

「来たか・・・多いな。航空部隊は・・・チヌークが4機、ブラックホークが3機、アパッチが2機か・・・地上は・・・・レオパルド！？ふざけやがって・・・MBTなんざ用意していたのか・・・後は・・・BTRが4両、あれは・・・高機動車っぽいけど、違うな。テクニカルだな・・・どういう事だ？」

陸空共に軍隊装備でありながらなぜか、反乱軍が使うような一般車両を改造した物まであった。敵は混合性のチームなのか？

まあ、後で調べりゃあ良い事だ。今は破壊する事に専念しよう

まずは・・・チヌークからだ。あれには多分、空挺部隊が乗り込んでいるはずだからな・・・

「おやすみ・・・」

そう言つて引き金を引く弾はまっすぐ飛んで行き・・・チヌークの後方エンジンに直撃、その後プロペラが吹っ飛びへりは森の中へと消えて行った

それを合図にこちらが所有している重・小銃火器が一斉に敵のいる森に放たれていく。MBTや装甲車はともかくテクニカルは装甲は脆弱だからな。普通の小銃でも破壊できるくらいだし数減らしにはなるだろう

そして、基地の周りを囲っているフェンスの一部が倒れそこから、レオパルドやBTRなどが一斉に俺達のいる所に攻撃を始めた

「うわ!?!」「くそ!」

周りで兵士達が声を上げるが、幸い負傷者は出ていないようだ

空からはアパッチがチューインガンを使用して攻撃を仕掛ける。だが、被害に遭うのは建物ばかりであった

「くそ! 奴ら建物をわざと当ててやがる!」

俺が言った

「孟! 私に任せろ!」

そう言っつて藍が空を飛びアパッチと同等の高さまで上がった

「霊符 妖銃の極み」

そう言っつて藍は前回あげたワルサーP38を取り出す、だが、一丁しか渡していないはずなのになぜか二つ三つと増えて行き、やがて10を超えるワルサーが藍の周りを囲っている

「放てー!!!!!」

藍がそう言つと一斉に発射される。どんなに弱い銃でも数があればその場をしのげるとは良く言つが藍の場合、数と連射力によって攻撃力を高めているようだ。そのおかげでアパッチは少しずつではあるが、装甲が剥がれて行き、やがてエンジンから火を吹いた

出力を失つたアパッチはそのまま大地に引き寄せられるように落ちて行き、爆発を起こした。一機が落ちた後、もう一機が藍の所に向かおうとしていた

「させるかよ！」

そう言つて tank killer を構え、発射されるだが、どう見ても着弾地点がアパッチよりずれてしまっていた

「もう一発！でりゃあああ！！！！」

そう言つて tank killer を振り回すようにしながら銃弾を放つ、普通なら弾丸はまっすぐ飛ぶはずなのだが、弾丸は放射線を描くように曲がって行き、アパッチのテイルローターに直撃、プロペラが吹っ飛んだ。

この弾線を曲げると言う方法は孟が努力を重ね、やっと完成した方法である。普通ならハンガン用に使うべきなのだが、対戦車ライフルでそれをやってのけてしまうとは非常にすごい事だ

アパッチはそのまま落ちて行き大地に叩きつけられたが、爆発はしなかった

「よし！後はチヌークと地上部隊だけだな」

その時、無線から連絡が入る

「孟、チヌークは任せて」

声の主は雪穂ちゃんだ

「OK、了解したが何か手はあるのか？」

「大丈夫、ステインガーがあるから」

「用意が良いな。任せた」

そう言っつて無線を切る

「さて、地上に戻るか」

そう言っつてハンガーから降りて行った

side 郷田

我々は地上で敵の猛攻を喰らっていた。幸い、死者は出ていないが、負傷者が出て来ていた。

「砲兵長！どうするんですか！？」

若い自衛隊員が言った

「焦るな！機会を待て！」

「で、でも・・・」

「だったら、私はその道を開きましようか？」

そう言っただけ来たのは紫だった

「どうするのだ？」

「簡単、私のスキマを使えばあつという間よ」

そう言っただけ我々が盾にしていた廃車を出て敵の前に出た。

「妖符 ぶらり途中下車」

そう言っただけ紫はスキマを開く・・・中からは廃車である鉄道車両が汽笛を鳴らしながら敵軍の装甲車に向かって行き、衝突を起こした

「よし！隙が出来たぞ！おい、ジャベリンを持ってこい！」

そう言っただけ他の兵士がジャベリンを運んできた。ジャベリンとはアメリカ軍で使用されている対戦車ミサイルの事だ。これには発射前のロックオン 自律誘導力 バックブラストなどが控え目になっているため室内からの発射も可能となっている

私はジャベリンを構え、一番近くにあったレオパルドに照準を合わせた。少しするとロックオンされた音が鳴った

「これで、終わりだ！」

そう言って引き金を引いた

大きな反動と共にミサイルが発射されていき、垂直に上がって行く、やがて、下に向くと同時にレオパルドの上に来るように修正され・・・直撃する

レオパルドはそのまま爆発を起こし炎上していった

「よし、ほら、お前らも見えてないで対戦車戦闘に入れ」

そう言ってさっきまで怯えていた自衛隊員にジャベリンを渡す

「了解しました！おい、誰か手伝ってくれ！」

そう言って他の仲間に手伝いを求める。

私は紫の傍に向かった

「紫さん、御苦労さま」

「あら、ありがとう。」

紫は日傘を回しながら言った

「戦況は有利ね」

「ああ、こちらの損害も軽微だ。死者は出ていない」

「そう。それは良かったわ」

そう言って笑顔になる

私は年甲斐もなく照れてしまった

「?どうしたの?」

「いや、何でもない。それより、孟君と合流する予定なのだが、紫さんはどうするかね?」

「そうね。私もついて行くわ」

「では、行こうか」

「ええ」

そう言って我々はその場を立ち去った

side out

「よし、これで、戦況はこちらに向いたな」

階段を下りる途中で戦況を確認したが、こちらが優勢だったのは明らかだった。途中で反転して逃げようとしたチヌークは雪穂ちゃんの手によりすべて落とされていた。

っていうか。ステインガーなんて、あっちの弾薬庫にあったけ? まあいいか

地上の方もMBTが破壊され、BTRや他の装甲車なども抵抗を続けていたがあつという間に破壊されてしまった。残った敵軍は人員

だけとなり、皆降伏したようだ

「孟君」

「郷田さん、お疲れ様です」

そう言つて敬礼する

「ああ、お疲れ様。それにしてもすごかったな」

「何がですか？」

「いや、君がアパッチを落とす所を見ていたんだがね。まさか、銃弾が曲がるとは思わなかったよ」

そう言つて大笑いする。つていうか見えてたの？結構距離、あつたはずなんだけど

「見えていたんですか？」

「ああ、元々、目は良いんだがね。場の慣れ数というか。とにかく銃弾が見えるようになったんだよ」

なるほど、経験の差つて奴か。でも、すごいな銃弾が見えるって

「それはともかく、これからどうする？」

「降伏した敵兵から自分達の基地を教えて貰いましょう。これで、かなりの進展があるはずですよ」

「そうだな。よし、私が指示を出して来よう」

そう言ってその場を離れる郷田さん

「孟、お疲れ様」

「ああ、紫も、こんどは普通の電車を出すとはな」

「ああ、あれも異次元から取り出したのよ。と言っても地獄行きの電車だけどね」

そう言って扇子で顔を隠しながら笑った。

「お〜お〜怖いね〜」

俺も笑いながら言った

「そんな事よりも私と藍は一足先に戻ってるわ。今回は負傷者が出たようだし、人員を集めて来るわ。そうすれば、次の作戦ができるんでしょ?」

「ああ、そうしてもらえると助かる。この礼は必ず、返すからな」

「ふふっ楽しみにしてるわ。じゃあ」

そう言ってスキマの中に入って行った

「さて、後始末をしますかね」

そう言って俺も行動を開始するのであった

とある異変の一日（前書き）

藍様が・・・藍さまがあ———!!!!

とある異変の一日

今日は一日、全員に暇を与えて、休息の一日となった。ある者は人里へ、ある者は河童が住む、妖怪の山や海に行く者までいた

俺は自分の部屋でまったりと寝ていた

〈孟の部屋〉

「グウ〜グウ〜」

この部屋の主はこの時間になってもまだ、お寝むの様だ。そこへ・・・

「孟さーん!!」

ちえんが部屋に来た。どうも慌てた様子だ

「孟さん、孟さん、起きて下さい!孟さ(パン!)!!」

ちえんは孟を起こそうとしたが、孟は枕元の銃でちえんの足元に向かって銃を撃った。非常に怖いな。

「ちえん、うるさいぞ。後、5時間は寝させろ」

「ガタガタブルブル・・・」

ちえんは泣きそうな顔で震えていた

が、孟がかぶっている布団が再び、振らされる。孟は「またか」と思い起きあがった

「おい、ちえん、いいかげんに……………し?」

「めーっちえん、めーっ」

そこには可愛い生物がいた(孟談)

藍が幼文化していたのだ!(笑)

「……………そうか」

孟はそういつと

「夢だな」

再び布団をかぶる

「夢じゃないです!現実逃避しないでください!」

ちえんに突っ込まれた

その後、起きた俺は紫を起こし、居間にて緊急会議を開始する

「で?なんで、藍はちっちゃくなってるのよ」

紫が言う

「分からんね。誰か、最後に藍の姿を見たのはいるか?」

俺が言った

「昨日、私が寝るときに本を読んでもらってましたから、その時は・
・・・」

ちえんが言う

「となると、今朝になって変化したと言う訳ね」

そう言っで全員で外で遊んでいる藍を見る

藍もこっちに気付いたようで手を振る

「ゆーか、つとむ、」

「「・・・にへら」

俺らは顔が緩んだ

「紫様、孟さん、顔！顔！」

「暫くはあのままでもいいんじゃない？」

紫が言う

「だな。」

「待っで下さい！さすがにまずいですよ」

ちえんが言う

「いいのか？ちえん」

「はい？」

「尻尾、モフモフだぞ」

俺と紫は笑いながら言った

ちえんは少し考えた後

「…………ふおおおおお」

その時の想像をしたのか声を上げながら言った

「ちえん、ほどほどにな。」

俺が言った

「それはそうと、藍がちっちゃくなつたと言う事は何かしらの原因があるはずだ。昨日までの藍の行動を洗おう。」

「そうね。孟、昨日は藍と一緒にだった？」

紫が言う

「いいや、俺は郷田さん達と一緒に飛行場の方に行ってたからな。藍とは一緒じゃなかった」

「そう。ちえん、あなたは？」

「私も昨日は人里で寺子屋の方に勉強しに行ってみましたから……」

「そう……藍の予定はどうだったか分かるかしら？」

「そうだな。なんか買い物するとか行って人里と永遠亭？だけ、そこに行くとか言ってたな」

「なるほど……あの医者が原因かしらね」

紫は考えるように言った

「何か、心当たりでもあるのか？」

俺が言った

「ええ、その永遠亭なんだけれど、そこにいる医者はどんな薬でも作り出せる能力があるの、外の世界には無い物まで作り出せるわ」

「ふん」

「私が行ってこようかしら」

「紫様、私も行きます！」

ちえんが言う

「待てよ。そうになると誰が藍の世話をするんだ？」

「孟、お願い」

「はあく分かったよ」

俺は仕方なく了承した

「じゃっ行って来るわ」

そう言っつて紫とちえんはスキマに入っつていった

「さて、どうなることやら」

俺はそう言っつてお茶を淹れて縁側でのんびりと飲んでいた

「ふ、和むね」

俺はお茶を飲みながら言っつた

藍は外でチヨウチヨを追いかけてながら遊んでいた

「っつて言うか。藍がちっちゃくなるほどっつてどんな薬を作っつたんだよ。医者っつてのは分らないね」

「つとむ、つとむ、チヨウチヨ」

藍が捕まえたようっつでチヨウチヨを見せてきた

「お、お、捕まえたのか、すごいな、でも、ちゃんと逃がしてやるんだぞ」

きっと、俺の顔はだらしく見えているだろう。

そんな時だった

「ごめん下さい」

玄関に誰か来たようだ

「はいはい、っと君は？」

そこには女子高生の格好をした女の子がいた。ついでにウサ耳が付いていた

「私は玲仙・優曇華院・イナバと申します。えっと……」

「ああ、俺は戦場 孟だ。紫の家に世話になってる」

「孟さんですね。藍さんはいらっしやいますか？」

「ああ……その事なんだが……」

「？何かありましたか？」

「あゝ居る事は居るんだが……」

「もしかして、ちっちゃくなった……とか？」

「どうして知ってるんだ？」

「私は永遠亭に住んでいるんですけど、昨日、藍さんがいらつしやつて常備の薬とかを買いに来たんです。ですが、その薬の中に私の連れが別の物を混入させまして……」

申し訳なさそうに言った

「そうか……立ち話もなんだ。上がって行くか？」

俺が言った

「いいんですか？」

「ああ、詳しく事情を知りたい」

「分かりました。」

そう言つて玲仙を家に招いた

〈客間〉

「さて、玲仙」

「はい」

「どつという事かな？」

「はい、さつきも言った通り、私の連れが悪戯でなんでもちつちやくする薬を混入させまして、藍さんもそれを飲んでしまったようで」

「ああ、朝起きたら、そうなつてたみたいだな。紫とちえんがスキ

マを使って永遠亭の方に向かったぞ」

「あちらは師匠から事情を聴くと思えますし、大丈夫です。それにしても藍さんは？」

「ああ、庭で遊ばしてる。アレが治るにはどうすればいいんだ？」

「時間が経てば自然に戻ります。それまでは辛抱して下さいますか？」

「ふむ、」

あんなに可愛くなっちゃった藍を見守れるかどうか。いや、普段の藍もかわいいんだけどね。

「分かった。何とかしてみよう」

「ありがとうございます！」

そう言ってお辞儀した

「何、君が悪いわけではない。」

「でも……」

「いいから、気にする事はない」

「分かりました。じゃあ、私は帰りますね」

「ああ、」

そう言って玲仙は帰って行った

「さて、これからどうしようかね？」

そう言って一人愚痴る俺だった

とある異変の一日2

前回のあらすじ、藍が幼女化 大変だ！

〜八雲邸〜

「いや〜平和だね〜」

「ね〜」

俺と藍は縁側で寛いでいる。因みに藍は俺の膝の上に乗って丸くなっている。まるで、猫のようだ・・・狐だけどね

紫達はまだ、永遠亭から戻ってきていない。他の兵士達も休暇を与えているので今、この八雲邸に居るのは俺と藍ぐらいな物である

とても静かだ

「さて、いつになったら戻るのかね〜って言うか藍てこんな小さいときから九尾だったんだ。すげー」

確か、尻尾の数でどれぐらいの地位に居るのが示されるって軍の図書館で見た気がするな・・・

そんなこんなで平穏な一時を無事に過ごせるわけがなかった

「あやや〜？噂は本当だったんですね〜」

「文様、待って下さいよ」

文ともう一人が八雲邸にやって来た

「おいおい、何しに来たんだよ。」

「決まってるじゃないですか。取材ですよ取材。風の噂で藍さんが幼女化したと聞きまして……」

「どっから情報が漏れてんだ？全く、それと隣にいる子は誰だ？初めて見た気がするが」

「あっ申し遅れました。私、犬走いぬはしり 椀もみじと言います。文様の助手をさせて貰ってます」

椀がペコリと頭を下げながら言った

「ご丁寧にも、俺の事は知ってるかもしれないが、戦場 孟だ。よろしくな」

「はい、よろしく願います。」

後ろでは文がカメラを片手に藍の姿を撮っている

「おい、文、何を勝手に撮っている？」

そう言って文の肩に手を置く

「あ、あやや〜？」

「気づかないとでも思っていたのか？そのカメラを俺に渡すのと今晩のおかずになるの　どっちがいい？」

俺はドスの利いた声で文に警告を入れた

「も、もちろん！カメラをお渡しします！」

そう言って敬礼した

「よろしい」

俺はそう言ってカメラを取り上げる

「あゝ私の新聞ネタが」

泣き顔で言っている文、だが、俺はそれを無視する

「まったく」

「あとう、孟さん」

「ん？なんだ、椀」

「藍さん、抱き上げてもいいですか？」

「おう、寝てるからそつと、な」

「はい」

そう言って椀が寝ている藍の事を持ち上げる

「うわゝ、可愛い〜」

そう言って藍の頭を撫でる

「ん〜」

藍は可愛らし声を上げて寝ている

「あつ椛、私にも！」

落ち込んでいた文が手を上げながら言った

「いいですか？孟さん」

椛が俺に聞いて来た

「ああ」

俺がそう言つと椛から文へと移り変わった

「わゝすごい、すごい、可愛い〜」

文も年頃の女の子だから可愛い物には目が無いようだ

「やれやれ」

そう言いながら俺はそのやりとりを見ていた

〜数分後〜

「では、私達はこれで失礼しますね」

文が言った

「ああ、せいぜい狙われないようにな」

「もう、誰に言ってるんですか。では、」

そう言っつて文と椀が去って行つた

「く、クワッ」

藍は欠伸を欠きながら目が覚めた

「おっ起きたか」

「つとむ?」

藍は寝ぼけ顔で俺を見ていた

「全く、後どのくらいしたら戻るんだ?」

その時だった

「うお!?!」

俺の膝元にいた藍が突然、光り出した

小さい体は段々と大きくなり……元の藍に戻った

「ん？私は何をしていたんだ？」

「どうやら、小さかった頃の記憶はないようだ」

「よっ。藍」

「孟、私は何をしていたんだ？」

「ああ、実はな」

「そう言ってこれまでの出来事を話した」

「そうか……それは迷惑な事をしてしまったな」

「いや、そうでもないさ。小さい頃の藍を見てなんか得した気分だしな。それに膝の上で寝ていたからな」

「ええ！？私がか？」

藍は驚いた

「ああ、そりゃあ、もう気持ちよさそうに寝ていたぞ。」

「そうか……」

「そう言って藍は俺の隣に座り」

「おっ？」

今度は俺が藍の膝の上に頭を置かされていた

「ら、藍？」

「お礼だ。私の面倒を見てくれた。な」

そう言うてにっこりと笑う藍

「そうか。じゃあ、お言葉に甘えようかね」

そう言うて藍に身を委ねる

「ふふっ」

終始俺が寝るまでの間、藍はずっと笑っていた

くおまけ

「今、戻ったわ！孟！藍を連れて来て！」

私はあの医者から元に戻る薬を持って来たのだが、肝心の藍と孟が家にいないのだ

「紫さま紫さま」

ちえんが襖の隙間を開けて言ってきた。何かあるのだろう

そう思つて、私はスキマから覗いてみた

「……あらあら、仲が良い事で」

私が見たのは膝枕をしている藍とそれに委ねている孟の姿だった。二人とも気持ちよさそうに寝ていた。藍も元に戻っていたようだ

「紫様、私もあの中に入ってもいいですか!？」

目を輝かせたちえんが言う

「ダメよ。せつかく二人つきりなんだから、もっと気を使わせないといけないわ。さっ行くわよ」

そう言つて再び、スキマの中に入って行く私達だった

第二基地急襲 会議編と準備編（前書き）

いきなりの展開！

では、どうぞ！

第二基地急襲 会議編と準備編

藍が元に戻ってから数日が経ったある日、ある情報が入って来た

く八雲邸 会議室く

俺達は紫に集合を掛けられたため、郷田さんやバートレット大尉などが集まっていた

「何！！それは本当か！？」

郷田さんが立ちあがって言う

「ええ、事実よ。今度の基地は紅魔館の裏手にある山を越えた先になるわ。」

紫が言った

「その情報源はどこからだ？」

俺が言った

「レミリアよ。彼女自身が偵察に行っただって言うし、それに、他からも同じような情報が集まっているからまず、間違いないわ」

「そうか……バートレット大尉」

バートレット大尉に聞いた

「おう、」

「戦闘機の配備は？」

「F - 15が4機 F - 4Eが3機 SU - 27が2機 F - 22
F/Aが1機 後は戦闘機以外だがブラックホーク ペイブロウ
爆撃機としてB - 52が配備されてるぞ」

「そうですか・・・郷田さん」

今度は郷田さんに聞いた

「なんだね？」

「陸上の車両は何日ぐらいで着きますか？」

「そうだな・・・戦車などの重兵器を移動させるのに約3、
4は掛かるだろう。しかも、相手は前以上の大きさとなるのだとした
ら、それなりの武装は必要だろう」

郷田さんが答える

「そうですか・・・紫」

「何？」

「スキマを使って弾薬類は運べるよな？」

「ええ、それがどうかしたの？」

「銃器やら弾薬類は一旦、スキマに入れて紅魔館の方に持って行って欲しい」

「そう……分かったわ。レミリアにも私から話を付けるわ」

紫はそう言って笑顔になる

「悪いな。じゃあ、他に質問はあるか？」

「一つ質問だ」

手を上げたのは大島おおしま護平ごへい陸将補だった。彼は紫の力とは関係ないつまり、郷田さん達と同じように突然、こちらの世界に来た人だ

因みに陸将補とは、自衛隊の中で使われる階級で米国などの階級だと少佐と同じ位になる

「どうしました？大島陸将補」

「先に、動かすとしたら、どちらになる？それによって戦況が変わると思うのだが……」

「ああ、それは、空軍が先ですよ。レミリアとかの情報と照らし合わせて照合が一致したら爆撃を行います。それに伴って陸軍が動いて装甲部隊で敵の注意を引きながら攻撃していきます。その後はヘリボン部隊によって司令部の制圧を行います。」

「なるほど、つまりは空軍の攻撃からが鍵 となる訳だな」

陸将補は納得したように言った

「ええ、他に質問はあるか？」

.....

「よし、作戦準備に入れ！」

そう言うと、紫と藍と俺以外の人はすべて外へ出て行った

「さて、俺も準備をしますかね」

「待って、孟」

紫が呼びとめた

「なんだ？」

「一応言っておくけど、決して死ぬようなことは考えないでね？お願いだから」

「もちろんさ。犬死なるような真似は絶対しない。それに.....」

「？」

「こうして、紫や藍、ちえんとの楽しい思い出ができないからな」

そう言ってニカッと笑う俺

「あれ？なんか、死亡フラグが立ったような.....」

「おい、うるさいぞ。作者」

「へいへい、」

「そうよ。作者は黙って私達の事を書けばいいのよ」

「おい、出番数を減らすぞ？」

「すみません！」

二人は作者に謝った

「分かればよろしい」

「さて、早速準備をしますかね」

「そうね。藍、手伝って」

「分かりました」

そう言っつて俺達も部屋を出た

「孟の部屋」

俺は一旦自分の部屋に戻り、戦闘服に着替える。そして、武器庫に向かった

「武器庫」

「さて、今回も龍神には活躍してもらおう。」

そう言つて龍神を持ち出す。あつ因み龍神とは tank killer を孟と河童の独自の改造を施したものである。総弾数と威力、弾の口径まで変えることに成功した

弾は12.7mmから16mm弾へと変換した。この弾は人類史上類を見ないでかさの弾である。そのため、普通の弾であつても手甲弾より威力が上なのだ。

人類が持つ銃器の中では最強の部類に入るのではないかと思われる代物だ

「頼むぜ。お前の初陣だ」

そう言つて龍神を背負う。他にはイーグルとソウドオフショットガンこと 燕つばき（命名：孟）を持ち出した。

ソウドオフショットガンとは狩猟用の散弾銃を銃身とストックを切り詰めた物でサイズはハンドガン並みに小さい

非常に強力ではあるが撃つ度にリロードしなければならぬ

「さて、行くとしますかね」

そう言つて俺は武器庫を後にした

第二基地急襲 会議編と準備編（後書き）

「おい、作者」

「なに？孟」

「いきなり介入するな。読者が困るだろう」

「ええ〜？」

「今すぐ、銃殺されるのと張り付けにされるのどちらがいい？」

孟は怒っているようだ

作者は逃げ出した がすぐに捕まった

「いやだー！ー！！銃殺はいやー！ー！！」

「大丈夫だ。極東裁判にて判決を決めるから」

「ちよっ！ー！それは全力で拒否を願いたい！ー！」

「大丈夫だ。お前には黙秘権がある」

ピチューン！

作者は消えました

第二基地急襲 移動編

（八雲邸）

「急げ！急げ！時間は待ってくれないぞ！」

大島陸将補が大声で言う

周りでは戦車やら装甲車やらが準備を整えていた。もちろん、前に出て来た迎撃用指揮車も今回は一緒に同行するようだ

俺は紫がいたので近くに寄った

「あつ孟」

「よう、どうかしたか？」

「私達はどうすればいいかなって思って、ただ、何もしないのが歯がゆいって言うか……」

そう言っって苦笑いする紫

「まあ、そうだな。こっちの世界だとスペルカードだっけ？そんなルールがあるからかもしれないが、外の世界じゃあ本当に殺し合いみたいなものだからな。それは仕方ない事さ」

「そうなんだけどね」

「ん〜じゃあ、今回はあの指揮車に乗ってればいいさ。そしたら

状況もある程度は分かるかもしれないし、」

そう言っ指揮車を指さす

「そうね。ここから先は孟達の世界のやり方だしね。藍とちえんも連れてっついていいかしら？」

「ああ、ただし面倒はそっちで引き受けてくれ。俺も前線の方に行くからな」

「分かったわ。藍達にもそう伝えてくる」

そう言っ離れていく

それと同時にホープがやってくる

「孟、こっちの作業は終わったぜ。後は命令あるのみだ」

「よし」

そう言っ俺は皆の元に行った。全員車両の前で整列している

「皆！ここから先は前の戦闘よりも厳しい物となる。もしかしたら死者が出てしまつかもしれない！それでもやり遂げてくれる者は一歩前に出て欲しい！」

俺が言った。回りくどい言い方よりもこう言っシンプルな方が士気が上がるっ孫子に書いてあっような気がする

皆は無言で一歩前に出てくれた。それだけの覚悟があるという事だ

ろう

「全員、乗車！」

そう言うのとそれぞれの車両に乗り込んだ。俺もハンヴィーに乗り込む。同乗者はホープ、雪穂ちゃん、そして、ゲイリーだ

ゲイリーは紫が連れて来た兵士で、機銃の名手だとの事、彼に機銃を持たせれば右に出る者はまず、いないという

「ゲイリー機銃の方は任せたぞ」

「OK、ツトムサン、マカセテクレヨ。このウジ虫野郎が」

最初にあつた時はなぜ、カタゴト？と思ったが、ゲイリーは優秀な教官でもあるという、そのため、日本の自衛隊に本場アメリカの海兵隊の訓練を受けさせるために日本語を勉強していたとの事

しかも、話す言葉は片言なのに、罵る言葉などはしっかりと発音できてるからビックリしたよ。全く

「よし、全車、進行を開始せよ。航空部隊も作戦を開始せよ」

そう言って無線を切る

（幻想飛行場）

バートレット視点

「よし、孟からGOサインが出た、出撃準備をしる！」

そう言って待機していたパイロット達に呼びかける。

やっぱり、河童はすごいな。短期間でミサイルの開発ができるなんて、そのおかげで戦闘機に載せる標準のミサイルも装着できるようになっていたからな。他にも無誘導爆弾や大型の飛行機まで作り出せるんだから

さっき、河童の方からAC-130が届いたばかりだ

AC-130とは通称ガンシップと呼ばれる大型のプロペラ飛行機だ。本来なら輸送機として使う所をあえて、援護型にして、前線の兵士達の助けとなっている

武装は20mmバルカン砲を二門 40mm機関砲を一門 105mm榴弾砲を一門備えたスペクターというタイプを採用している。

「隊長、こっちは準備完了だぜ。」

俺の隊の二番機であるカザフ曹長が言った

「了解、他は大丈夫か？」

「ああ、グリムとかも準備はできたらしいぜ。」

「そうか。分かった」

そう言って俺もハンガーの方に移動し始める

（ハンガー）

ハンガーには前回より多くの戦闘機やヘリ、装備品などが搬入されており設備も充実してきた。が、やはり、現実世界よりはまだまだ、足りない状態だ

俺が乗るF-4E戦闘機も整備兵が調整している所だ。

F-4Eは元々対地専用として、造られた戦闘機だが改造を施して火器能力が向上し航空戦での戦闘力を上げることになった成功した戦闘機である。

この機体の愛称はファントム（亡霊）である。

「どうだい？こいつの調子は」

俺が言った

「あっ大尉、上々ですよ。久々に動ける感じを読み取ったのか全機能オンラインです」

整備兵が言う

「そうか。準備ができ次第、すぐにでも出る」

「分かりました」

そうやって俺はハンガーを出た

（滑走路）

滑走路ではすでに何機かの戦闘機がスタンバイしていた。その中に先程、紹介したAC-130の姿も見えた。

「あいつまで行くのか。こりゃあ、思ったより楽かもな」

「いいや、そうでもないさ。バートレット大尉」

「おう、長官じゃないですか。どうしてこんな所に？」

大尉に話しかけてきたのはベラム長官であった。

この幻想飛行場の司令官であり、バートレットの親友でもあった

「今はそんな言い方をしなくていい。」

「そうかい、ベラム」

「はっはっはやっぱり、君はそっちの口調が似合う」

「なんだよ。それじゃあまるで普段からだらけてるようつに見えるだろつが」

「冗談だよ冗談、それにしてもこんな世界に来てまで戦争があると
はな。正直、悲しいもんだね」

ベラムが言う

「まあ、絶対平和なんてものはないからな。どこにでも争いは落ち
てる物さ。だけど、今回は意味合いが違ってくるだろつな」

「どづいつ事だ？」

「簡単、相手は国無き軍隊だ。そして、こっちはこの幻想郷という守るべきものがある」

俺が言った

「ふっ君には感服するね。この戦いが終わったら、一杯やるうじやないか。」

「いいねえ〜もちろん、ベラムの奢りだろ？」

「・・・気分次第だな」

そう言っつて離れていく

「な〜に気分次第だよ。まあいい、この戦い乗員が生き残りりやあ万々歳だ」

そう言っつて俺も離陸の準備を始める

（バートレットout）

俺達は八雲邸を出発し中間地点であるレミリアの館まで進行していた。途中、空を飛んでいる霊夢と魔理沙と会った

「あら、孟じゃない。どうしたの？そんな恰好して」

霊夢が言った

「ああ、例の奴らが現れたんでな。その区域まで進行中だ」

俺が言った

「ふくん、場所は？」

「紅魔館のさらに奥」

「なるほどね。何か手伝える事はある？」

「ん〜そうだな。人里の皆には近づかないようにしてくれないか？
と言ってもその前には紅魔館もあるしな」

「そうね。でも、一応言っておいてあげるわ。」

「助かる」

「じゃあ、頑張ってるね。たまには神社の方にも寄りなさいよ？」

霊夢が言った

「OKOK、この仕事が終わったら、お茶をたかりに行くさ」

「そう。待ってるわ」

そう言って離れていく霊夢、魔理沙が俺達の戦闘を見てみたいとか騒いでいたが、霊夢に強制的に連れ去られて行った

「さて、一眠りでもしますかね」

そうやって俺は眠りの体制に入った

「ちっ、」

第二基地 強襲編（前書き）

すっかり、更新が遅れてしまった・・・頑張らないとな

第二基地 強襲編

あれから、俺達は八雲邸を出発しレミリアの館まで来ていた。この先には例の奴らが待ち構えている。いわば、前線基地みたいなものだ

（紅魔館）

「よう、美鈴、珍しいな。起きてるなんて」

俺はハンヴィーを降りて門に居る美鈴に話しかける

「うわ〜ん！あなただけですよ〜！孟さん〜」

美鈴は泣きながら言った

「お、おい、どうしたんだ？美鈴」

「ヒック、みんな、私の事、中国中国って言うから本名で呼ばれる機会が無くてどごそのMADでも中国扱いされてますし……」

「ああ……」

妙に納得してしまう俺

何で、納得するかって？そりゃあ、あれだ。パソコンで見たのよ。前に紫が外の世界から持ち出してきたパソコンを繋げてネットも見られるようになっていたからな。その時に見た

「ま、まあ、そこまで気にするな。俺はちゃんと本名で呼んでやる

からさ。これからも」

「ヒック、本当ですか？」

美鈴の潤目&上目遣いが発動！

(うっ！か、可愛い……)

「あ、ああ、本当だとも、それより美鈴、レミリアは中か？」

「あっはい、と言っても紫さんが持ってきた外の世界の武器をまじまじと見学してますよ」

そう言っって門を開ける

「そうか。分かった」

そう言っって俺達も中に入る

「うわ〜！すごいわね〜！」

そこにはたくさんさんの武器を見ながら目を輝かせている吸血鬼姉妹がいた

「おいおい、レミリア、前にカリスマがどうこう言っってなかったか？見事にbreakしてるぞ。後、咲夜、鼻血が出てるぞ」

「え！？孟！？」

「あゝ孟だ！」

レミリアは驚き、フランは俺を見て言った

「どうしたの？孟」

フランが近づいて言う

「いや、ここら辺で武器の点検やら補給を行おうと思ってな。レミリアにはその話が言ってるはずだ。」

「え、ええ、そうよ。フラン 私達の館の裏にある山の向こうに例の奴らがいるらしいわ。孟にはその排除を行いに来たのよ」

レミリアが言う

「それって私が捕まった時の連中と同じ？」

フランが言う

「ああ、そうだ。しかも、今回はあれよりでかいからな。予想以上に苦戦が強いられるかもしれない。レミリア」

「何？」

「でかさだが、前の基地と比べてどうだった？でかいとは聞いてるが」

「少なくともあれの5倍はあるわね。基地の中には孟が前作ってた飛行場なんてものもあるし、その隣には外の世界の兵器がたくさんあったわ。」

「他に特徴的な物はなかったか？」

俺が言った

「そうね……あつ中央の所に何か高い建物があったわちょうど、この時計塔のような感じのね。」

そう言ってレミリアは紅魔館の時計塔を指さす

「そうか……何かしらの施設かも知れんが……分かった。貴重な情報をありがとう」

「いいのよ。代わりにとはなんだけど、今度、霊夢主催の宴会があるからあなたも来なさい。」

「分かった……じゃあ、必ず戻んなきゃあな」

そう言って笑う

「ええ、必ずよ。そうだ、これを持って行きなさい」

そう言ってポケットから何かを取り出すレミリア

「これは？」

手渡されたのは赤い宝石であった

「それは、パチエに頼んで特別に作ってもらったお守りよ。魔力の働きがあるからある程度の攻撃は防げるわ」

「そうか。ありがたく頂くよ。」

そう言って首に巻きつける

「よく似合ってるわ」

「サンキュー、よし、全員！武器弾薬のチェックをしろ！準備が整い次第、出発するぞ！」

「」「」「了解！」「」「」「」

そう言って兵士達は慌ただしく動いて行

数分後、準備が整ったので俺達は紅魔館を出発する。この山の裏に奴らの基地がある。俺は先行して先に奴らの基地の近くの高台に着した

く高台く

「おし、ここならよく見えるな。」

そう言って双眼鏡を覗く

「おーおー、手強そうな物だねーレミリアの情報通り時計塔みたいなものがあるがぁりゃあ一体なんだ？」

レミリアの言う通り基地の半分くらいは滑走路ができており、その反対側には戦車やら装甲車やらがたくさん駐機してあった。そして、真ん中には大きな時計塔みたいなものがあつた。外見的にはイギリスの時計塔によく似ている

「あいつは、なんだろうな？全部隊、現状を報告せよ」

無線で連絡を取る

「こちら、機動隊、もうすぐ入り口付近です」

「同じく、戦車隊及び装甲車も入り口付近です」

「こちら航空隊、攻撃態勢で待っている。指示をどうぞ」

「こちら戦闘指揮車、準備は完了しています」

「よし、航空隊、先鋒は任せた。各自、航空隊の攻撃の後、行動を開始せよ。」

俺がそう言つと全員「了解」と帰つて来た

「さあ、戦争の始まりだ。」

そう言つと上空を戦闘機が通つて行く、量産されたF/A-18だ。それが、ミサイルを発射した。同時に基地から警報が鳴り響く、基地内に居る兵士達も慌ただしく動いている

その後も航空機から爆弾やミサイルが降り注ぐが滑走路はまだ、無

事だったみたいだ。その証拠に敵さんも戦闘機を出した

「あいつは……ミラージュ2000か。おろ？後ろのは……
・零式艦上戦闘機だと？なんで、あんな物まで持ってたんだ？」

何故か、第二次世界大戦で活躍した零式艦上戦闘機 通称零戦と呼ばれるプロペラ式の戦闘機が離陸してきた

「こちら！機動隊、敵も反撃を開始してきました！」

「よし、冷静に対処しろ。完了しだい、中に入って占領を開始しろ」

「了解！」

そう言って無線を切る

「さてさて、あの時計塔は何か意味があるのかな？あんな攻撃を受けても傷一つ付かないなんてな」

そう言って時計塔を見る。

時計塔には爆弾やミサイルが直撃しているのに破損どころか傷が一つも付いていないのだ。これはさすがにおかしいな

「おーおー、敵さんも反撃してきたな。一部、妖怪らしき奴もいるけど、まあ、敵である事に変わりはない。そうだろ？紫」

「ええ」

後ろを振り向くと紫と藍が立っていた。スキマを使ったのだろう

「それにしてもここまででかいとはね」

紫が言う

「ああ、このでかさは通常の基地に匹敵するからな。よくばれなかつたものだ」

俺が言った

「ん？おい、孟、時計塔の様子がおかしくないか？」

藍が気づいた

振り向くと時計塔の時計の部分が光り出していた。何なんだ？

「こいつは……（ビカーッ！！！！）！！！！」

俺が言いだした時、丁度、空に向かって光が一直線に走って行く

「孟！聞こえるか！」

無線からバートレットが叫ぶ

「どうしました！？大尉」

「今の光は光学兵器だ！光を被った奴らだけ落ちて行った！地上にも警告しておいてくれ！できるならあの兵器を止める！」

「なんですって！？分かりました！航空隊は一時、避難して下さい

！被弾した戦闘機は飛行場に戻って下さい！」

「了解！準備ができ次第、また、戻ってくる！それまでにはあれを片づけておいてくれよ！」

そう言って無線を切る

「まずいな。光学兵器だと？無茶苦茶だな」紫

「何？」

「戦闘指揮車の方に戻れ、合図があったらすぐにでもスキマを使って俺の所に来て欲しい」

「分かったわ。気お付けてね」

そう言ってスキマの中に入る紫

「さて……どう攻略しようかね……」

そう言って愛銃である龍神を持ち、丘を掛けて行く俺だった

第二基地 強襲編2

俺らは奴らの拠点である第二基地を強襲した、が、奴らはどこから持ち出してきたか分からないが、光学兵器を持ち出してきた。

光学兵器とはいわゆるレーザー兵器だ。現代でも研究が進められている兵器ではあるが、まだ、実戦配備にまでは至っていない

そんな中、俺は郷田さん達の戦車隊に合流する

〈戦車隊〉

戦車隊には90やエイプラムズの他ににとりたちが作りだした戦車も入れられている。パットン戦車というベトナム戦争時に使われた戦車だ。だが、90やM1に比べて攻撃力・装甲と共に劣る兵器である

「郷田さん！」

俺が呼びかける

「おお、孟君」

「どうかしたんですか？」

「いや、我々も基地内に入ろうとしたのだが、入口付近に対戦車砲やらランチャーやらで塞がれてしまったな。立ち往生してしまっている。先に入った歩兵隊も中で孤立になってしまっってな猛攻を受けてるみたいだ」

郷田さんが説明してくれた

「となると、あそこの入り口をふっ飛ばせばいいんですね。」

そう言って入り口付近を見る。

入り口の両脇にはよろしく！と言った感じに対戦車砲が設置されているまた、監視塔には対戦車兵が待ち構えておりいつでも撃てると言った感じだ

「こりゃあ、厄介ですね。じゃあ、先陣を開いてきますよ。対戦車兵の方は任せてくれますか？」

俺が言った

「それはいいが、どうするのかね？」

「なに、狙撃してきますよ遠距離から」

そう言って龍神を抱える

そして、俺はまた、監視していた丘に昇る

く丘く

「よっし、ここからは丸見えだ」

下を覗くとさっきの入り口と監視塔が見えていた

俺は伏せ撃ち状態に入り、弾を装填する

「風は・・・無風・・・絶好の狙撃日和だぜ。こちら、孟、指揮車聞こえるか？」

俺は無線で呼びかける

「はっこちら、指揮車であります！どうされました？孟隊長」
兵士から答えが来た

「紫に変わってくれるか？」

「分かりました！紫さん！孟隊長から無線が来ました！」

そう言うと同僚側で走ってくる音が聞こえた

「紫よ。どうしたの？孟」

「ああ、実はな・・・」

そう言うて入り口付近の説明を粗方してしまう

「了解したわ。藍も連れて行くわよ？」

「ああ、そっちの方がやりやすいだろう。頼んだぞ」

そう言うて無線を切る

「さて・・・」

そう言って射撃体勢に入る。スコープで覗くと敵兵の姿が現れる

「rock・n・roll」

引き金を引くと銃撃音と共に対戦車ライフル弾が勢いよく飛び出す。弾はまっすぐに飛んで行き、対戦車兵の頭をブチ抜いた。弾の勢いは衰えず後ろにいた兵士に直撃する

俺はすぐさま反対側の監視塔に向け、もう一発撃った。こちらも同じく一人目は頭をぶち抜いて後ろにいる兵士にも当たった

「よっしゃあ、命中、やっぱ腕はいいな。俺」

自画自賛する俺だった

「孟、こっちも終わったわよ」

紫からも連絡が来た

「よし、急いで退避してくれ。また、連絡する」

そう言って無線の周波数を郷田さんに向けた

「郷田さん、もう大丈夫ですよ。思いっきり吹っ飛ばして下さい」

「待ってました！」

そう言って無線を切る、直後、90を先頭にエイプラムズなどがや

って来て、頑丈そうな門を戦車砲にて吹っ飛ばした

「よし、我々は歩兵隊と合流する」

「分かりました。俺はあの時計塔の方を調べてきますね」

そう言っただけは別行動にて時計塔を目指す

（基地内）

「うむ、近くで見るとでっかいな」

俺は独り言のように言った。あれから、無事に時計塔まで着く事が出来た途中隠れていた兵士達に襲われそうになっていたが、CQCで撃退したというより気絶させた。一応、警戒のためサイレンサー付きのMP5にしてある

「えっと、ここが入り口か。なんか、質素だな」

扉は嚴重にしてある物かと思いきや木製の扉だった。

「馬鹿なのか。資金不足と言ったところだろう。さて、入るか」

ギョーという木の扉独特の音を出しながら開いて行く。中は真っ暗だったのでよく見えない

「さてさて、何が待っているんだろうか……」

そう言いつつ俺は一人、中へと入って行った

く時計塔内く

「ふえく中はまるで違っじゃないか」

俺は周りを見渡しながら言った。外では未だに銃撃音や砲撃音が聞こえてくるが、そんな事は気にしない。なんせ、爆弾やミサイルでさえ効かないんだからな、この時計塔は……

そして、驚くべき事には機械がびっしりと詰っていた。外見はレング造りなのに中は最先端の機械でいっぱいだった。きっと、光学兵器用の機械だろう

俺はそのまま時計がある頂上まで歩いて行く

く時計塔頂上く

「おいおい、何だこりゃあ？」

俺は目の前の物を見て言った。

そこにはでっかい機械の塊があった。その先にはレーザーを出すであろう棒がそびえ立っていた

「はくこんな兵器は初めて見たぜ。」

「そうかい。それは光栄だね」

俺が後ろを振り返ると一人の男が立っていた。格好は旧ソ連軍の服装であった

「あんたは？」

「私はセルゲイ・ボルルビッチだ。階級は大佐だ」

ハンドガンを構えながら言った

「で？私が名乗ったのだから君も名乗るのが道理というと言っ物だが？」

セルゲイが言った

「銃を構えながら言う事か・・・まあいい、俺は戦場 孟だ。日本陸軍第25連隊所属だ。階級は軍曹だ」

俺は愚痴りながらも名乗った

「フム、君が報告で聞いていた。孟か。中々いい目をしてるな。戦士の目だ」

「あんがとさん。で？あんたは俺達にとって敵となる男か？」

「そうだな。この基地はあるお方からくれたものだ。つまり、私が司令官となる」

「そうか。で？戦局はどうみる？」

「そうだな。制空権は確保できたが、陸の方がな。やはり、急性のチームでは無理があると言っもだ」

「ふん、中々鋭いな。それとあんたが言っあるお方ってのは誰の

事だい？」

俺が言った

「それは言えんな。私もそこまで馬鹿ではない。それでは、私はこれにて失礼させてもらうよ。そうそう、この基地は君にくれてやる。好きなように使っがいい」

そう言ってセルゲイは立ち去ろうとした

「待てよ。俺が何もしないとってんのか？あ？」

そう言っつてイーグルを構える

「ふむ……」

セルゲイはそのまま立ち去ろうとした。俺は警告ついでに一発撃つたのだ……が

「甘いな……」

そう言っつてセルゲイはそのまま振り返って撃ってくる。弾はまっすぐ飛んで行き……俺の撃った弾を弾いた

「何!？」

俺は驚いた

「ふっふっふ、いい腕をしているがまだまだ、足りんな。では失礼させてもらうよ」

そう言ってセルゲイは闇の中へと消え去った

「セルゲイ……ポルルビッチ」

俺は誰もいない部屋で一人呟いていた

第二基地 強襲編2（後書き）

ついに出ました。親分格が！ですが彼が黒幕ではないようです！—
体黒幕は誰なのか？そして、セルゲイはどんな意図で孟の前に現れ
たのか！？まだまだ、謎が大きいです。

ではでは

宴会

俺らは、第二基地を急襲して奪還する事に成功した。そこで、セルゲイと言う敵と遭遇した。やはり、誰かが裏で操っているようだ。それに奴の格好は旧ソ連兵装だった。と言う事は社会主義的な奴らなのだろう。それに一般兵士のほとんどはナチスドイツ兵の格好だった

〜第二基地〜

「あら〜結構広いわね〜」

基地にやってきた霊夢が言った

「そうだろう？これなら、大方の装備やら兵器は収まるからな。紫にも迷惑をかけなくて済むよ」

俺が言った

戦いが終わった後、俺らは第二基地に引越しをしていた。おもに八雲邸に置いてあった兵器や武器をこの基地に移動させた。俺は自由に動けるようにこの司令官にはなっていない。司令官は郷田さんだ。

因みにあの光学兵器も使えるかと思っていたが、実験してみた所うんともすんとも動かなかった。なので、今はただの時計塔に成り下がっている

「それで？あんたはどこに住もうって訳？」

「俺は今まで通り八雲邸に住むさ。藍に離れないでって懇願されたからな」

苦笑いで言う

「あらあら、好かれたわね幻想郷最強の妖獣に」

霊夢が笑いながら言う

「嬉しいもんさ。まあ、かと言う俺も藍とは離れたくなかったからな。」

「そう………」

そう言う俺らは基地内を歩いて行く

「あっそうそう。孟」

「なんだ？」

「今日の夜は予定ない？」

「ああ、基地内の整備は郷田さんに任せてあるし、俺はなんの職も付いてないしな」

「じゃあ、私の神社で宴会やるから来なさいよ。他にも集まるし」

「どついう宴会なんだ？」

「さあ？全部魔理沙が幹事をやってるから分かんない。私は準備を任されてるから」

「そうか。分かった。何時ぐらいに行けばいい？」

「そうね・・・大体、7時ぐらいに来てくれていいわ」

「分かったよ」

そう言つて引き続き基地内を案内する。その後、霊夢は神社に帰つていき俺は基地内の車庫に行つて自分専用のハンヴィーを取りだす。最初は一台ぐらいしかなかったハンヴィーも今では十数台にまで膨れ上がった。これも全部にとり率いる河童たちのおかげである

一応、俺専用のハンヴィーも紹介しておこう

〈孟専用ハンヴィー〉

特殊装甲板を車体全体に取り込んでおり、多少の銃撃と爆発による耐久度が上がっている。上部の屋根にはガード付きの機関銃が備わっており、M2キヤリバーを装着している。また、従来のハンヴィーより、燃料の消費量も抑えられており簡単にはガス欠しなくないようになっている。荷物の増加量も格段に上がっている

とまあ、こんな感じだろう。全部、俺が考えて改造した物なので失敗はまず無いといつていい。そして、俺はハンヴィーに乗って基地を出た。

〈紅魔館前〉

俺は、そのまま紅魔館の前に到着する。霊夢からの伝言でレミリア達も宴会に参加するそうなので一緒に連れて来て欲しいだそうだ。門番である美鈴はいつも通り寝ている

「美鈴、寝てると咲夜にやられんぞ」

そう言っって頭を叩く

「んにゃ！？ふぁい寝てまれんよ」

「おいおい、明らかに寝てただろう？」

「孟さん、私はこう見えても寝ている振りをしていただけです！」

そう言っって敬礼する

「ふ〜ん、そうかそうか。と言っ訳だ。どう思う？咲夜」

そう言っって紅魔館のメイド長を呼ぶ

「何言ってんですか？咲夜さんなんか「私がどうしたっての？」あ、あれ？さ。咲夜さん？」

美鈴が振り返るとそこには紅魔館の主レミリアとその妹フラン、それにメイド長である咲夜が立っっていた

「さあ、覚悟はできてるわよね？」

咲夜は笑っっていた否目は笑っっていなかった

「ま、待って下さい！これにはアッ……！！！！！！」

美鈴はログアウトされました

「全くもう、ごめんなさい孟、変な所を見せてしまって」

レミリアが言った

「いや、もう慣れた事さ」

「孟！これ何！？」

フランがハンヴィーを見ながら言った

「ああ、これは車と言って外の世界にある乗り物だ。歩きより速く目的地に着けるぞ」

俺が説明した

「へ〜そうなんだ！乗ってもいい？」

「ああ、もちろんだ。二人も乗ってくれ」

「「ええ」」

そう言つて三人はハンヴィーに乗り込む。美鈴は尻にナイフが刺さつて気絶していた。大丈夫か？

「よし、出発だ」

そう言つてハンヴィーを博麗神社に向かわせた

〔博麗神社〕

俺達は博麗神社に無事に到着した。え？階段をどうやって昇つたの
かつて？簡単だよ。ヘリを呼んで輸送したんだよ。皆乗つたままにな

「いらつしゃい。孟」

霊夢が迎えた

「おう、時間通りだろ？」

「ええ、と言つても始まつちやつてるから好きに飲んでちょうだい」

「ああ、そうさせてもらおう。それと、紫とかは来てるか？」

「ええ、奥の方に居るわ。それじゃ」

そう言つて霊夢はレミリア達とどこかへ行つたみたいだ。俺は奥の
方へ行つた

「あら、孟」

「あつとむだ」

そこにいたのは紫と藍だったのだが、藍は完全に酔つた状態だった

「え〜と、紫、説明頼む」

「ええ、暫くはここで飲んでたんだけどね。藍はあなたが来るのをずっと楽しみにしてたみたいでつい、お酒が入っちゃったみたいなのよ。で、この状態って訳」

紫が説明する。藍は俺の膝の上に頭を乗せてごろんごろんしていた。こんな状態の藍は初めて見たので驚いたが、可愛いもんだ

「そうかそうか。」

「つとむ〜きす、しよ〜」

と酔った状態で上目ずかいをしてくる藍様

「「!」」

「ら、藍?」

紫は慌てていた

「え〜とだな〜藍、少し抑えようか。ほら、水」

そう言っただけ近くに有った水を藍に渡す

「ゴキユ、ゴキユ」

そう言っただけ飲み終わる藍、口から水が垂れてより一層艶やかな表情を見せる藍

思わずドキッとしちゃったぜ

「藍、ごめんなさい！」

そう言っつて紫は手刀をかました

「うっ！？」

藍はモロに食らっつて気絶してしまつた

「はーっはーっ」

紫は肩で息をしていた

「あゝまあ、気を取り直して飲もうか。紫」

俺が言つた

「え、ええ、そうね」

「それじゃあ、乾杯」

「乾杯」

そう言っつて酒を飲む

「はゝ宴会つてこんな物なのか？」

俺が言つた

「そうねゝまあ、霊夢と魔理沙がやるから私とかはそれに便乗する

ような感じだしね。珍しいと言えば藍がこんなに酔っちゃってことかしらね〜」

頬を赤く染めていう紫、藍は俺の膝元で寝て（気絶）いる

「はあ〜そうなんだ。藍がね〜」

そう言っただけ俺も酒を飲む

「まあ、面白い事だから良いんだけどね。実際慌てたけど」

「ははっそうか。」

そう言っただけ外から歓声が聞こえた。俺と紫は外に出た

（神社境内）

外では妖夢が刀を使った一発芸を行っていた

俺は近くにいた霊夢に話しかけた

「霊夢、何やってんだ？」

俺が言った

「ああ、なんか魔理沙が一発芸しようぜとか言って始めちゃったのよ。まあ、楽しければいいんだけどね」

「ふ〜ん、そうかそうか。」

そう言っつて俺と紫は縁側の腰掛ける。その間にも酒を飲んでいた

「おっ！孟じゃんか！孟！」

魔理沙がこつちに気が付いたようだ。ていつか今、気が付いたのかよ？

「よう、魔理沙」

俺は手を上げて言っつた

「孟、何か面白い芸は持ってないか？今、一発芸をやってるんだぜ
！」

近寄つた魔理沙が言っつた

「うーん、そうだな、俺が使えるのは銃を使った一発芸だけだな。
それでもいいってんならやらならない事もないぜ？」

「本当か！？是非やつてくれよ！」

「よっしやきた。ちよつと準備が必要だから他に回してくれないか
？」

「分かつたぜ！準備ができたなら私に言っつてくれだぜ！」

そう言っつて離れる魔理沙

「孟、何をするの？」

紫が聞いて来た

「ん？まあ、見てのお楽しみってやつさ」

そう言っつて俺は無線機を取り出して連絡を取った

数分後、博麗神社上空に一つの影が通る、C-130だ。米軍などで使われている現代では珍しいプロペラ型の輸送機だ

「おっ来た来た。スモークつと」

そう言っつて俺は緑のスモークを炊く

すると、後ろのハッチから何かが出て来てスモークの炊いた場所に着陸した。

「何を持って来たのよ？」

霊夢が言った

「まあ、一発芸用の道具さ」

「……どうみても道具って感じしないけど？」

「まあまあ、そこは御愛嬌って事で、魔理沙、用意が出来たぞ」

「おっ待ってました！皆！次は孟が一発芸を行っぜ！心して見ろよ！」

魔理沙がそう言っつと皆が俺の方に向いた。緊張するぜ

「え〜では、これから戦場孟による一発芸を行います。まずはこれをご覧あれ！」

そう言って木箱を蹴る。すると、板部分が外れて中身が出た

中にはこれでもかって言うぐらいの銃火器が揃っていた

「孟、これ全部外の世界の物よね？」

紫が言った

「その通り、ここにあるすべての銃は外の世界にあった物だ。じゃあ、一発やってみせようか。この中で力が強い奴っているか？」

俺が言った

「じゃあ、私がやるよ」

そう言って出てきたのは小柄の女の子だった。いや、鬼だった

「え〜と、君は？」

「私は伊吹^{いぶき} 萃香^{すいか}だよ！よろしくね！」

「ああ、よろしく、じゃあ、萃香、この鉄製の円盤を投げてくださいか？」

そう言ってクレー射撃用の円盤を渡す

「良いよ。これを投げればいいんだね？」

「ああ、そうだ。投げるときになったら叫んでくれ」

「分かったよ」

そう言つて定位置に着く萃香

「じゃあ、俺は……」

そう言つて武器箱からバレットXM103を取り出す、こいつは米軍で開発中の対物ライフルだが威力が化物級なので主力戦車以外の兵器なら大抵の物は破壊できるとの噂が立つライフルだ

「まゝた、でっかい物を出したわね」

霊夢が言つた

「じゃあ、今から萃香が投げる円盤を見ててくれ。俺がその円盤を撃ち落とすから」

そう言つた瞬間、周りがザワザワと騒ぐ、そんな事が出来るのかと言つ事だろ。今から見せてやる

「じゃあ、萃香、投げてくれ！」

「あいよー！それ！」

萃香は思いっきり円盤を投げる。円盤は勢いよく上空に飛んで行く

宴会2

俺は博麗神社にて開催される宴会に来ていた。そこで、一発芸を披露する羽目になったのだ。

「これで、終わりっつと！」

そう言っつて俺は最後の円盤を破壊する

「「「「「わぁー！！！！」「」「」「」

その場にいた参加者から拍手を受ける。俺はその場でお辞儀をした

「やるじゃない。孟」

霊夢が言った

「まあ、朝飯前だな。こんなこと」

「いや、すごかったぜ。孟、てことでこれにて一発芸は・・・」

魔理沙が終了と言っつ前に俺が待ったを掛けた

「待った。魔理沙、せっかくだ。もう一つ、見せよう」

俺が言った

「あれ以外にも何かあるのか？」

「ああ、今やった奴は外の世界でもよく行われている事なんだ。競技としても有名だしな」

「そうなのか。で、すぐにできる奴なのか？」

「ああ、霊夢、リンゴか何か球体の奴はあるか？」

「え、ええ、あそこの机に果物があるけど」

そう言っただけで霊夢が指さした方向には長机が置かれており、そこには様々な食糧が並んでいた。俺はそこまで行くとリンゴを一個持って元の場所に戻った

「一体、何をやるつもりなの？」

霊夢が言った

「これからやる事は俺が訓練に訓練を重ねた一発芸だ。正直言ったら危険だ」

そう言っただけでザワザワと周りが言う

「この技には助手が必要なのだが、誰か希望する者はいるか？」

そう言っただけで静かになってしまった。当り前だろうそんな危険な事を進んでやる奴なんてまずいない。暫くの静寂誰も上げないと見た瞬間

「じゃあ、私がやらせてもらおう」

そう言っただけで手を上げたのはさっきまで気絶していた藍だった。

「藍、大丈夫なの？」

紫が言った

「はい、紫様の手刀のおかげですっかり酔いが冷めました。」

そう言っつて紫を睨む藍。紫は顔を逸らせた

「まあ、そんな事は良いですけど、孟、いいか？」

「ああ、正直、危険な技だ。もしかしたら藍を傷つけてしまつかもしれない」

俺が言った

「大丈夫だ。私は成功すると信じている」

そう言っつてにっこりと笑う藍

「分かった。じゃあ、このリンゴを頭の上に乗せて立っていてくれ。あの木の所だな」

そう言っつて幹が太い木を指さす

「分かった。」

そう言っつて藍は木の元へと向かう

「さて、役者はそろった。今回の芸は藍の頭の上に乗せたリンゴを

撃ち落とすと言っ物だ。」

「でも、それって永琳とかが出来そうな気がするけど」

霊夢が言った

「だが、その前に一発銃弾を上空に撃つ。その弾が落ちて来たのを見計らって、二段目の弾を撃つ、そして、落ちてきた一発目に当ててリンゴを撃ち落とすんだ。これができるのは外の世界でも数えるほどしかない」

俺が芸の内容を説明するとまたもや周りがざわついた

「じゃあ、始めるぞ。藍、準備は良いな？」

「ああ、いつでも来てくれ」

そう言って藍は頭の上にリンゴを乗せる。因みに帽子は取ってもらっている

俺は無言のまま上空に一発、弾を撃ち放った。今回はハンドガンである。イーグルを使用する。12.7mmという機関銃の弾と同等の弾が空に向かって飛んで行った

俺はその間、第二弾の撃つ瞬間を見極めている。これには精神力が必要になってくる。暫くは目を閉じていた

周りには静寂が広がっている

そして……

俺が言った

「あんな芸当ができるなんてこの幻想郷でもないわよ。孟」

霊夢が言った

「そうか。嬉しいね」

「孟」

藍がやって来た

「藍。ありがとうな。危険な役負ってくれて」

「いや、全部孟のためだ。私は信じていたよ。」

「そうか。今度、礼を返させてもらうぜ」

「そうか。それは楽しみだ」

「さあ、これにて一発芸大会は終了！皆、自由に飲んでていいぜ！」

魔理沙がお開きを言ってまた、宴会状態に戻った。その後も俺の所にはいるんな奴がやってきた

「孟、すごかったわね。私の槍でもあんな芸当はできないわ」

レミリアが言う

「槍自体を見た事ないから分かんが、あれは、結構年月を立てて

修行したからな。苦労したよ」

「でも、本当にすごかったですわ。私もあんな風にできるのかしら？」

と咲夜が言う

「どうだろうな？正直分からんね。あれは俺が改良に改良を重ねた芸当だ。それに実践じゃああんまし役に立たないしな。本当に一発芸としか言いようがないな。」

「そう。でも改めて孟がすごいつてことが分かったわ。これからも射撃のご享受お願いしますわ」

「ああ、喜んで」

「さて、行きましようか。咲夜」

「はい、お譲様」

そう言って戻る二人

俺も、神社の階段に座って酒を飲んでいた

「孟」

「おう、紫か」

「さっきのはすごかったわね。惚れ直しちゃった」

そう言って酒を飲む

「そうか？と言ってもあれは実戦じゃあ役に立たない」

「そうなの？」

「ああ、戦場であんなことして見る。確実にいい的になるだけだ」

そう言って酒を流し込む

「そう。でも、あなたが来てくれて嬉しく思うわ。なんたって楽しいし」

「本当は後者だろ？」

「あら？ばれてた？」

「ああ、バレバレだ」

「残念、でも、嬉しく思ってるのも本当だからね？」

「ああ、分かったよ。」

「じゃあ、霊夢の所に行って来るわ。宴会、楽しんでね」

そう言って霊夢達の所に向かう紫

「藍」

「おう、藍」

藍がやってきた。そして、俺の隣に腰かけた

「ほら」

そう言っただ俺は藍のコップに酒を注ぐ

「ありがとう。ほら、孟也」

「悪いな」

そう言っただ静かに酒を飲んで行く

「藍、本当にありがとうな」

「いや、どういたしまして、私の方こそありがとうだ」

「どういふ事だ？」

「だって……初めて……その……共同作業……
だろ？／＼／」

藍は顔を赤くして言った

「ああ、そつだな。」

俺はそつ言っただ酒を流し込む

「そつだ。頑張った藍には御褒美をあげなきゃな」

「御褒美?・・・!」

俺は無無を言わず藍にキスをした。周りは誰も見てないので安心だ

「プハツ・・・こんな所でキスをするとは・・・大胆だな／＼」

藍が言った

「酒が入ってるからかもな。」

「ふふ、そうか。」

そう言っただけ俺と藍は酒を飲んで行く

後日、文がその一部始終をカメラで抑えているとの情報を聞きつけた孟は、第二基地から完全武装した状態で出撃し、文を急襲した。文がどうなったのかは知る由もない。情報源はエンジニアのNさん（仮名）から

博麗神社の幽霊

俺は霊夢の神社で宴会をした後、そのまま眠ってしまったようだ。ほとんどの参加者は家に帰ってしまい、残ってるのは紫、藍、ちえん、俺と持ち主である霊夢だけとなっていた。

〜朝〜

「う、うゝん おろ？眠ちまっただか〜」

そう言って掛け布団を剥がす、部屋は昔の日本家屋みたいな構造だった

「ふわ〜良く寝たな〜それにしてもなんか、せまつ苦しいな、なんだ？」

そう言って隣を見た

「すう〜すう〜」

横には狐耳の美女が寝てました。しかも、裸と言うおまけつきで・

「……………何故だ？……………俺、何かしちまったか？……………」

俺は頭を抱えた。だって、宴会の時の記憶があやふやになってるんだもん。

「う、うゝん、盂？」

藍が起きた

「あゝ俺、何かしちまったか？昨日……」

「？？どついつ事だ？」

藍は分からないと言った表情だった

「いや……その……は、裸……だからさ……」

「え？あつ、これか、気にしなくていいぞ。私の習慣みたいなものだ」

「え？マジで？」

「ああ、どうしても寝るときは裸になる癖があつてな。それが習慣になつてしまったのだ。すぐに裸になるのはダメか？」

「いやゝそのゝ男がいる前ではならない方がいいと思うぞ。うん、もちろん、俺の前では……いや！何でもない。とにかく、服を着てくれ。俺が収まらん」

そう言つて近くに藍の服があつたので渡した

「ああ、分かった。」

「じゃあ、俺は霊夢の所に行つて来るよ」

そう言つて部屋を出る

く廊下く

「あゝとんでもない起床になったな。まあいいか。眼福と思えば・・・おっいい匂いがするな。こっちか？」

そう言つて匂いのした方向に行つてみる

く台所く

「あら、おはよう」

台所には霊夢がいた

「おはよう。昨日は悪かつたな。泊めさせてもらつて」

「いいのよ。宴会の後なんだし、孟には借りもあるからね。」

そう言つて朝食を作つていく霊夢

「なんか、手伝う事はあるか？」

「んゝそうね。じゃあ、その棚から食器を出してくれる？」

「分かつた。」

そう言つて棚から皿を取り出していく、霊夢はそのまま具材を盛り付けていく、そして、そのまま居間に運んで行く、同時に八雲一家が匂いに釣られてやつてきた

そして、そのまま朝食を食った

「じゃあ、孟、私達は先に戻ってるわね」

スキマを開けて紫が言う

「ああ、ちょっと基地に行ってから俺は戻るから」

「そう。じゃあ、行くわよ。あなた達」

そう言って紫達はそのまま入って行った

「さてっと、霊夢」

「何？」

「ちょっと食後の運動に歩きたいんだが、どこか歩ける場所はあるか？」

俺が言った

「そうね、この神社の裏山は歩けるけど、」

「そうか、分かった。車は置いておいて大丈夫か？」

「ええ、私が見ておくからゆっくりしてきなさい」

そう言って霊夢は本堂の方に入って行く。俺はハンヴィーから護身にイーグルと最近、パチエに作ってもらった魔弾を持って行く

魔弾は俺が頼んで作ってもらった物だ。幻想郷である以上普通の弾が効かない奴なんているだろうしな。

「さて、行くとしますかね」

そう言っただけ歩いていく

↳裏山↳

食後の運動には丁度いい傾斜の裏山だった。しかし

「なにこれ……寒い……」

裏山に入った途端、急に周りの温度が下がったのだ。季節的には春が過ぎて夏に入るうかって所まで来ている季節なのに何故か寒かった

「なんだ、これ？どうなってんだ？」

そう言いつつも俺は山を登っていく

「……そろそろ、出て来てもらえないかね。後を付けられるのは趣味じゃないんだ」

独り言のように言う

「おや……気づいていたのかい？普通の人間にしちゃあ勘がいいねえ」

周りには誰もいないのに何故か、声だけが聞こえてきた。ポルターガイストのようだ

「それと、姿を現しちゃあくれないか？霊夢なんかに見つかったら危ない人とも思われるかもしれないしな」

「分かったよ。」

そう言った瞬間、目の前でいきなり人が現れたのだ。が、普通の人間ではなかった。いや、人間そのものではなかった

目の前には魔法少女が着ていそうな服装に三日月の形をした杖、何より足が無く浮いていたのだ

「あれま〜幻想郷には幽霊なんて物までいるんだね〜」

俺が言った

「あれ、驚かないのかい？それはそれで寂しい物があるね。」

「まあ、ここに来るまでにいろんな物を見てるからな。さすがに驚かなくなった。」

「はっはっは！！！そうかいそうかい、私に驚かないなんてこれで二人目だねえ」

幽霊は笑いながら言った

「他にも居たのか？あんたを驚かない奴なんて」

「いたさ。私の弟子で名前は霧雨魔理沙という少女さ」

「ほ、魔理沙の師匠様かと言う事は、あんたも魔法使いかい？」

「如何にも、私はこの山に住んでる魅魔だよ。」

「俺は戦場孟だ。今は八雲紫の所で世話になってる」

「ほ、う、あのスキマ妖怪の所かい？紫も物好きだねえ」

魅魔はそう言って笑う

「そつだ。孟、ちょっと頼み事をされてくれるかい？」

「なんだ？」

「ちょっと、私と戦わないかい？」

「おいおい、あんた、魔法使いだろ？俺は普通の人間だぜ？どうしろってんだ？」

「大丈夫さ。あたしゃあ、魔法を使うよりも近接近戦の方が得意なんだよ」

「浮いたままで戦うのか？」

「いや、足は出せるよ。ほら」

そう言ってさっきまで浮いていた下半身に足が生えたのだ。

「なるほど、じゃあ、運動がてら付き合おうとしますかね」

そう言つて体を二、三回飛ぶ

「行くよ」

そう言つて魅魔は体を低くして足払いをしてくる。俺はジャンプして避けて、着地したと同時に裏拳をかますが、魅魔はそれを避けて後ろに下がる

「普通の人間にしちゃあ動きがいいねえ〜久々に燃えるよ。」

「まあ、普通の人間より鍛えてるからな。あんたも魔法使いにしちゃあ良い動きしてるぜ」

「そりゃあ、ありがとうございます!」

言つと同時にパンチをしてくる。俺は真正面で受け止めて力押しで返して、そのまま蹴りをかます、反応が遅かったのか魅魔のわき腹にヒットする

「グッ!・・・いいねえ〜この衝撃、堪らないね〜」

魅魔はそれでも笑っていた

「そりゃあ、どうも!」

そう言つて更に俺はパンチを繰り出す、ボクシングで言うならフックとストレートを出していく。わき腹の衝撃がでかかったのか。魅魔は反応が遅くなっていた

「フッ!クッ!」

「どうした、どうした？さっきまでの威勢が無いな！」

俺は安い挑発を掛ける

「なめるな！せい！」

魅魔はそう言ってまっすぐパンチを出してきた

「甘いな。」

そう言って俺はパンチを受け流して同時に回し蹴りをかます

「きゃあああ！？」

魅魔はそのまま吹っ飛んで木にぶつかった

「あちゃ〜やり過ぎたか〜魅魔、大丈夫か？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。今は効いたね〜」

そう言ってわき腹を摩りながら言う

「これで、満足した？」

「ああ、人間に負けたって言うのになんか清々しい」

笑いながら言う

「さて、いい運動もできたし俺は帰るとしますかね」

「そうかい。じゃあ、途中まで送って行って行くのかい？」

「いいのか？」

「ああ、私の我儘に付き合ってくれたんだ。これぐらい容易い事だよ」

「そうか」

そう言っつて山を降りる俺達

俺はそのまま、ハンヴィーで基地に戻って郷田さん達に基地の整備具合を確かめて。夕方頃に八雲邸に戻ってきた

く八雲邸く

「いや、疲れたね。今日の晩飯はなんだろうな？」

そう言っつて林の中をハンヴィーで駆けて行く。

「あら？あそこにいるのって藍か？」

門の所には藍が立っていた

「藍、どうした？そんな所に立って」

俺が言った

「孟、どういう事だ？私に隠れて浮気とは」

藍は笑顔で言うが、目は笑っていなかった

「ど、どういう事だ？だって、俺は藍以外に好きな奴なんていないぜ？」

「じゃあ、どういう事だ！？魅魔という幽霊がお前に会いたがっているんだぞ！？」

「え、魅魔が？」

そう言っただけはそのまま、八雲邸に入って行く。そして、居間に到着した

「為して、お前がここに？」

俺が言った

居間には魅魔がいた。しかも大荷物を持って

「ああ、孟か。あたしもここに住む事にしたよ。よろしくね」

「何故！？だって、俺はお前と知り合って一日も経ってないんだぞ！」

「それは……あれだ……まあ、私の気まぐれって奴だ。」

そう言っただけで赤くなる魅魔

「はっ！？」

後ろを振り向くととても笑顔な藍様がいきました

「ら、藍、これは、違うんだ!」

「問答無用!!!」

「アッ……!!!」

孟はそのまま藍の部屋に連れて行かれた

魅魔は紫の許しを得て八雲邸に住む事になった

海水浴

前回の宴会の後、俺は、博麗神社の裏山で幽霊の魅魔と戦って勝利を収めた。しかし、どういう訳か魅魔はその後、八雲邸に来て一緒に住む羽目になった。おかげで、俺は藍の部屋に連れていかれ・・・
・ガクガクブルブル・・・

〜八雲邸〜

「あ〜・・・昨日はえらい目に合ったな〜」

俺は縁側でお茶を飲みながら言った

「それは大変だったね〜おっお茶がうまい」

隣にいるのは事件を起こした張本人である魅魔

「誰のせいだと思ってるんだよ。全く」

「さて、何のことやら〜」

魅魔はどこ吹く風をしていた

あの後、藍にはしっかりと謝って許しをもらえたので、何とかなかったが「次はないぞ?」と笑顔で言ってきた。正直、怖いです

「あ〜それにしても暑いな〜」

外は快晴、雲一つない、おかげで太陽がジンジンと焼きつける

「私は幽霊だからその辺は大丈夫だがね。」

魅魔が言う

「孟、冷えたお茶はどうだ？」

やって来たのは藍だった。昨日の事があつたつてのに笑顔で言うて来る

「ピツ！？ガクガクブルブル……」

俺は昨日の事を思い出してしまい。つい、魅魔の後ろに隠れてしまった

「おやおや、孟、どうした？」

魅魔は笑いながら俺の頭を撫でる……ひんやりしてて気持ちいい

「むゝ孟、昨日の事をまだ気にしてるのか？」

藍は脹れっ面で言うて縁側に腰掛ける

「それはそうだろうさ。お前さんの部屋から孟の悲鳴が聞こえたほどだ。後を引き摺るのも無理はないと思うさね」

魅魔はそう言うてお茶を飲む

「大体、あなたがここに住むって言うから事件が起きたんですよ！」

藍が言う

「私だって、盃を思つての行動さ。」

「む」

藍は冷えた麦茶を飲む

「だったら、私にいい考えがある。ちよいと耳を貸しな」

「？」

二人は少し離れた所で話していた。俺はそのままお茶を飲みながら縁側に座った

「それは……効果があるのか？」

「大丈夫だよ。大抵の男はこれで、イチコロさ。さっやってみ」

「わ、分かった。孟……」

「？なんだ？」

俺がそう言つて振り向いた

「私が……悪かった……から……その……許して下さいませ……ご主人様／＼」

藍は顔を赤くしながら上目遣いで俺を見つめてくる。恥ずかしそうにしてる藍も可愛いな

「え！？あ・・・その・・・別にいいさ。元はと言えば俺の方に非がある訳だしな。藍は気にしないでいいよ」

俺が言った

「孟／＼／」

今、他人の目からすりゃあ周りには桃色空気が流れてんだろつな

「これで、仲良くできたね」

魅魔が笑いながら言う

「ああ、ありがとう。魅魔」

藍が言う

「いいさ、いいさ、気にしないでおくれ」

そう言って魅魔は俺の反対側に座る。両手に花って奴だ

「そういえば、二人ともこの後は予定、あるのか？」

俺が言った

「いいや、あたしゃあ元々暇だしね。」

「私も今日は特にないな」

二人が答える

「そうか。じゃあ、海に行くとしますかね。他の奴らも連れて」

「おおー、良いじゃないか。海って言うのが分からんが楽しそうな場所だな！」

魅魔が興味深々と言った表情で言う

「孟が行きたいなら、私も付いて行くぞ」

藍も賛成してくれたようだ

その後、俺達は海水浴に行く準備をした。紫や霊夢、魔理沙、慧音、妹紅、紅魔館の連中なども連れてきた。今はCH-47にて、移動している

CH-47は米国で生まれた輸送用ヘリコプターだ。ダンデムローター式と言う物を採用している。ダンデムローターとは前方が左回り、後方が右回りにローターを回すことで回転トルクを互いに打ち消す効果がある。シングルで回すより消費量も少ない

「うおー、こいつはすごいな！」

魔理沙が言う

「ええ、こんな大きな物が飛んじゃうなんてね。」

霊夢も外の風景を見ながら言う

「え、当機は禁煙です。気分が悪くなった方は座席下にある紙袋をお使い下さい」

俺が車内業務を行う

「へ、こいつがヘリコプターかい。不思議な乗り物だね」

魅魔が言う

「私は一度乗っているからな。もう慣れたさ」

藍が言う

二人とも気が合うのか喧嘩はほとんどしない。魅魔も八雲邸に住む事となったので、家事の手伝いなどをしているそうだ。あの二人を見ていると実に微笑ましい

「さあ、もうすぐ、海に着くぞ！」

そう言って近くに設置してあるヘリポートにCH-47を着陸させる

「よし、着陸完了だ。皆、降りていいぞ」

そう言って後方ハッチを開ける

皆はぞろぞろと歩いて行く

「うっわ、すごい匂いだな」

妹紅が言った

「何、慣れればどうってことないぞ。妹紅」

慧音が言う

「お譲様、妹様、日傘をどうぞ」

咲夜が二人に日傘を渡す

「ありがとう。咲夜」

「ありがとう」

「さて、行くとしますかね」

そう言ってへりに積んであったハンヴィーを動かす、主に皆の荷物を輸送する為の物だ

「皆、これに荷物を乗せてくれ。そしたら、先に行っていていいからな。俺も準備があるし」

「分かったわ。なるべく早く来てね？」

紫が言う

そう言った後、皆は喋りながら海岸へと向かう

「さて、俺も準備しますかね」

そう言って自分の荷物をハンヴィーに入れ、ここで、着替えを済ま

してしまう。そして、乗車し、海岸へと向かう

「今日は、のんびりできるな」

そう言いながら運転していくのだった

海水浴2 (前書き)

今回はご都合主義と言つ事をお願いします

海水浴2

俺は、気晴らしに藍や魅魔、その他諸々を連れて、海に出かけた。無事に海まで到着し、皆は一足に先に海へと向かった。俺はCH47の中で着替えてハンヴィーに乗って海岸へと向かった

～海岸～

「ふう～着いた着いた」

俺はそう言ってハンヴィーを降りる

「孟～！」

別方向から紫を筆頭に皆がやってきた

「おう、準備はできてるぜ。皆、あそこの小屋で着替えてこいや」

そう言って指さす

指さした方向には一軒の小屋があり外見は何の変哲もない小屋であった

「孟は着替えないのか？」

藍が言った

「俺はもう着替えてるさ。早く行ってきな。その間に準備しちまうから」

「分かった。」

そう言っつて皆は小屋の方へと向かう

ここの海岸はすでにこちら側の勢力下に置かれており、時折、巡回のために戦闘機が上空を飛んでいたりしていた。他にもSAMなども設置してあるため万が一の戦闘に入っても大丈夫なようになっている

「さてと、パラソルとシートだな。よっこいっしょっと」

そう言っつて後部座席からいろんな物を取りだす、ビーチパラソルなど、海水浴に必要な物を取り出していく

〈数分後〉

「これでよし」と

そう言っつてパンパンと手を払う

大人数が座つても大丈夫なようにシートはでかめのを持ってきている。また、それに合わせてパラソルも大きめのを指してある

とその時だった

「孟」

「ん？おお・・・」

俺が振り返ると皆、綺麗な水着姿に変身していた

紫は布地が少ないスリングショットで色は紫である。藍はビキニにスカートを付けた奴（よく、南の島などで着ている人がつける奴）色は水色だ

魅魔はワンピース型の水着を着ている。足はもちろん生やして、その足を強調するような形になっている

他にも紹介したいところだが時間の都合上省かせてもらおう

「皆、すげー似合ってるな」

今の俺は鼻の下が伸びまくりだろう。おい、今文句言った奴表へ出る。処刑してやるから

「そ、そうか？」

藍が恥ずかしそうに言う

「ああ、それぞれの個性に合ってる感じだな。さっ今日は思いつきり遊ぼうじゃないか」

「「「「「おー！！！！」「」「」「」

そう言って水際に走って行く皆、と言ってもレミリアとか慧音はパラソルに移動して涼んでいた

「おや、孟は行かないのか？」

慧音が言う

「もちろん行くさ。ただ、万が一のために準備運動をしてるだけさ。誰かが溺れるかもしれないしな」

そう言って屈伸をする

「ふふっ心配性だな」

「ほっとけ、慧音こそ行かないのか？」

「ああ、私はここで涼んでる方が良い。時期に遊びに行くさ。」

「そうか」

そう言って皆の方を見る。皆は海岸で水を掛け合ったりしている。とても微笑む光景だ。魔理沙やフランは大和の方に向かっていた。何するつもりだ？

「さて、俺も行くとしますかね」

そう言って皆の方に歩きだす

「それー！」

紫がパシャパシャと水を藍と魅魔に掛けて行く

「キャ！？やりましたね〜紫様〜それ！」

「わぷっ！？こら、藍、私にも掛かってるじゃないか！」

魅魔が文句を言う

「あははは！！！魅魔ったら可哀想ー！」

紫が笑う

「ムッ それならこれでどうだ！」

そう言っつて魅魔が紫に水を掛ける

「わぷっ！？」

思いつきり水を掛かる紫

「キヤッハッハッハ！！！どうだ、参ったか？」

魅魔が笑いながら言う

「これからよ！藍！手伝いなさい！」

「はい！」

「ちよつま！！！」

魅魔が制止を掛けたが二人は躊躇することなく魅魔に大量の水を掛けて行く、連携が良いね

「あれまゝ何かの大会ですか？」

俺が言った

「孟！助けておくれよ！」

魅魔が言う

「無理、あの二人には逆らえないしな。」

そう言ってお手上げのポーズを出す

「あら、孟、あなたも標的に入ってるのよ？」

紫が言う

「へ？」

俺が素っ頓狂な声を出す

「行くわよ！」

「ちよっま！！！」

そう言った瞬間、大量の水が俺に襲いかかる

「あッはッはッは！！！？どう？参った？」

紫が言う

「降参降参、全く連携が良いね！」

そう言って再びお手上げのポーズを出す

「次はあなたの番ね 藍」

「はい、紫様と言えど手加減はしませんよ」

藍が答える

「なら、賞品を付けない？」

「何でしょうか？」

「勝った方が今日一日孟と共にできるってのはどう？」

そう言ってニヤリと笑う

「いいですね。乗りました！」

藍もニヤリと笑う

「……さて、他のところも見てくるか」

そう言って俺はその場を立ち去る

く大和付近く

今度は大和付近に来ていた

ここには魔理沙、霊夢、フラン、妹紅がいた

「いくぜー！！」

魔理沙はそう言って甲板から大きくジャンプする。そのまま勢いよく水に飛び込む

「プハーツ！！！気持ちが良いぜ！」

水から上がってきた魔理沙が言う

「魔理沙、何してんだ？」

俺が言った

「おつ孟、今、飛び込み大会をやってるんだ。結構楽しいぜ！」

笑いながら言う

「そうか、そうか、おつ今度は妹紅が飛び込みみたいだな」

甲板の方を見ると妹紅が立っていた

「行くよー！」

そう言って魔理沙と同じくジャンプして勢いよく飛び込む

「おー良い飛び込みだね」

俺が言った

「孟もどうだ？」

魔理沙が言う

「うーん、そうだな。やってみようかね。」

俺が言った

「そこなくっちゃな！」

魔理沙が言う

「じゃあ、行って来るわ。」

そう言って大和に入っていく

く大和 甲板く

甲板に着くと霊夢とフランがいた

「あら、どうしたの？」

霊夢が気が付いて言う

「魔理沙に飛び込んで見てはどうか？って言われてな」

「ふーん」

そう言って霊夢は海の方を見る

「霊夢！次は私が行くね！」

隣にいたフランが言う

「はいはい、分かったわよ」

「孟！行って来るね！」

「おう、気お付けてな」

そう言った瞬間、フランは助走して大きくジャンプした。そして、そのまま飛びこんで行く

「勢いよく行ったな」

俺が言った

「全く、みんな元気が良いんだから、こっちが疲れて来るわ」

霊夢が言う

「そう言う霊夢だって満更でもないんだろ？」

「そうね〜っと私の番か。じゃっ行って来るわね」

「おう」

そう言うと霊夢はジャンプして飛び込んだ

「なんだかんだいっても、霊夢も楽しんでるな〜まあ、楽しければ良いんだけどな」

そうやって俺は海を眺めて行く

海水浴3

俺は魔理沙に誘われて大和から飛び込みをする羽目になっていた

〜大和〜

「さ〜て、皆、飛び込んだみたいだしな。俺も行くか。でも、甲板から飛び込んで面白くは無いな〜どうするか〜……………そうだ
！」

そう言つて俺は艦橋へと向かつていった

〜魔理沙視点〜

私達は今、飛び込み大会をしてるんだぜ！私、霊夢、フラン、妹紅が飛び込んで残すは飛び入りした。孟だけだぜ

「それにしても、遅いわね〜」

霊夢が言った

「準備でもしてるんじゃないか？孟はそう言うのに念を入れるみたいだし」

妹紅が言った

その時だった

「戦場孟、行きま〜す！」

孟の声が聞こえた。が、甲板ではなくさらに上の方から聞こえた

「魔理沙視点終了」

「ふう、いい眺めだ」

そうやって周りを見渡す

今、俺は大和の艦橋部分に居る。戦艦ならではの高さで周りは海と森が広がっていた

「さて……戦場孟、行きます！」

そうやって右手を上げ、助走をつける

「トウ……！」

そして、ジャンプした。一瞬の浮遊があって、そのまま一気に落下していく

そのまま、海に飛び込んだ

そして、泳ぎながら海面に顔を出す

「プハッ！気持ちいい！」

俺はそうやって海岸へと泳いでいく

「海岸」

「いや、気持ちいいな」

「孟！」

「おう、魔理沙、飛び込んできたぜ」

「すごいな、あんな高さから飛び込むなんて、私には真似できないぜ！」

そう言って笑う魔理沙

「本当よね。普通ならできそうにないのにね」

霊夢が言った

「やればできるもんなんだよ。こう言う事は、さっ元の海岸に行こうか。藍達が待ってる」

俺が言った

皆も同意したのか付いて来てくれた

「最初の海岸」

「はーっはっ」

「ぜーっぜーっ」

藍と紫が息を上げながら立っていた。つか、まだやってたのかよ？

「はいはい、そこまでだ。海から上がったらどつた？唇食にするぞ」
俺が言った

「孟、お弁当なんて持ってきてないわよ？」

レミリアが言った

「大丈夫大丈夫、こんなこともあるつかと……」

そう言っただけの後ろから……

「はい、夏の定番！バーベキューだ！」

そう言っただけのアウトドア用の鉄板や炭、食糧を出す

「おおーっ！！」

皆が声をあげて言う

え？鉄板とかどうしたって？いやあ、人里に行ったら雑貨店に有ったんだよね〜ビックリしたよ〜

「ちょっと、用意するから待ってな」

そう言っただけはパッと組み上げていく、炭を網の下に入れ、持ってきた新聞紙（文々。新聞）を燃やしてゆっくと広げていく

そして、そのまま網の上に肉や野菜を置いていく、ジューツと言う

音を立てながら焼かれていく

「おいしそうね〜」

霊夢が言う

「まだだぞ。いいと言つまでは手を出すなよ」

そう言ってひっくり返していく、肉や野菜はいい色に焦げ目が付いている

「よし、皆、いいぞ〜好きなのを取ってくれ〜」

そう言って全員に皿を渡していく、

皆は箸で好きなのを取って行く

「ん〜、おいしいわね〜」

紫が言った

「そうかそうか、嬉しいね〜」

そう言って俺も肉を頬張る、口の中で肉汁が溢れてくるのが分かる

「ん〜、我ながらいい出来だな〜」

そう言ってさらに食っていく

そうして、無事にバーベキューが終了する。皆はビーチバレーを始

めた。俺はハンヴィーの所で葉巻を吸う

「ふう〜、平和だね〜」

いつまでもこんな風に平和に続けばいいんだけどな〜幻想郷でも外の世界でも・・・平和な事は一番だ。だが、永遠の平和なんて物は無い。戦争はいろんな形で起こる。民族の違い、思想の違い、様々だ。

「本当にいつまでも続けばいいけどな・・・」

「孟、こんな所にいたのか」

やって来たのは藍だ

「藍か、どうした？ビーチバレーやらないのか？」

「私は孟を誘おうと思ってな。でも、ポーっとしていたから声を掛けれなかった」

そう言っつてハンヴィーに背持たれる

「そうか・・・この海を見てるとな。平和だなんて思うんだ。この平和こそが幻想郷でも外の世界でも必要な事だと俺は思ってる」

「そうか・・・確かにそれは言える事だな。だからこそ、早く問題を解決しなければならぬ。そう言っつ事だな？」

「まあ、そうなんだが・・・焦っつやっつても計画通りにはいかぬ、心に余裕を持たぬきゃあ勝てる戦争も勝てないんだ。これは、

俺が軍に入った頃、ある上官から頂いた言葉だ。」

「ずいぶんと、嬉しそうに言っただな？」

「そうか？まあ、俺にとつちゃあ恩師だからな。嬉しいのかもしれない」

「そうか……いい人なのだな」

「ああ」

そう言っただ俺は葉巻を吸う。濃厚な煙を青空へと吹いていく

「孟、私はいつまでもお前の傍にいるぞ。」

藍が言った

「ああ、ありがとう、俺も離れるつもりは無いさ」

「そうか……」

「らん！孟！あなた達も来なさいよー！」

遠くで紫が声を掛ける

「行くところか？孟」

「ああ、そうだな」

そう言っただ俺は藍に手を引かれ、皆の所へと向かったのであった

紅魔館からの依頼

俺らは海水浴を楽しんだ後、それぞれの帰路に着いた。と言っても、へりでそれぞれの家の付近に着陸して見送った。

その後、俺は一旦、基地にへりを戻して、八雲邸に戻った。

〜八雲邸〜

俺は基地からハンヴィーで八雲邸に戻った。ハンヴィーは家のすぐ横に止めた。

「ふい〜長時間の運転は疲れるな〜」

首の骨をポキポキ鳴らしながら扉を開ける

「お帰り、孟」

玄関で待っていたのは藍だった

「おう、今帰ったぜ。ってどうしたんだ？」

俺が言った

「何、夜の晩酌にでも付き合ってもらおうかなって思ってな。今日は月が良く見える」

「そうか。だったら、異論は無いな」

そう言って縁側に向かった

〈縁側〉

俺らは縁側に座って酒を楽しんでいた

「そう言えば、他の皆は？」

「先に寝てしまったよ。よっぽど、遊び疲れたんだろっな」

そう言ってグイッと酒を流し込む藍

「確かにそうだったな」紫と魅魔がいきなし、弾幕ごっこ始めたのが原因だっけ？」

「見る側としてはきれいだったな」たまに流れ弾がこっちに来たけど……」

「そうだったな。それから、レミアアやフラン、魔理沙がおっぱじめ、結局、霊夢が一人勝ちしてたな」

「ははは、確かにそうだな。その時の魅魔と紫の悔しい顔ときたら……プククク……思い出し笑いしちまう」

そう言って酒を飲む

「でも、楽しい一日だったな」

「ああ、また、行きたいもんだ」

「できるぞ。きつとな」

そう言って月見酒を楽しむ俺らだった……

（翌日）

「ふわ～・・・おはよ～」

俺は居間の襖を開けて言った

「ああ、おはよう。孟」

「おはようございます。孟さん」

藍とちえんが挨拶した

「あれ？魅魔と紫は？」

「ああ、紫様はまだ、寝ている。魅魔は用事があるからって言っ
て出かけたぞ」

「ふ～ん」

そう言って藍とちえんと俺の三人で朝食を取った

数分後……

「御馳走様」

そう言って箸を置いた

「はい、お粗末さま」

藍はそう言って食器を片づける

「藍様、手伝います」

そう言って二人は台所に向かう

俺は一人で茶を飲んでいた

「懐かしいな〜じいちゃんの家もこんな感じだったな〜」

外の世界はどうなっているのだろうか？じいちゃんやばあちゃん、それに友達の皆は元気にしてっかな？司令官の親父も今、何してるやら

と感傷に浸っている時だった

「ごめん下さいませ」

玄関から声がしたので俺が向かった

「はいはいっと、なんだ、咲夜じゃん、どつたの？」

玄関にいたのは紅魔館のメイド、十六夜咲夜だった

「孟、あなたに用が有ってきたの。」

「んじゃ、居間の方に移動すっか」

そう言って咲夜を上がらせた

（居間）

「ほい」

そう言っつて茶を渡す

「ありがとう」

「で？話っつてのは？」

俺が言っつた

「パチュリー様からの伝言なの。」

「パチエから？」

「ええ、なんでも、依頼があるそうよ」

「依頼？」

「そう。時間が開けたらでいいから紅魔館に来て頂戴」

「うーん、今日は何かあったけな〜まあいいや、こっちの準備ができたならそっちに向かうよ。」

「ありがとう。助かるわ」

「お互い様だ。あつそうだ。前に紅魔館に置いた武器と弾薬はどこにある？」

「一か所に集めて嚴重にしてあるわ。いつでも持っていけるわよ」

「そうか。ついでだ。それも持って行っちゃおう」

「じゃあ、私はこれで」

そう言つて咲夜は外へと向かう。俺も玄関で見送る

「らん？どこにいる？」

咲夜が出て言つた後、俺は藍を探していた

「ここだ。」

そう言つて声のした方に行つてみると布団を干していた

「おっここにいたか」

「どうした？」

「いや、今日はなんか、予定つて有ったけな？と思つてさ」

「こつちには特にないぞ。何か用事でも？」

「ああ、パチエからなんか、依頼が来た見たいでさ。」

「なるほど、それなら行つて来るといい」

「サンキューそれじゃあ、郷田さんの方に行って来るわ。多分、夕食までには戻ると思うから」

「分かった」

そう言っただけは八雲邸を離れ、ハンヴィーで第二基地の方に向かった

（第二基地）

「到着つと」

そう言っただけで駐車場にハンヴィーを止めた

「おや、孟君か」

郷田さんが現れた

「丁度いい所に、郷田さん、今日ってなんか、予定あります?」

「今日か? 特には無いが、どうしたんだ?」

「いや、紅魔館から依頼が来ましてね。予定が無かったら向かおうかと」

「なるほど、分かった。何かあればすぐに連絡する」

「ありがとうございます」

そう言っただけで郷田さんと分かれた

そして、そのまま、紅魔館へと向かった

（紅魔館前）

ハンヴィーで丁度、紅魔館前に到着した。例の如く美鈴が立って寝ていた

「お〜い、美鈴、寝てると咲夜にナイフを刺されっぞ」

「zzzz zzzz」

「ありやりや、こりやあ完全に落ちてるな。仕方ない」

そう言つてハンヴィーから84m無反動砲を取り出す、こいつは自衛隊で使われているロケットランチャーで正式名称がカールグスタフ、通称カール君である。開発元はスウェーデンのFFV社で開発された。主に対戦車戦闘に使われる。

今回の弾頭は練習用の弾頭なのでそれほど、火力は詰っていない。俺は少し、離れた所から照準を美鈴の一手手前に合わせた

「これで、起きなきゃあ咲夜を呼ぶしかない」

そう言つて引き金を引く

大きな発射音と共にミサイルが突き進んでいく、そして、数秒後、爆発を起こした。もう一度言おう、今回は練習用の弾なのでそれほど威力は無い。したがって妖怪である美鈴にはダメ。ジを喰らわな
い……はずだ

「ふう、さて、どうなったかな？」

そう言っつて着弾地点に向かった。地面はちよつと凹んだだけで周りの塀などにも傷が付いていない。肝心の美鈴は……

「ゲホツゲホツ、なんですか！？敵襲ですか！？」

美鈴は咳き込みながらも周りの状況を把握しようとしていた。さすが妖怪、ロケランでもほとんど傷が付いていない

「よう、美鈴」

「あつ孟さん、もしかして、今は……」

「ああ、俺がやった。ったく、何回寝りゃあ気が済むんだ？そのままじゃあ、路頭に迷うぞ」

「大丈夫です！私は妖怪ですから！」

そう言っつて胸を張る美鈴

「そうか。だったら、咲夜に報告してくるか」

そう言っつて歩き出す

「ままままま待っつて下さい！今のは冗談です！」

「ははは！大丈夫だよ。俺は口が堅いからな。それじゃあ」

そう言っつて紅魔館に入っつて行く

「あつ美鈴！」

「？なんですか？」

「後ろ、気を付けた方がいいぞー」

そう言っつて中に入っつて行く俺、その後、外からは悲鳴が聞こえた

紅魔館からの依頼

俺は咲夜からの伝言でパチエから依頼があるとの事なので紅魔館にやってきた。俺は途中の妖精メイドと挨拶を交わしながら、地下の大図書館へと向かった

く大図書館く

「お〜い、パチエ〜」

俺は広い図書館を歩いていた

「あつ孟さん」

「おつこあか。パチエはどこにいる?」

現れたのはパチエの秘書をしている小悪魔ことこあだった

「パチユリー様なら奥の書齋で読書してますよ。一緒に行きますか?」

「ああ、頼む」

そう言っただけ俺はこあの後を付いていくのだった

「孟さん、ここには何用で?」

こあが言う

「咲夜からの伝言でな。パチエが俺に依頼があるそうなんだ。だから、来たのさ」

「へーそうなんですか。でも、なんででしょうね？依頼って」

「分からんね。それは本人から聞いてみればいいさ」

そう言っている内にパチエがいる書斎に着いた

こあがノックをする

「パチユリー様、本をお持ちしました。それと、孟さんがお見えになつてますよ」

こあがそう言う中から入っていいわと声が聞こえた。なので、入った

「よう、パチエ」

俺が言った

「孟、わざわざ悪いわね」

パチエが言った

「いって事さ。それより、依頼って何だ？」

「ええ、その事なんだけど、魔理沙が本を盗むのよ。ここ最近になつてさらに酷くなってきたの。もう、本が結構な数を持ってかれたわ。」

そう言ってため息をするパチエ

「ああ、前にもそう言うのがあったな。さらに盗みが大胆になって来てるからお灸を据えて欲しいと言う事かな？」

俺が言うとパチエは頷いた

「今日、盗みに来るはずよ。これは間違いないわ。どんな手を使っても構わない。ここを死守して欲しいの。報酬はなんでも出すわ」

「死守って……まあ、依頼を受けたからにはきちっとやらせてもらうさ。相手が死なない程度にな……」

「そう。こつちで支援して欲しい物があれば言ってちょうだい。できる限り出させてもらうわ。レミイにも許可は取ってあるから」

「おいおい、レミリアまで許可してるのかよ。まあ、後方支援があるってのはありがたいがな……まあいいや」

「分かった。どの方向から来るとかは分かるのか？」

「魔理沙は湖の方からやってくると思うわ。遠慮なしにやってちょうだい。こちらがすべて負担するわ」

「わーお、そりゃあすごいな。じゃあ、ちよっくら準備してきますかね。それじゃあな」

そう言って俺は書斎を後にする

〔紅魔館廊下〕

「さ〜て、どんな手で行くかね〜」

俺は歩きながら思案していた。パチエの情報によると魔理沙の主戦力は極太レーザーらしい、魔理沙曰く「弾幕はパワーだぜ!」との事らしい

「とりあえず、対空システムを付けとくか……………」

そう言つて一旦、ハンヴィーの方に向かった

〔紅魔館、庭〕

「あ〜あ〜、こちらは孟、第二基地、応答せよ」

俺はハンヴィーに積んである無線機を使って第二基地と交信を始めた

「こちらは、第二基地、孟隊長どうされました?」

向こうから応答があつた

「ちよつとな、紅魔館の方に持つて来て欲しい武器がある。動かせるか?」

「ええ、お任せ下さい。何を持つてくるのですか?」

「えーと、SAMと……………」

そう言つて注文の品を順次に言つていく。

数分後……

「対空射撃隊、到着しました！限時刻を持って孟隊長の指揮下に入ります！」

そう言つて対空部隊が敬礼する

「わざわざ、ご足労を掛けてすまない。今回は紅魔館からの依頼でな。ある人物の侵入を防ぐ事が目的である。対空部隊は湖付近の森に配備してくれ。合図はこちらで出す」

「了解です！さっそく配備だ！」

そう言つと森の方に配備していく対空部隊、今回はSAMの他にZSU-23-4が一緒に来ている。ZSU-23-4は旧ソ連で開発されたベストセラー対空兵器である。機関砲はレーダー制御され、車体のお皿型レーダーによって目標を探索、攻撃する対空兵器だ

「よし、これで、前線の制空権はもらつたも同然だな。」

「あの～孟さん？私は何をすればいいんでしょうか？」

こあが言った

「こあには一緒に戦ってもらつぞ。」

「ええ！？私、戦闘なんて全く駄目ですよ！？」

こあが言った

「大丈夫だ。即席講座にて、銃の撃ち方をマスターしてもらおう。」

「講座……ですか？」

「ああ、俺が教えるから、こゝあはその通りに従ってくれればいい。」

「はあ、分かりました。できる限りの事はして見ます。」

「よし、その意気だ。じゃあ、付いて来てくれ」

そう言って一旦、中に入って行く

「咲夜」

「孟？何かしら？」

「悪いな掃除中に」

「いいえ、それで、どうしたのかしら？」

「ああ、例の武器はどこにしまつてある？」

「ああ、それなら付いて来て頂戴」

そう言って咲夜は歩いていく、俺達も付いていく

「地下倉庫」

「」

そう言って扉を開ける。中には武器弾薬がたんまりと置いてあった

「孟さん、これは？」

「あが言う」

「これは外の世界の武器で銃って言うんだ。」

「へ〜これが……」

そう言って一番近くに有ったUSPを持つ

「ずっしり来ますね……」

「まあ、初めて持つだろうからな。持つのはそういつじゃあ無い。もっと大型だ」

そう言って奥の方に向かっていく俺、そして、一丁の銃を取りだす

「こいつだ」

そう言って出したのはバレットM99だった。いくつか造られたバレットライフルの中でも命中精度は高く、1000ヤード(915m)での着弾範囲が4.09インチ(103.88mm)という驚異の世界記録を持つ

「うは〜、また、でかい物が出てきましたね〜」

「あが言う」

「こいつは対物ライフルと言ってな。外の世界の装甲車やヘリコプターを撃ち落とせるほどの威力を持ったライフルだ。反動はハンパないぞ。気を抜いたら肩を持ってかれちまう」

「そんな物を素人の私が撃つていい物なのでしょうか？」

「それは最もな事だ。だけど、こあ、パチエから聞いたんだが、体系を自在に変えられるんだって？」

「はい、それはできますけど、あんまり長くは持ちません。30分って所でしようか」

「なるほど……それだと、きついな……他の銃にするか」
そう言ってさらに奥からM14ライフル（スナイパー仕様）を持ち出す

「こつちの銃なら威力は半分にも満たない。こあの今の体系でも十分に使えるはずだ」

「できれば、撃ちたくないですね……」

「大丈夫だ。弾も非殺傷能力のある弾を使うからな。当たったとしても気絶する程度だ」

「分かりました。孟さん、撃ち方を教えて下さい」

「おう、任せろや」

そうやって俺はこゝに銃の撃ち方を教えるのであった

紅魔館防衛線

俺はパチエからの依頼で魔理沙の窃盗を食い止めるべく、紅魔館前に対空火器などで準備を行っていた。助手としてこあを同伴させている

（紅魔館門前）

俺は門の所に来ていた。美鈴は相変わらず眠ったままだ。今度は手を出さない。咲夜からそう言われたので……

「よし、こあ、聞こえるか？」

俺は無線機で言った

「はい、聞こえます。」

こあが答える

「じゃあ、手順通りにな。無理に当てる必要は無い。弾幕を張って牽制するだけで良いからな」

俺が言った。そりゃあそうだろう初めて見る物を触ったりしているのだからましてや、当てる事なぞ素人には無理な話だ。まあ、扱える奴が一人でも二人でも増えたらいい話の事だ

俺はハンヴィーに戻り、一旦、第二基地に戻る事にした。もとろん、魔理沙が見え次第報告しろと言っている

〈第二基地〉

基地に入ると俺は駐車場にハンヴィーを止めた

「おや、孟君」

また、郷田さんに会った

「今日は良く会いますね。」

「そうだな。で、どうした？確か、レミリア嬢の所で依頼があったのではないか？」

「ええ、その事なんですけど、ヘリパイロットとヘリを数機、貸してもらえませんか？終わり次第、返しますんで」

「そうか、今、基地に有るのはブラックホークとアパッチ位だ。他はにとりの所で点検を行っている。」

郷田さんが言った

「それぐらいで十分です」

そう言っつて俺は郷田さんと分かれた。そして、ヘリポートに向かいブラックホーク2機とアパッチ1機を借りた。俺はアパッチの方に乗っている

〈紅魔館上空〉

紅魔館の上空を三機のヘリが通過する

「隊長、目標はどこにいるんですか？」

ブラックホークに乗っている兵士が言った

「まだ、現れていないようだな。気お付けろよ。こっちは俺達の世界の常識は通じないんだ。何事も冷静に対処しろよ」

「了解です」

そう言って通過していた時

「隊長！レーダーに反応がありました！目標は湖上空です！」

無線で兵士が言った

「よし、このままホバリングで待機だ」

俺がそう言った

（魔理沙視点）

「へへっ今日もパチュリーから本を借りるぜ！」

私はほうきに跨って飛んでいた。今日もパチュリーの所から本を借りて自分の糧にするんだ。盗んでいないぞ。あくまで死ぬまで借りてるだけだぜ

「ん？紅魔館が妙に騒がしいな」

そう言った瞬間だった

「おわつと!?!」

突然、空気が爆発した

「なんだ?なんだ?何が起こったんだぜ!?!」

その次の瞬間、次々と私の周りで爆発が起きていた。匂いを嗅ぐと火薬の匂いが周辺に充満していた。

「こいつはなんかヤバいぜ!一気に切り抜けて紅魔館に入ろう!」

そう言ってスピードを上げる私だった

〈魔理沙視点終了〉

「よし、撃ちまくれ!ただし、当てるなよ!相手は生身なんだ」

俺は無線で指示を出す

「孟さん、魔理沙さんですか?」

こゝが言ってきた

「ああ、前方の湖に現れた様だ。現在、対空部隊が射撃を行っているのが見えるだろうか?」

「もしかして、こっちに来てます?」

「うーんと、避けながら行ってるからもう少々掛かりそうだな」

「そうですか。」

そう言っつて無線を切るこゝあ

「さて、俺が相手をすると思いますかね。ブラックホークは二手に分かれて例の武器を準備してくれ。」

「了解です」

そう言っつて離れるブラックホーク、俺はそのまま進んで魔理沙と正面から立ち会う形になった。

「まずは、小手調べと行きますか。」

そう言っつて訓練用のペイント弾を撃った。と言っつても航空機用なので当たれば死にはしないが気絶程度で収まる

魔理沙も気づいたのかすぐさま避けた

「おおう、さすがに速いな。なら、これならどうだ？」

そう言っつて追尾ミサイルを魔理沙に合わせる。もちろん、実弾ではなくコシヨウなどの人間にとって苦手な物を詰め合わせた暴動鎮圧用の弾頭を使用している

「それ！」

そう言っつてスイッチを押した。ミサイルは勢いよく発射され、魔理

沙に向かっっていく……魔理沙も回避行動を取りミサイルから逃げようとしている

「さてさて、見物と行こうか」

ミサイルは後を付いていくように飛んで行っている。魔理沙もそれに負けじと逃げている

「おろ？急に变化したな……って、こっちに来るのか！？しかも、何か構えてるな……まさか!？」

そう言った瞬間、魔理沙の手元が光り出し光が俺に向かって発射された。パチエの言ってたレーザーだろう

「この野郎!!」

そうやってへりを横に回転させた。普通ならそのまま失速して落ちてしまうのだが、孟はギリギリの所で機体を戻した。その瞬間、真横に光が通って行く

「危ねえ〜あれ食らってたら、俺、確実に落ちてたな」

そう言った瞬間、魔理沙のいた方から爆発が起きた。ミサイルが爆発したのだろう。魔理沙の周辺にはコシヨウや粉末状のからしなどが散布されていた

さすがの魔理沙もこれには答えたようであらうとしている

「よし、ブラックホーク例の武器を」

そう言った瞬間、ブラックホークが現れ、ミサイルを発射する。今度のは中にネットを詰め込んだ物だ。よく、防犯などに使用されている。

そのミサイルが魔理沙に届く直前に爆発しネットが魔理沙を覆うように広がる。魔理沙はそのまま捕まってしまい落ちて行き、湖に落ちた

「よし、救護班、すぐに向かえそのまま紅魔館に連れて来い」

俺は無線で指示を出し、一旦、紅魔館へと戻った

（紅魔館広場）

俺は広場にアパッチを下ろした。他の部隊は先に基地に帰らせている

「お疲れ様、孟」

出迎えてくれたのはレミリアだった

「おう、任務は完了したぜ。魔理沙はどうする？」

「こつちで任せて貰っていいわ。と言ってもフランの遊び相手でしょうね」

「ほう、その程度で良いのか。」

「ええ、その程度で良いのよ。」

「そうか。さて、パチエの所に向かうか。魔理沙がどんな顔をして

るか。楽しみだな」

「そう。私も付いて行くところかしら」

そう言っただけ俺らは紅魔館内へと入って行った

魔理沙の家から本を回収……

俺は魔理沙を捕まえて、レミリアにその身を渡した。レミリアは満足そうに二階へと上がって行った。俺はそのまま地下に潜り、パチエのいる図書館に向かった

〈図書館〉

「さてさて、魔理沙はどうなってますかね〜」

そう言っただけ扉を開ける

「やめる！やめてくれ！」

入った瞬間の第一声がこれだった

「WOW、なんてカオスだ」

俺が言った

魔理沙はどこから下げられてるか分からないロープに縛られており、その下にはグツグツと煮えている釜があった

「おい、パチエ何やってるんだ？」

俺が言った

「見ての通りよ。お仕置きだわ。こうでもしないと魔理沙はやめな
いからね。こゝゝ」

パチエが説明をした

こゝはハンドルを回していく、すると、魔理沙の縛ってあるロープが徐々に下げられていく

「う、うわああ!!!!」

魔理沙の悲鳴が木霊する

「おお、過激にやるんだな……米国の拷問でもこんなやらないぞ」

「べいこくって言うのが分からないけど、なんか、勝ち誇った気分ね」

「まあそんなことはどうでもいいとして、これで、任務完了だろ？」

「ええ、と言いたいところだけど、孟、もう一つ、頼まれごとをしてくれないかしら？」

「なんだ？」

「魔理沙の家に行って盗まれた本を取り戻してきて欲しいの。」

「なるほど、でもこいつの家って魔法の森とか言う人間にとってけっこうヤバい場所じゃなかったか？さすがに装備もなしではきついがな……」

そう。魔理沙の家は魔法の森とかいう場所にあり、その森は常人で

は数秒も耐えられないほどの猛毒が撒き散らされているらしい。人間ならコロッと逝ってしまう場所だ

「それは、解決済みよ。前に宝石を渡したわよね？」

「ああ、あのパーティの時か。一応、着けてはいるんだけどね」

そう言っつて胸元から宝石を取り出す

「それは、体を守るようにも作つてあるの。だから、毒とかを吸つてもなんともないように動けるの」

「はあゝそんな機能も持つてるんだな」

「で、どうかしら？」

「それなら、安心だ。できれば、6個ぐらい同じのが欲しいんだがな……」

「分かつたわ。ちょっと待っててくれる？こゝゝ、魔理沙の見張り頼んだわよ」

そう言っつてパチエは奥へと消える

ゝ数分後ゝ

「よし、これだけあれば十分だな」

俺は紅魔館を出てハンヴィーに背を預けながら葉巻を吸っていた

「こちら、孟だ。飛行場、誰がいるか？」

俺は無線機で呼びかけた

「はい、こちら雪穂です。どうかしましたか？孟さん」

出てきたのは雪穂ちゃんだった

「ああ、ブラックホーク一機と四人ぐらい募って紅魔館に来てくれるか？」

「分かりました。ちょっと待ってて下さい」

そう言っつて無線を切った

数分後、一機のブラックホークがやってきた。指定通り、四人だ

「お待たせしました。孟さん」

降りて来たのは雪穂ちゃんだった

「わざわざ、すまないな」

「いえ、それで作戦内容は？」

「ああ、これから魔理沙の家に向かって本を輸送するんだ。」

「本……ですか？」

「ああ、でもその家は魔法の森って言う人間にとってヤバい場所

なんだ。常人なら一発で逝けちゃうぞ」

「それって、あれですか？眼鏡を掛けた少年が歌を歌いながら二階の窓から飛んで行くって言う」

「待て、そっちの逝けるじゃないぞ。少なくとも昇天はしないだろうな。別の意味で昇天はするが……」

「ああ、なるほど、でもどう対処するんですか？」

「皆にはこれを身に付けて貰う」

そう言ってさっきの宝石を出した

「わあ、きれいな宝石ですね。でもこれにどんな効果が？」

「まあ、簡単に言うと御守りみたいなものだ。これを身に付けてるだけでさっき言った危険を回避できる」

そう言って皆に宝石を渡す

皆、半信半疑と言った感じで宝石を見る。その後、身に付けて行く

「よし、行くとするか」

そう言って全員、ブラックホークに乗り込む

エンジンが出力を上げて行き、メインローターが加速していく、そして浮遊し上昇していく

「よし、俺がナビゲートする。パイロットそのまま進んでくれ」

そう言って俺達を乗せたヘリが飛んで行く

魔法の森 上空

「よし、ここら辺だろ。パイロット着陸してくれ」

そう言つとヘリはゆっくりと降下し、着陸した

「よし、各自、武装を確認せよ。ここは俺達の領域じゃないんだからな。妖怪だろうと奴らだろうと襲いかかってくる者は排除せよ」

そう言つと全員が「了解」と言つ

俺はアイコンタクトで進んで行く、離れないように互いを視認できる距離で進んで行った

魔法の森

「ここか……」

しばらく進んで行くと一軒の家があった。まさしく魔女らしい家だった

「さて、いっちょ励みますか」

そう言つてドアを開ける

「WOW」

俺の第一声だった。中はゴミ屋敷より酷い状況だった。あらゆる本が積み重なり、その他にも趣味で集めてきたようなガラクタが散乱しており、床が見えない状況だった

「これは……酷いですね」

雪穂ちゃんが言った

「そうだな……まるで何年も掃除してないような感じだな。まあいいや、さっさと終わらそう」

そう言っただけで動いていく

「え〜と、パチエの本は……あつた……これ全部か？」

そこにはてんこ盛りの本が積み重なっており、一つでもずらせば、簡単に崩れそうな感じだった

「やれやれ、どんだけ盗んだんだよ。魔理沙」

ここにはいない主に向かって言った

「孟さん、これ全部ですか？」

「ああ……さっさと運びまおう」

「……そうですね」

そう言つて回収作業に入る。その後は大変だった。一人の兵士の手
違いでてんこ盛りだった本が崩れてグダグダの展開となつてしまつ
た。結局、すべてを運び出すのに3時間ぐらいはかかっただろう。
気が付けば日が傾いてる頃だった

「お、終わった〜」

一人の兵士が言った

「やっと……終わったな……」

俺が言った

「早く……お風呂に入りたい」

雪穂ちゃんが言った

「パイロットもう一仕事だ。頑張ってくれ」

「……はい」

パイロットはそう言つて操縦席に座る。俺らもその後続いた

〈紅魔館〉

紅魔館上空に着くと、広場では咲夜が他の妖精メイドを連れて待っ
ていた

「お帰りなさい。孟」

咲夜が言った

「ああ、今帰ったぜ……たくっただけ盗んだよ。魔理沙^{あいつ}は……」

俺が愚痴った

「後は任せて頂戴。あなた達はゆっくり休んでいいから」

「ああ、そうさせてもらう。雪穂ちゃんご苦労だったな。帰ったらゆっくり休んでくれ」

「はい、そうさせてもらいます」

そう言ってブラックホークに乗り込み、去って行った。俺も、ハンヴィーに乗り込み八雲邸に向かい発進した

余談だが、魔理沙は翌日になって紅魔館から解放された。その時にはいつもの魔理沙ではなく紫の魔理沙になっていたと言っ

パチエ、何をしたんだ？

第二基地 案内

俺は魔理沙の家で本を回収した後、八雲邸に戻った。そこで、一日の疲れを癒し翌日を迎えるのであった

く八雲邸く

「ん〜！良い朝だ〜」

俺は縁側で背伸びをした。背骨がボキボキとなる

「孟、おはよう」

「おう、藍おはよう」

声を掛けてきたのは藍だった

「孟、紫様が呼んでいたから後で部屋に来て欲しいだそうだ」

「了解、とりあえず朝飯にしますか」

そう言っつて居間の方へと向かう

く居間く

「あつ孟さん、おはようございます」

ちえんが元気よく挨拶をする

「おはようちえん」

俺も挨拶をした

そして、座る

いつも通りの朝、いつも通りの朝食を食べる

俺はその後、紫の部屋に向かった

「紫、いるか？」

俺は襖を叩いた

「あつ孟、入って来て」

許可が下りたので襖を開ける

「どうした？なんか有ったのか？」

俺が聞いた

「孟、ちょっとお願いがあるんだけど」

「なんだ？できる限りかなえてやりたいが」

「あのね、孟の世界の武器や兵器を調べたいって言う人がいてね。なんとかできないかしら？」

「銃とかそういう類の物を調べたいってことか？ずいぶん熱心な

「奴もいるもんだな」

「そうなのよ。後世に伝えたいらしくて」

「ふむ……なるほど、分かった。いいぜ」

「ほんと!?!」

「ああ、こっちは世話になりっぱなしだからな。俺の世界の武器と
かを見て満足できるならいくらでも見せるぜ」

「ありがとう! 孟」

紫ははしゃぐように言った

「で? その調べたい奴ってのは誰なんだ?」

俺が言った

「人里に住んでいる阿求っていう名家のお嬢様よ。」

「そいつだけなのか?」

「ええ、そうだけど?」

「ふむ……一人じゃあ寂しい感じがするな……他の奴
も連れて行くか?」

「え? いいの?」

「ああ、さつきも言ったがこっちは世話になりっぱなしだ。いくらでも見せてやるよ」

「分かったわ。じゃあ、私の方で集めとくわ。準備ができたら呼びに行くわ」

そう言っつて紫はスキマの中に入って行く

「まあ、郷田さんに連絡しておくか」

そう言っつて俺は自室に戻り、無線機で事の詳細を郷田さんに伝えるのであった

〜一時間後〜

俺は自室で銃の整備を行っていた

「盃」

「おわつとー!？」

俺は思わず部品を落としそうになった

「あら、邪魔したかしら？」

「いや、ビックリしただけだ。突然、後ろから声がするんだもん」

「ごめんなさい。それと、例の件だけど人が集まったわ」

「了解。どこにいるんだ？」

「門の付近に集まってもらってる」

「了解、じゃあ連絡しますか」

そう言っつて無線機で迎えをよこす

「何をしたの？」

「ああ、人数は結構な数なんだろう？だったら、大量に人員を運べる車両を呼んだだけさ」

「そう。じゃあ、玄関に行きましょうか」

「ああ」

そう言っつて俺らは門の所に向かった

（門）

門の所に向かうとガヤガヤと声が聞こえてきた

「おう……こりゃあまた、ずいぶん集めたな……」

俺が言った

目の前には魔理沙や霊夢の他に文やにとり、椀がやって来ていた。その他にも俺とは面識のない子までやって来ていた。もちろん、八雲家の皆も行くみたいだ

「私が誘ったら皆が行くって言うから」

そう言っていると一人の少女が出てきた

「あなたが孟さんですか？」

「ああ、そう言う君は阿求かな？」

「はい、人里に住んでいる阿求と申します。今日はよろしくお願ひ
しますね」

そう言ってお辞儀をする

礼儀正しい子やなー

「そっかそっか、じゃあ今日はいろんな質問をしてもらっていいか
らな」

そう言っていると向かえが来たようだ

林の奥からS d・K f z・251が三両やってきた。

この車両は旧ドイツ軍が使用していた中型兵員輸送車だバリエーシ
ョンが豊富で輸送車以外の機能も持っている

運転しているのは郷田さん、パイパー軍曹、雪穂ちゃんだ

「お待たせ、孟君」

郷田さんが言った

「お待ちしておりました。では、行きましょうか」

そう言っただけならはそれぞれの車両に乗り込む、俺は先頭車両に乗り込んだ。藍や紫、ちえんも一緒だ。

「では、郷田さん、お願いします」

俺が言った

「分かった。少しばかり揺れるからな」

そう言っただけならは第二基地へと向かって行った

〈道中〉

俺らはゆったりと揺らされながら走っていた。他の皆は乗った事が無いから揺れるたびに女の子らしい反応を見せてくれる。可愛い

「孟さん、こんなに揺れる物なんですか？」

阿求が言った

「ああ、と言っただけでもすべてが同じじゃないからな。揺れない物もあるし空を飛ぶ機械だってあるんだ」

「なるほど」

俺は説明をした。阿求は分かってくれたのか頷くように返事をした

「おつ紅魔館が見えてきたな・・・そろそろか」

え？時間軸がおかしいって？気にしない気にしない・・・一休み一休みだよ。一休さんも言ってたじゃないか

「さあ、紅魔館を過ぎたらもうすぐだぞ」

そう言っただけ俺らはさらに奥に行った

（第二基地前）

俺らは第二基地の前までやって来ていた。基地の門は頑丈に閉められ、蟻一匹通さんとする構えであった。第二基地は俺らの襲撃によって多少の損傷はあった物の、にとりが材料を提供してくれたおかげで低コストで収まっている

「うわぁ・・・ここが・・・」

阿求が口を開けながら言った

「ああ、俺達の第二の故郷と言っても良いかな。さっ中に入るぞ」

そう言っただけ俺らは中に入って行くのだった

第二基地 案内

俺らは阿求とその仲間を連れて第二基地を案内する事になった。まあ、皆に外の世界の兵器を知ってもらいたい機会だと思つて案内する事にした

└第二基地 訓練場┘

基地の近接戦闘を訓練する訓練場についた。指揮しているのはパイパー中将だ

「ほれ！そんなんでは相手に倒されるぞ！」

そう言つて自分の相手である新兵を倒す

「ぐわ！」

「孟さん、ここは何をするとこなんですか？」

阿求が言った

「ここは、銃以外の戦闘、つまり、相手との距離が近い状態での戦闘を想定した。訓練だ。これによつて相手が近い距離にいる場合、銃を使うより素手やナイフで使つた方が早い事を新兵に教える場所なんだ」

俺が説明する

「おう、孟、今日は大所帯だな！」

パイパーが言う

「この子らが基地の中を案内して欲しいって言うんで案内している所なんですよ。それより、兵の錬度はどんな感じですか？」

「ああ、最初こそはおどおどしてたが、今じゃあちゃんと対応できてるな。後は互いでやらせれば意識が高まるだろうな」

「そうですか。それじゃあ、引き続きお願いしますね」

「おう、任せとけ！」

そう言って再び訓練に戻る

「それじゃあ、次に向かうか」

そう言って次の訓練場に行った

〈射撃場〉

射撃場ではホープが監督している

「そのままじゃあ、相手には当たらないぞ！姿勢を低くしてしっかりと狙いを定めるんだ」

「了解です！」

そう言って兵士はバースト射撃で当てて行く

「孟さん、ここは的当てですか？」

ちえんが言った

「はっはっはっは！面白い例えだな。ここは射撃訓練場と言って俺達が使っている銃を使って訓練をする場所なんだ」

「へ〜そうなんですか〜」

そう言っつて防弾ガラス越しに射撃場を見る。これは安全のためにならなうなっている。

「ホープ、訓練状況はどんな感じだ？」

俺がマイクで言った

「ああ、こっちはなんとかって感じだな。まだまだ、修正すべき課題があるな。孟、見本を見せてくれよ」

ホープが笑いながら言った

「そうだな……」

「孟、見せてあげれば？この子も見てみたい感じだし」

紫がそう言っつて阿求を指さす

「ぜひ、見せて下さい！」

目を輝かせがなら言っつ阿求

「そうか。だったら見せようかね。ホープ、今使ってるのはなんだ？」

「よし来た。今はM16を使ってるぜ。弾薬を銃は用意してあるぞ」

「じゃあ、見せようかね」

そう言ってヘッドセットを装着し中に入った

「さあ、いつでもいいぜ」

「あいよ」

そう言ってセットしてある的を動かす、的はだんだんと小さくなっていく

「発砲許可」

ホープが言った瞬間、三点バーストで一気に撃つ、しっかりと銃を抑え込んでしまえば銃口が外れる事は無い

「よし、終わり！」

そう言ってM16を置いた

「さして、結果は？」

ホープが機械を動かしての的を近づける

「ふむ、満点だな」

そう言つて的を渡す

的はきれいに中心を貫いていた

「いや〜満足満足」

俺はそう言つて皆のいる部屋に戻つた

「孟さん、どうでした？」

阿求が言つた。

「ああ、こんな感じだ」

そう言つて結果を見せる。皆、おお〜と言いながら歓声を上げる

「相変わらずすごいな。」

藍が言つ

「そうね。この幻想郷でもそうはいないでしょうね」

霊夢が言つ

「てか、銃を使えるのっているのか？幻想郷に」

俺が言つた。今まで会つた奴ら（敵軍以外）は皆、魔法やら術やら見た事が無いからだ

「そうね〜探せばいそうな気がするけど……」

「私も見たこと無いぜ」

魔理沙が言う

「そうか。じゃあ、次行ってみるか」

そう言っつて射撃場を後にする

〈戦車訓練場〉

ここは戦車訓練場だ。監督は郷田さんである

「戦車は個人で動かす物じゃない！チームで動かすんだ！その事を肝に銘じとけ！」

郷田さんの怒声が聞こえた

丁度、チーム戦をしてるらしく、四両の90で訓練しているみたいだ

「郷田さん」

「ん？おお！孟君、案内かね？」

「ええ、見学させて頂きますよ」

「ああ、自由にしてくれたまえ、そちらのお客さんもゆっくり見学して行きたまえ」

「はい、そうさせて頂きます」

阿求が答える

「ここは戦車訓練場と言つてな。あそこに見える乗り物を動かす事によつて実戦訓練を行うんだ。」

そう言つて窓の外に見える90を指さす

「ほえ、あんな大きなものが動くのか」

魔理沙が言う

「ああ、動かすのはそんなんでもないぞ。覚えちまえば簡単に動かせる。」

俺が言つた

「孟さん、さつき実戦訓練と言いましたが、弾は何を使つんですか？まさか、本物を使う訳じゃあ・・・」

文が言つた

「良く感づいたな。そうだ、実際の弾は使わない。模擬弾と呼ばれる訓練用の弾があるんだが、そいつは車体を傷つけずに済む物なんだ。だから、訓練も活発にできる」

「なるほどなるほど」

そう言つて手元のメモ帳に書き込んで行く

「因みに戦車以外の車両もここで訓練する事が多い。まあ、土地もそこまで広くは無いしな」

「大変ですね」

「まあな、本来ならきちんとした場所で訓練させるべきなんだが、外は俺たち以外にも妖怪という物があるしな。仕方あるまい。さて、次へ行くとしますか」

そう言つて次の場所に向かう

〈飛行場〉

俺達は基地の半分を埋めている飛行場に着いた。ここには戦闘機以外にもヘリなども駐機してある。大きなハンガーがあるのも一つの特徴だ

「うわ〜広いな〜」

妹紅が言った

「ここは、飛行場と言つてな戦闘機やヘリが離発着する場所なんだ。ここで、弾薬の補給も行う」

そう言つと一機の戦闘機が離陸していく俺達の目の前をものすごい速さで過ぎて行くと同時にジェットエンジンがうねりを上げる

「キヤッ!? な、なんだ!？」

慧音が言った。他の皆も耳を押さえている

「ああ、今のはジェットエンジンの音だ。戦闘機などに積みまれている動力源さ。こいつがなきゃあ飛行機は飛べない」

俺はそう言ってハンガーの方を見る

「あっちに有るのがハンガーと言う物であの中で飛行機を整備したりするんだ。まだ、中に残ってるかもしれないな。行ってみよう」

そう言って俺達は中へと入って行く

「ハンガー」

「うわ〜大きいな〜」

魔理沙が言う

「ああ、飛行機を入れるからな。これくらいの大きさなきゃあいけないんだ。おつと言い物が駐機してあつたな」

そこに有ったのはB - 29爆撃機だった。こいつはアメリカ軍で作られたプロペラ爆撃機であるが世界で初めて高高度爆撃が行えた爆撃機である。広島や長崎に原爆を落としたのもこいつだ

「うわ〜大きいですね〜」

ちえんが言った。みんなはB - 29の周りを見ながら様々な話を話していた

「孟さん、実に大きいですね」

阿求が言った

「ああ、こいつは爆撃機だからな。爆弾を大量に運びながら移動するんだ。結構な量を搭載できるぞ」

俺が説明する

「実は、後世に伝えるために本を作っているんですが、ここに有ることも載せていいですか？」

阿求が言う

「ああ、もちろんさ。好きに乗せてくれていい、こいつらは使えば良い物だが逆に恐ろしい物だ。その事もちゃんと書きこんでくれ」

「分かりました」

「そろそろ、昼時か。食堂に案内するかな」

そう言いながら俺は皆の様子を見た

派手なのは好きか？

俺は皆を第二基地に案内している途中、昼時になったので食堂で昼食を取らせることにした

（食堂）

俺らは食堂に着いた

「うわ〜広いですね〜」

文がカメラで写真を撮りながら言った

「ああ、この基地にいる全員が入れるように設計してあるからな。さあ、その席に座ってくれ」

そう言って大きなテーブルを囲むように皆が座った

「腹へこだぜ」

魔理沙が言う

「今回はサービスだ。普段なら金を取るが俺が奢るよ」
そういつと皆からおおーという声が上がった

「さすが、孟ね。太っ腹だわ」

霊夢が言う

「さて、食事が来るまで皆の話を聞こうか？」

俺が言った

その後は雑談も含めていろんな話が出てきた。俺が特に面白いと感じたのは”異変”についてだ。この異変というのは中々面白い物で殺さない代わりに弾幕というもので決着をつけるそうだ。これは幻想卿ができてからずっと続いている物らしい

表の世界でもそういう風に決着を付けられればいいが、そんな訳にもいかない

主義の違いや人種差別、それぞれの人々がそれぞれの理由で争いを起こし、双方に多数の死者を出している。

「でね。レミリアったら異変が終わった後、私の処に来るようになってね」

霊夢が言う

「何言ってるのよ。霊夢が寂しそうに見えたから私が行ってあげてるのよ。そこんと勘違いしないで頂戴」

レミリアが言う

「どつちが寂しがりなんだか。」

俺が言った

「孟さん」

「ん？どうした。妖夢」

話しかけてきたのは妖夢だった

「いえ、幽々子様が駄々をこねられて……」

苦笑いしながら言う

「ああ……もう少しで来るはずだから、待っててもらえる？」

「分かりました。善処しますね」

そう言って席に戻る妖夢

数分後、食事がやってくる

「うほー！おいしそうだなー！」

魔理沙が言う

「皆、好きに食ってくれていいぞ」

そう言って皆が食べ始める

一人は隣の奴と喋りながら食べたり、一人黙々と食べる奴がいたり、一人はものすごい勢いで……え？

幽々子の皿を見るとものすごい勢いで食糧が無くなっていく、まる

で、早送りを見てるかのようになんて……

「妖夢、幽々子はいつもこんな感じなのか？」

隣で食っている妖夢に聞いた

「はい、いつもこんな感じなんです……おかげで食費がものすごい事になる時もあります」

そう言っただけのため息をつく妖夢……苦労してんだな

「そうか……まあ……頑張れよ？何かあったら援助してやるから……」

そう言っただけで肩に手をおく俺

「はい……ありがとうございます」

その時 食堂でいきなりベルが鳴り響く

他の兵士たちが慌ただしく動いていく

皆は驚いて食事を止める。

「な、なんだ!？」

魔理沙が言う

「おや、敵さんがやってきたか……」

「孟！何が起こったの！？」

紫が言う

「敵襲だ。司令室に向かおう」

そう言っつて皆を冷静に案内する

（地下司令室）

司令室は地下に設置されているため、中枢がやられることはない

「孟さん、ここは？」

阿球が言う

「ここは、司令室って言っつてな。各部隊に指揮を出す場所だ。さて、敵さんは？」

俺は近くの兵士に聞いた

「はっ！未確認機が多数東からやって来ています！なお、情報によると大型輸送機と戦闘機の編成のようです！」

兵士が大きな声で言う

「分かった。モニターに映像は出るか？」

「はい！」

そうやって近くのコンピューターを弄る。その後、正面のでかいモニターに映像が出た

「こいつは……見たことのない輸送機だな……」

モニターには輸送機らしき航空機が出てきたが如何せん、大きすぎるのだ現実ではまず、あり得ないからだ

「な、なんなの？これ」

紫が動揺しながら言う

「んー……まだ、正体がわからないしな。」

その時、味方の戦闘機がやってきた

「孟、すぐに撃墜するか？」

通信してきたのはバートレットだった

「いいや、まずは勧告をやってください。まあ、言うこと聞くとも思いませんが」

「了解だ」

そうやって通信を切る

（sideバートレット）

俺は愛機のF-4で複数の部下を連れて空に上がった。数分後、未

確認機が姿を現す

「なんだ……こいつは……」

部下のチョッパーが言う

確かに規格外の大きさだ。エンジンだけで12基あることが確認できる

「よし、チョッパー、降服勧告をやってくれ」

俺が言った

「どうか、ご自分で」

「俺は人見知りの癖があつてな。」

「チエツ、あーあー、未確認機に告ぐ、貴官は我が空域に侵入した。」

チョッパーが降服勧告を行う

「いいぞ」

「そちらが了承したらギアダウンしろ。」

そう言ったが未確認機は高度を下げる気配がなかった

「隊長、降りませんね」

グリムが言う

「まっ予想はできていたがな、全員、いつでも撃てるようにしておけ、あの大きさを並大抵の攻撃じゃあ落ちん」

そう言つと各機から了解と言つた

「ん？後部ハッチが開いてるな……」

誰かが言つた

次の瞬間

巨大な光が我々を襲つた

「まずい！全員、退避しろ！」

俺が言つた

すぐに動いたが、何機かは遅れたようだその直後、光を浴びた機体が火を噴いた

「主翼が……落ちる……！」

「メイデー！メイデー！射出ハンドルも動かない……！」

「仲間が……落ちていく……」

グリムが言う

「くそ！あの光は光学兵器か！全員、当たらない様に散開しろ！」

「隊長！ハッチから敵機が出てきます！」

「応戦しろ！！」

そう言っつて俺も目の前の敵機を倒すことに集中した

（side out）

（司令室）

皆は今の映像で固まってしまったようだ

「あの光………」

紫が言った

「ああ、侵攻戦で奴らが使ってきた光学兵器だろうよ。ったく、飛行機に搭載してるのってアリかよ」

俺が言った

「孟、どうするのだ？」

藍が言っ

「迎撃するに決まってるだろう。先に手を出したのは向こうだ」

そうやって無線機を取り出す

「全員に告ぐ、現在、基地上空で襲撃があつた。戦闘員は直ちに配置されたし、尚、航空要員は全機出撃すること」

そう言うと今度は別のサイレンが鳴る。今度は戦闘配置の音だ

「さて……まずは腕試しといきますか。対空ミサイル、発射
！！」

そう言うと基地に配置されている対空ミサイルが巨大な飛行機めがけて飛んでいく、あれだけ大きいとなると回避することはまず不可能だ

そして、すべてのミサイルが飛行機にあたり爆発を起こした

「よし！」

誰かが言った

「目標はどうなった？」

「少々、お待ちを……な、何！？」

観測員が言う

「どつした！？」

「モニターを見てください！」

そう言ってモニターに飛行機がある場所を映す

「んな馬鹿な……」

ミサイルを食らったはずの飛行機は悠々と飛んでいた。傷一つ残さず

「おいおい……どんだけの装甲だよ。無理ゲーにも程があんぞ」

俺が言った

「飛行機の中から多数の戦闘機が発進しています！」

「空中空母だと!？」

「敵、さらに増えました!地上目標です!」

別の隊員が言う

「何!？」

別のモニターには、戦車や装甲車といった機甲部隊が現れた

「まずいな……郷田さん!」

「何かね!？」

「地上目標も出ました!そちらを迎撃してください!」

「了解だ!」

そう言って無線を切る

「孟……私たちも手伝うわ」

紫が言う

「……分かった。頼めるか？」

「ええ、任せておきなさい。この幻想卿に喧嘩を売ったことを後悔させてあげる。藍、行くわよ」

そう言って司令室を出る

「さて、俺も戦闘準備するか。」

「孟さん！私はどうすれば!？」

阿球が言う

「すまないな。阿球、ちつとばかり待っててくれ。ここにいれば安全だからな」

そう言って阿球の頭を撫でる

「はい、気を付けてください」

そう言って俺は部屋を後にする

戦争だ……

俺は皆の案内をしている時、奴らの奇襲を受けた。しかも超大型の輸送機を持ってきたから困ったもんだ。おまけに地上部隊もこちらに進軍中とのことだそうさ。

俺は紫達と共に迎撃するべく地上へと向かった

く地上へ

表に出ると兵士たちが慌ただしく動いていた。

「急げ！急げ！敵は待つてはくれないぞ！」

雪穂ちゃんが新米を連れて動いているようだ。

因みに彼女は教育係として新米達をしごいており、新兵からは仮面をかぶった女王として有名だそうさ。なぜかって？彼女は普段の時に銃を持った時では性格が違ってしまっらしい。実際に訓練内容を見ていないけど……その分信頼は厚いらしい

「孟、誰に言ってるの？」

紫が言った

「気にするな。情報公開だ」

俺が言った

「そう。今回はなんでもいいの?」

「ああ、やり方は任せる。この基地が守れれば万々歳だ」

「そう。藍、私たちはいつも通りいくわよ」

「分かりました。」

そうやって二人はスキマに入って行く

「さてと、私たちも行きましょうかね。魔理沙」

「了解だぜ!」

「私たちも行くわよ。咲夜」

「はい、お嬢様」

そうやって霊夢、魔理沙、レミリア、咲夜が飛んで行く。いいなあ。
・・・飛べて

「さて、俺も準備しますかね」

そうやって武器庫から龍神とM240Bを取り出して門のほうに向かった。門ではすでに銃撃戦が始まっているようだ

「た、隊長

!!!」

一人の兵士が言った

「慌てるな！焦らず、落ち着いて敵を撃つんだ！」

俺はそう言っつてM240のバイボットを立てて銃撃する。ばら撒く程度だが牽制にはなる

「わ、分かりました！」

兵士はそう言っつてM16A2で射撃する。このM16は後期版なので、フルオート機能が取り除かれセミオートと三点バーストのみの仕様になっている。そのため、弾薬の節約にもなる

「孟君！聞こえるかね！？」

無線から郷田さんが連絡してきた

「ええ、聞こえますよ！どうかしましたか！？」

「奴らと交戦に入ったのだが、敵さんは重戦車ばかりで構成されている。こっちはエイプラムズと90しかない！どうにかして支援はできんかね！？」

なんとまあ、こりゃあきついね。上空ではいまだにあの巨大な輸送機が飛んでおり多数の戦闘機を出している。おまけに戦車は郷田さんとパイパーが乗る二両だけ、他は整備中だ。対戦車兵も動いてはいてくれているが如何せん、数が少なすぎる

「分かりました！少しだけ時間をください！」

「頼む！できれば早くしてほしい！」

そう言っつて俺は無線を切った

「この守りは頼んだぞ！雪穂ちゃん、指揮は任せた！」

「了解！」

そう言っつて俺はその場を離れた

俺が向かった先はヘリポート、そこには一機のアパッチが駐機してある。俺は迷うことなくそれに飛び乗り、エンジンを起動させる

アパッチはゆっくりと浮上し、そのままさっきの場所まで戻って行った

「紫、聞こえるか！」

俺は紫に無線機を事前に渡しておいた。使い方はもちろん、教えた

「紫よ。どうしたの？」

「お前らはどこにいる？」

「私たちは前線まで来ちゃってるわね。霊夢とかもこっちにいるわ」

「そうか。一旦、後退してくれ。俺がああの重戦車どもに攻撃を加える」

「分かったわ」

そうやって無線を切った

〈幻想住人side〉

私はスキマを使ってヒット&ウェイを行っていた。霊夢、魔理沙、レミリア、咲夜、藍と一緒に前線のほうにまで来ている

「霊符、二重弾幕結界!!」

霊夢の弾幕が木々を薙ぎ倒して敵をさらけ出す

「恋符、マスタスパーク!!」

魔理沙の八卦楼からどでかいレーザーが戦車達を襲う

「神槍、グングニル」

レミリアの槍が敵兵を貫いて

「幻符、殺人ドール」

咲夜のナイフが敵兵を刺していく

「式弾、妖銃の極み」

藍の銃が縦横無尽に発砲してあらゆる物を破壊していく

そして、私、八雲紫のスペルカード

「幻符 最終装甲列車」

スキマから巨大な装甲列車が通過しあらゆる物を飛ばしていく

本来なら殺戮用ではなく、私たちの世界のルールでやるのだが今回は奴らが悪い、この幻想卿を奪いに来るなんて千年も早いわ

孟が言っている地上部隊はまだまだ来るみたいね。久々にこんな戦争ができて嬉しいわね

その時だった。孟からもらった無線機がなった

「紫よ」

「俺だ。紫達はどこにいる？」

孟が連絡してきたようだ

「私達？前線の方まで来ているわ。」

「そうか。じゃあ、ちよいと下がってくれ。俺が攻撃をする。」

「分かったわ。いつ位に着くの？」

「着きそうになったら連絡するよ」

「分かったわ。」

そう言って無線を切る

「それにしても、こんな戦争はあの月の侵略以来ね。あの時は盛大

に負けたけど、今度はそうはいかないわ。必ず、この幻想卿を守ってみせる」

そう言って私はカードを宣言していくのだった

「紫様、ここら辺は片付きましたよ」

藍が言う

「そう。それなら、少し休憩しましょうか。孟がこっち向かってきてるみたいよ」

「そうですか。なら、他の皆にも伝えてきますね」

そう言っつて藍は霊夢達の方に向かった

「さあ、どうなるかしらね？」

私は青い空を見上げながら言った

〈幻想卿住人 side out〉

防衛成功

俺はアパッチで紫達のいる前線へと向かっていた。空にはいまだに大きな輸送機が飛んでいた

（機内）

「さうて、まずは連絡だな」

俺が言った

「俺だ。紫、聞こえるか？」

「ええ、聞こえるわ。着いたの？」

紫が返事をする

「俺の分は残しておいてくれたか？」

「メインディッシュは無いけど、デザートは残してあるわよ」

「デザートが良いね」

そう言った瞬間、いきなり鉄の雨が降って来た。カノン砲による砲撃支援である。もちろん、俺達のではない。敵さんのだ

「キャッ！？な、なに！？」

無線越しに紫が言う

「砲撃だ！俺達のじゃない！どっかに身を隠すんだ！妖怪と言えど怪我程度じゃ済まない！！」

俺が言った

「分かったわ！スキマに避難する！片づけたら教えて！」

そう言って無線を切る

「さうて、どっから撃って来てる？」

俺は辺りを見回した。すると、少し小高い丘の向こうから煙が出ているのが見えた。

「あそこか！」

俺は回り込むように移動した。そこにあつたのは遠距離からでも砲撃できるような巨大カノン砲だった。

「敵さんは何でもかんでもかくすればいいと思ってるのか？とにかく、削除だ」

そう言って機体を傾けてミサイルを発射する。このミサイルは無誘導なので落下地点は正確な場所には落ちない。つまり、自分の操作で向かわせなければならぬのだ

「いつけー！ー！！！！！！」

ミサイルはまっすぐ飛んで行き、カノン砲やその周りで爆発が起き

た。砲弾に当たったのか巨大な爆発を見せてカノン砲は機能停止した

「よし、完了！紫、こっちは始末したぞ。」

「良かったわ。敵はあんなのを作っていたのね。厄介だわ」

紫が言う

「そうかもな。今から向かうよ。どこにいる？」

「そうね、こっちでもへりの音が聞こえてるから結構近いのかもね。
あっ見えたわ」

俺が下を確認すると紫達がこっちに向かって手を振っていた

俺はすぐさま降下し、着陸した

「よし、」

俺が言った

「孟、良く来たわね」

紫が言った

「ああ、とは言っても、殆ど紫達がやってまったようだな」

そう言って周りを見る。周りには重戦車などが無残にも破壊されていた。敵兵も口を開かない骸となっていた

「よくもまあ、ここまでやったな。」

「そうかしら？それでも、そんなに力は出していないわ。他に敵はいないかしら？」

「地上は全滅したろう。後はあの輸送機だけだな」

輸送機は悠々と飛んでいたが、周りの戦闘機はバートレット隊によって落とされたようだ

「あれは落とせないの？」

霊夢が言った

「ああ、ミサイルが効かないんだ。少なくとも通常の兵器じゃあな。特別製の武器は無いかね」

その時だった。無線がなる

「孟君、無事かね？」

相手は郷田さんだ

「ええ、こっちはもう大丈夫ですよ。地上部隊は殲滅しました。」

「そうか。残るはあのデカブツだけか？」

「はい」

そう言った時、急に輸送機が反転して基地から離れるように飛んで

行った

「あら？孟、あれ離れていくわよ」

レミリアが言う

「本当だな。作戦が不可能になったから引き上げたんだろう。とにかく、俺達の勝ちだな」

そう言って離れていく輸送機を見る

その後、俺達は基地に戻った。

「あつ指令室に阿求達を残したままだ」

俺はそう言って基地の中に入って行く。郷田さんは基地の損害を見ているようだ

～指令室～

「ういゝす」

「孟さん、無事だったんですね！」

阿求が言う

「当たり前だ。これでも死地は潜りぬけてんだ。そう簡単にやられるつもりはないぞ」

俺が言った

「ですが、あれは一体……?」

「ああ、あいつらは最初の頃、連続事件が出てたろ?あれの犯人だ」

「そうなんですか!?では、幻想郷を奪いに来たってのは……」

「

「ああ、本当なんだろうよ。だが、俺はここが気に入ってるんだ。そう簡単に譲るつもりはないさ。紫達の恩返しにもなるしな」

「孟、それは言わない約束でしょ?」

紫が言う

「あれ?そうだったか?まあいいや。とにかく案内を続けるとしますか」

そう言っつて基地ツアーを再開した俺達であった

その後は何の問題も無く無事に終わらせる事が出来た

「では、孟さん、今日はお世話になりました」

阿求が言う

「ああ、こんなことならいくらでもてを貸すぜ。いつでも来ていいからな」

「はい」

その後、皆は車両に乗り込んで人里方面へと向かって行った

「ふう〜これで、一件落着ね」

紫が言う

「ああ、とりあえず紫達も先に帰ってるよ。俺はここの状態を調べてから帰るから」

「分かったわ。藍、ちえん、行くわよ」

そう言ってスキマの中に姿を消す紫達だった

「さて、被害状況はどうなってるかね？」

そう言って再び、基地の中に入って行く俺だった

守矢神社

俺達は第二基地を防衛した後、そのまま分かれる事になった。それから数日は奴らの襲撃は起こる事はなかった

く八雲家く

「ふわく暇だな」

俺は自室で横になりながら雑誌をよんでいた（紫が取り寄せてくれた）

俺は雑誌を机の束になっている本の上に積んだ

「ちよつくら散歩でもしてきますかね。暇だから人里に行った後にとりの所にも寄るか」

そう言って自室を離れた

く玄関く

「おや、孟。どうしたんだ？」

台所から藍がやって来た

「いや、暇だから散歩にでも行くつもりだ。夕飯までには帰るよ」

俺が言った

「そうか。私も暇だったら付いて行けるのだがな」

藍が残念そうに言う

「らん、ちよいと手伝っておくれよー！」

奥から魅魔の声が聞こえた

「ああ、分かった！じゃあ、孟、行ってらっしゃい」

「ああ、行ってきます」

そう言っただけは玄関を出た

く人里く

俺は人里までハンヴィーを飛ばした。え？途中が無いって？時間省略だ。気にするな

「おや、孟」

「おう、慧音ってあら？バートレットと一緒にか」

そこには慧音と買い物袋を持ったバートレットだった

「おや、孟」

「おや、何やってんの？」

「いやなに、休暇を取って人里まで来たら慧音と会ってな。こうして買い物を手伝ってるのさ」

バートレットが言う

「なるほどね。それじゃあ、邪魔ものは退散するとしますか」

「お、おい！ななな何ってるんだ！孟！」

慧音が顔を赤くして言った

「ははは！！！じゃあな！」

俺はその場をさっさと去ってしまったのだ

「さうで、なんかお土産でも買っとくかな？」

俺は藍とちえん、紫や魅魔へのお土産を買おうと思い、近くの店に入った

「いらっしゃい！おや、孟さんじゃあないですか！」

店の親父が言った

「親父さん、なんか良いのはあるかい？」

俺が言った

「おっ？女物ですかい？」

ニヤニヤしながら言う

「ああ、そんな所さ」

「そうですね、これなんかどうでしょうかね？」

そう言って親父さんが出したのはイヤリングだった

「こいつはどうしたんだい？」

「ええ、人里より少し離れた所に香霖堂という店があるんですけど、そこから買い取りました」

棚にはきれいなイヤリングが勢揃いしていた

「ほ、う、結構、いい物ばかりだな。値は張るかい？」

「ええ、と言ってもそこまで高い物じゃないですしね。」

「そう……じゃあ、夕方までにちょっと見繕ってくれるかな？はい、代金」

「分かりやした。それでは後ほど」

そう言って俺は店を出た

俺はそのままハンヴィーで人里を離れ、妖怪の山へと向かった

く妖怪の山く

妖怪の山では相変わらず力の差が分からない野裸妖怪が襲ってきたが、ちよつとばかり脅かすとすぐさま退散した

俺はそのまま川に向かった。大きな滝の前でハンヴィーを止めた

「おゝい、にとりゝいるか？」

俺は滝の裏に行きにとりを呼んだ

「ほゝい、いるよゝ入って来てゝ」

呼ばれた方向に行くにとりと椀が将棋を打っていた

「あつ孟さん、こんにちわ」

椀が気づいてあいさつする

「おう、二人は将棋の真つ最中か」

「うん、で、孟はどうしたの？」

にとりが言う

「いや、暇だから散歩に来ただけだ。特に用事は無いさ」

「ふゝん、だったら「王手」ひゅい!？」

将棋台を見ると椀の駒がにとりの駒を取っていた

「あららゝよそ見なんかしてるから……」

俺が言った

「あの、孟さん」

「なんだ？ 椛」

「前に言つて無かつた事があるんですけど、妖怪の山の山頂にある守矢神社の神様お二人が孟さんに会いたがつていましたよ？」

「守矢神社？ 聞いたことが無いな……まあ、暇だし行つてみるとしますかね」

「あつそれでしたら私が案内しますよ。付いて来て下さい」

そう言つて椛が外へと出る

「あくにとり？ そんなに気を落とすなよ？」

挫折ポーズをしているにとりに向かって言った

「ありがと孟」

俺はそのまま外へと出た

外では椛が待つていた

「では、行きましようか？」

「おう、じゃあ、車に乗れよ。道案内はよろしく」

そう言ってハンヴィーを指さした

「車ってなんですか？」

椀が言う

「ああ、車ってのはガソリンを燃料に走る移動用の車両の事だ。疲
れずに済むぞ」

「わあゝ素敵ですね！では、お言葉に甘えさせてもらいます！」

そう言ってハンヴィーの方へと走って行く椀

「さてさて、山の神様はどんなもてなしをしてくれるのかね？」

そう言いつつ俺もハンヴィーに向かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3776r/>

軍人が幻想入り

2011年12月11日02時53分発行